



Acronis True Image Data Protection

目次

1 はじめに	5
1.1 Acronis True Image Data Protection とは	5
1.2 システム要件とサポートされるメディア	5
1.2.1 最小システム要件	5
1.2.2 サポートされるオペレーティング システム	6
1.2.3 サポートされるファイル システム	6
1.2.4 サポートされるストレージ メディア	7
1.3 Acronis True Image Data Protection のインストール	7
1.4 Acronis True Image Data Protection のアクティブ化	9
1.5 Acronis True Image Data Protection のアップグレード	11
1.5.1 Acronis True Image のアドバンス機能	12
1.6 メンテナンス、テクニカルサポート、および製品アップデート	14
2 はじめに	15
2.1 ユーザーインターフェイスの言語	15
2.2 システムの保護	15
2.2.1 手順 1: コンピュータのバックアップ	16
2.2.2 手順 2. ブータブル レスキュー メディアの作成	17
2.3 PC のすべてのデータのバックアップ	18
2.4 ファイルのバックアップ	19
2.5 コンピュータのリカバリ	21
2.6 ファイルとフォルダのリカバリ	22
3 基本的な概念	24
3.1 基本的な概念	24
3.2 ファイル バックアップとディスク/パーティション イメージの違い	28
3.3 完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ	29
3.4 バックアップと復元に関する FAQ	32

3.5	FTP 接続	34
3.6	認証設定	35
3.7	バックアップファイルの命名	35
3.8	ウィザード	36
4	データのバックアップ	38
4.1	ディスクとパーティションのバックアップ	38
4.2	ファイルやフォルダのバックアップ	40
4.3	バックアップ オプション	41
4.3.1	スケジュール設定	43
4.3.2	バックアップスキーム	47
4.3.3	バックアップ処理の通知	53
4.3.4	バックアップからの項目の除外	56
4.3.5	イメージ作成モード	58
4.3.6	バックアップ処理前後に実行するコマンド	58
4.3.7	バックアップの分割	59
4.3.8	バックアップのベリファイ オプション	60
4.3.9	バックアップの予備コピー	61
4.3.10	リムーバブル メディアの設定	61
4.3.11	バックアップのコメント	62
4.3.12	エラー処理	63
4.3.13	バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定	64
4.3.14	コンピュータのシャットダウン	65
4.3.15	バックアップ処理のパフォーマンス	65
4.4	バックアップの操作	66
4.4.1	バックアップ処理メニュー	67
4.4.2	バックアップリストアイコン	68
4.4.3	バックアップのベリファイ	69
4.4.4	バックアップの保存先の分散	70
4.4.5	既存のバックアップをリストに追加する	72
4.4.6	バックアップとバックアップ バージョンの削除	72
5	データの復元	74
5.1	ディスクとパーティションの復元	74

5.1.1	クラッシュ後のシステムの復元	74
5.1.2	パーティションとディスクのリカバリ	88
5.1.3	ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームの復元について	90
5.1.4	BIOS での起動順の並び替え	94
5.2	ファイルとフォルダの復元	95
5.3	リカバリ オプション	97
5.3.1	ディスク復元モード	98
5.3.2	復元の前後に実行するコマンド	98
5.3.3	ベリファイ オプション.....	99
5.3.4	コンピュータの再起動	99
5.3.5	ファイル復元オプション	100
5.3.6	ファイル上書きオプション	100
5.3.7	復元処理のパフォーマンス	101
5.3.8	リカバリ処理の通知	102
6	ツール	103
6.1	ブータブル レスキュー メディアの作成	103
6.1.1	Acronis メディア ビルダ.....	104
6.1.2	必要なときにレスキューメディアを確実に使用できるようにする	108
6.2	Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ	113
6.3	セキュリティとプライバシーのツール.....	115
6.3.1	システム クリーンアップ	116
6.3.2	ハードディスクの消去方法	125
6.4	イメージのマウント	126
6.5	イメージのアンマウント	128
7	トラブルシューティング	129
7.1	Acronis システム レポート.....	129
7.2	クラッシュ ダンプの収集方法	130
7.3	Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラム	131
8	用語集	135

1 はじめに

1.1 Acronis True Image Data Protection とは

Acronis True Image Data Protection は、コンピュータに保存されているすべての情報を安全に守るための統合ソフトウェアスイートです。バックアップがあれば、データの損失、重要なファイルやフォルダの誤削除、ハードディスクの完全クラッシュなどの障害や災害が発生した場合にコンピュータシステムをリカバリできます。

主な機能:

- レスキューブータブルメディア 『103ページ 』

はじめに

2ステップの簡単な手順でコンピュータを保護する方法については、「システムの保護 『15ページ 』」を参照してください。

1.2 システム要件とサポートされるメディア

1.2.1 最小システム要件

Acronis True Image Data Protection を実行するには次のハードウェアが必要です。

- 1 GHz の Pentium プロセッサ
- 1 GB の RAM
- ハード ディスク上に 1.5 GB の空き領域
- ブータブル メディア作成用の CD-RW/DVD-RW ドライブまたは USB フラッシュ ドライブ
- 1152 x 720 の画面解像度
- マウスまたはその他のポインティング デバイス (推奨)

1.2.2 サポートされるオペレーティング システム

Acronis True Image Data Protection は、次のオペレーティング システムでテスト済みです。

- Windows 7 SP1 (全エディション)
- Windows 8 (全エディション)
- Windows 8.1 (全エディション)
- Windows 10
- Windows Home Server 2011

Acronis True Image Data Protection では、Intel または AMD ベースの PC オペレーティング システム (Linux® を含む) を実行するコンピュータ上のディスク/パーティションをバックアップしてリカバリするためのブータブル CD-R/DVD-R を作成することもできます。(インテル ベースの Apple Macintosh はサポートされていません。)

1.2.3 サポートされるファイル システム

- FAT16/32
- NTFS
- Ext2/Ext3/Ext4 *
- ReiserFS *
- Linux SWAP *

ファイルシステムがサポート対象外または破損している場合でも、Acronis True Image Data Protection ではデータをセクタ単位でコピーできます。

* Ext2/Ext3/Ext4、ReiserFS、および Linux SWAP のファイル システムの場合は、ディスクまたはパーティションのバックアップ/リカバリ処理のみがサポートされます。Acronis True Image Data Protection では、これらのファイルシステムに対してファイルレベルの処理 (ファイルのバックアップ、復元、検索だけでなく、イメージのマウント、イメージからのファイルの復元) を実行できません。これらのファイル システムが採用されているディスクやパーティションへのバックアップを行うこともできません。

1.2.4 サポートされるストレージ メディア

- ハードディスク ドライブ*
- ソリッド ステート ドライブ (SSD)
- ネットワーク上のストレージ デバイス
- FTP サーバー**
- CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R (2 層ディスクの DVD+R を含む) 、DVD+RW、DVD-RAM、BD-R、BD-RE
- USB 1.1 / 2.0 / 3.0、eSATA、FireWire (IEEE-1394) および PC カード ストレージ デバイス

* ダイナミック/GPT ディスクを操作する場合の制限事項:

- ダイナミックボリュームをダイナミックボリュームとして復元する際に、手動でサイズを変更することはできません。

** FTP サーバー側がパッシブモードでのファイル転送を許可している必要があります。FTP サーバーに直接バックアップする際に、Acronis True Image Data Protection はバックアップを 2 GB のサイズのファイルに分割します。

バックアップ元のコンピュータのファイアウォール設定では、ポート 20 および 21 が TCP プロトコルと UDP プロトコル用に開いており、機能するようになっていることが必要です。Windows のルーティングとリモート アクセス サービスは無効にする必要があります。

1.3 Acronis True Image Data Protection のインストール

Acronis True Image Data Protection のインストールと起動

Acronis True Image Data Protection をインストールしてアクティブ化するには、次の手順を実行します。

1. セットアップ ファイルを実行します。
2. 以下をご確認ください。
 - 使用許諾契約の条件。

- Acronis カスタマー エクスペリエンス プログラムの参加条件。
3. 両方の条件に同意される場合は、**[インストール]** をクリックします。

Acronis True Image Data Protection がシステム パーティションにインストールされます (通常は C ドライブ)。
 4. インストールが完了したら、**[アプリケーションを開始]** をクリックします。[Acronis True Image Data Protection のアクティブ化] ウィンドウが開きます。
 5. **[サインイン]** タブで、Acronis のマイアカウントの資格情報を入力し、**[サインイン]** をクリックします。

Acronis のマイアカウントを登録していない場合は、**[アカウントの作成]** タブに移動し、登録フォームに入力して、**[アカウントの作成]** をクリックします。

注意:64 桁のプロダクトキーをお持ちの場合は、この手順をスキップできます。

6. プロダクト キーを入力して、**[アクティブ化]** をクリックします。

16 桁のプロダクト キーを使用して Acronis True Image Data Protection をアクティブ化するには、インターネット接続が必要です。64 桁のフル プロダクト キーは自動的に取得され、アクティブ化されます。

Acronis True Image Data Protection **に問題がある場合のリカバリ**

Acronis True Image Data Protection が動作しなくなったりエラーが発生した場合は、ファイルが破損している可能性があります。このような問題に対処するには、まずプログラムを復旧する必要があります。そのためには、Acronis True Image Data Protection インストーラを再度実行します。インストーラによりコンピュータ上の Acronis True Image Data Protection が検出され、修復か削除の確認を求められます。

Acronis True Image Data Protection **の削除**

Acronis True Image Data Protection コンポーネントを削除する手順は、次のとおりです。

1. インストール済みのプログラムおよびアプリケーションのリストを開きます。
 - **[スタート]** → **[設定]** → **[コントロール パネル]** → **[プログラムの追加と削除]** の順に選択します。
 - Windows Vista をご利用の場合は、**[スタート]** → **[コントロール パネル]** → **[プログラムと機能]** の順に選択します。

- Windows 7 をご利用の場合は、[スタート] → [コントロール パネル] → [プログラムのアンインストール] の順に選択します。
- Windows 8 または Windows 10 をご利用の場合は、[設定]アイコンをクリックし、[コントロール パネル] → [プログラムのアンインストール]の順に選択します。

2. 削除するコンポーネントを選択します。

3. 使用しているオペレーティングシステムに合わせて、[削除]または[アンインストール]をクリックします。

4. 画面の指示に従います。

削除を完了するために、コンピュータの再起動が必要になる場合があります。

1.4 Acronis True Image Data Protection のアクティ ブ化

Acronis True Image Data Protection を使用するには、インターネット経由でアクティブ化する必要があります。有効化しない場合、製品の使用可能期間は 30 日間です。この期間にアクティブ化しないと、リカバリ以外のすべての機能が利用できなくなります。

Acronis True Image Data Protection のアクティブ化は、お使いのコンピュータ上で、またはお使いのコンピュータがインターネットに接続されていない場合は他のコンピュータから実行できます。

インターネットに接続されているコンピュータ上でのアクティブ化

コンピュータがインターネットに接続されている場合、製品のアクティブ化は自動的に実行されます。

Acronis True Image Data Protection をインストールするコンピュータがインターネットに接続されていない場合、またはプログラムが Acronis アクティブ化サーバーに接続できない場合は、サイドバーの [アカウント] をクリックし、次のいずれかの操作を実行します。

- **もう一度試す** - Acronis アクティブ化サーバーに再度接続する場合は、このオプションを選択します。
- **オフラインでアクティブ化** - インターネットに接続されている他のコンピュータから手動でプログラムをアクティブ化できます（以下を参照）。

他のコンピュータからのアクティブ化

お使いのコンピュータがインターネットに接続されていない場合は、インターネットに接続されている他のコンピュータを使用して Acronis True Image Data Protection をアクティブ化できます。

他のコンピュータから製品をアクティブ化する手順は、次のとおりです。

1. コンピュータに Acronis True Image Data Protection をインストールして起動します。
。
2. サイドバーの **[アカウント]** をクリックし、**[オフラインでアクティブ化]** をクリックします。
3. [Acronis True Image Data Protection のアクティブ化] ウィンドウで、次の簡単な 3 つの手順を実行します。
 1. **[ファイルに保存]** ボタンをクリックして、インストール コードをファイルに保存し、ファイルの保存先としてリムーバブル メディア (USB フラッシュ ドライブなど) を指定します。このコードを紙に書き留めておいてもかまいません。
 2. インターネットに接続されている他のコンピュータで、
<http://www.acronis.com/activation/> を開きます。画面上の指示に従って、インストール コードを使用してアクティブ化コードを取得します。取得したアクティブ化コードをリムーバブル メディアのファイルに保存するか、紙に書き留めます。
 3. お使いのコンピュータで、**[ファイルから読み込む]** ボタンをクリックし、アクティブ化コードを含むファイルへのパスを指定するか、紙に書き留めた情報をボックスに入力します。
4. **[アクティブ化]** をクリックします。

「アクティブ化されている製品の数が多すぎる」問題

考えられる原因：

- **Acronis True Image Data Protection がインストールされているコンピュータの数が最大数を超えている。**

たとえば、コンピュータ 1 台分のプロダクトキーを所有するユーザーが、2 台目のコンピュータに Acronis True Image Data Protection をインストールする場合などです。

解決策：

- 新しいプロダクト キーを入力します。新しいプロダクトキーをお持ちでない場合、Acronis ビルトインストアで製品版を購入できます。
- 製品がすでにアクティブ化されているコンピュータから新しいコンピュータにライセンスを移動します。そのためには、ライセンスの移動元のコンピュータを選択します。選択したコンピュータで Acronis True Image Data Protection が無効化されることに注意してください。
- **Windows を再インストールしたか、コンピュータのハードウェアを変更した。**

例えば、ご使用のコンピュータのマザーボードまたはプロセッサをアップグレードしたとします。この場合、ご使用のコンピュータは新しいコンピュータと認識されるため、Acronis True Image Data Protection は無効化されます。

解決策：

ご使用のコンピュータで Acronis True Image Data Protection を再度有効化するには、リストからそのコンピュータを古い名前で選択します。

1.5 Acronis True Image Data Protection のアップグレード

Acronis True Image または Acronis True Image Cloud を購入するには:

1. Acronis True Image Data Protection を起動します。
2. サイドバーの **[アカウント]** をクリックし、**[アップグレード]** をクリックします。ビルトイン ストアが開きます。
3. 購入するライセンスを選択し、**[今すぐ購入]** をクリックします。

4. 支払い情報を指定します。

ビルトイン ストア

Acronis True Image Data Protection には、アプリ内ストアがあります。

アプリ内ストアにアクセスするには、**[アカウント]** タブに移動して、**[アップグレード]** をクリックします。アプリ内ストアが開き、利用可能な購入オプションがすべて表示されます。

1.5.1 Acronis True Image のアドバンスト機能

ご使用の製品エディションでは、Acronis True Image のアドバンスト機能を使用できません。ご使用のエディションを Acronis True Image や Acronis True Image Cloud にアップグレードすると、この機能を使用できます。アップグレード後、次の機能を使用できます。

- **オンラインバックアップ**

オンラインバックアップを使用すると、ファイルやディスクを Acronis Cloud に保存できます。ご使用のコンピュータが紛失や盗難に遭ったり、または破壊されたりしても、データは保護され、必要に応じてデータを新しいデバイスに完全復元できます。

- **データのアーカイブ**

データのアーカイブを使用すると、サイズの大きいファイルや使用頻度の低いファイルを Acronis Cloud に移動できます。この方法を実行するたびに、選択したフォルダ内のデータが解析されて、Acronis Cloud へのアップロード対象となる推奨のファイルが示されます。アーカイブするファイルやフォルダを選択できます。アップロードが完了すると、ローカルにコピーされたファイルは削除されます。アーカイブしたファイルを後で開いたり変更する場合、ファイルをローカルストレージデバイスにダウンロードしたり、Acronis Cloud でアクセス、管理することができます。

- **複数デバイスのデータ保護**

家族間のデータ保護は、クロスプラットフォーム統合ソリューションです。Acronis の同一アカウントで共有するすべてのコンピュータ、スマートフォン、およびタブレットの保護ステータスを追跡および制御することができます。これらのデバイスのユーザーは同じアカウントにサインインする必要があるため、通常は家族全員がユーザーとなります。通常、家族の全員がこの機能を使用できます。現在では、家族の中に技術的な経験をお持ちの方がいらっしゃることも多くなっています。そのような方は、家族のデータを保護するのに適任です。複数のデバイスの保護状況の追跡および制御には、ウェブベースの Web

管理画面を使用します。これはインターネットに接続しているコンピュータであればアクセス可能です。

- **データの同期**

すべてのコンピュータで同じデータ（ドキュメント、写真、ビデオなど）を保持できます。いつでもどこでも簡単にデータを利用できます。ファイルを電子メールで自分に送信したり、常に USB ドライブを携帯する必要はなくなります。

必要なだけ同期を作成でき、さまざまなバージョンの同期ファイルを Acronis Cloud に保存できます。必要なときにいつでも前のファイルのバージョンに戻すことができます。また、アプリケーションをインストールせずに、ウェブブラウザを使用して Cloud にアクセスすることもできます。

- **ディスクのクローン作成と移行**

これは、1 つのディスク ドライブの内容全体を別のディスク ドライブにコピーする処理です。たとえば、容量の大きい新しいディスクに、オペレーティング システム、アプリケーション、データのクローンを作成する場合、この処理が必要になることがあります。

- **Acronis Universal Restore**

Acronis Universal Restore を使用すると、異なるハードウェア上にブータブルシステムのクローンを作成することができます。元のバックアップを作成したシステムとは異なるプロセッサ、マザーボード、または大容量記憶装置を搭載したコンピュータにシステムディスクを復元する場合には、このユーティリティを使用します。たとえば、壊れたマザーボードを交換した後や、あるコンピュータから別のコンピュータにシステムを移行するときなどに役に立ちます。

- **モバイルデバイス対応 Acronis True Image**

モバイルデバイス対応 Acronis True Image を使用すると、モバイルデータを Acronis Cloud にバックアップでき、データが損失または破損した場合に復元できます。Acronis True Image は、iOS (iPhone、iPad、iPod) や Android (スマートフォンやタブレット) のオペレーティングシステムが動作するすべてのモバイルデバイスにインストールできます。

- **Try&Decide**

Try&Decide をオンにすると、コンピュータは Try モードになります。Try モードでは、オペレーティングシステム、プログラム、データに損傷を与える可能性を心配することなく、潜在的に危険性のある操作を実行できます。Try&Decide をオフにする場合には、変更をコンピュータに適用するか破棄するかを指定します。

- **Acronis セキュアゾーン**

Acronis セキュアゾーンはバックアップの保存用にコンピュータ上に作成できる安全な専用パーティションです。

- **Acronis DriveCleanser**

Acronis DriveCleanser では、選択したハード ディスクやパーティション上のすべてのデータを完全に消去できます。この消去には、既存のアルゴリズムのいずれかを使用するか、専用のアルゴリズムを作成できます。

1.6 メンテナンス、テクニカルサポート、および製品アップデート

Acronis True Image Data Protection に関するサポート、および製品のアップデートについては、ベンダの公式サポート情報を参照してください。

2 はじめに

セクションの内容

ユーザーインターフェイスの言語	15
システムの保護	15
PCのすべてのデータのバックアップ	18
ファイルのバックアップ	19
コンピュータのリカバリ	21
ファイルとフォルダのリカバリ	22

2.1 ユーザーインターフェイスの言語

使用を開始する前に、Acronis True Image Data Protection ユーザーインターフェイスで希望する言語を選択します。デフォルトでは、Windows の表示言語に従って設定されます。

ユーザーインターフェイスの言語を変更するには、次の手順を実行します。

1. Acronis True Image Data Protection を起動します。
2. **[ヘルプ]** セクションで、リストから希望の言語を選択します。

2.2 システムの保護

システムを保護する手順は、次のとおりです。

1. コンピュータをバックアップします 『16ページ』。
2. ブータブル メディアを作成します 『17ページ』。

また、「必要なときにレスキュー メディアを確実に使用する 『108ページ』」で説明したとおりに、レスキュー メディアをテストすることをお勧めします。

2.2.1 手順 1: コンピュータのバックアップ

コンピュータをバックアップするタイミング

システムでの重要なイベントの後は毎回新しいバックアップ バージョンを作成します。

イベントの例:

- 新しいコンピュータを購入した。
- コンピュータに Windows を再インストールした。
- 新しいコンピュータで、すべてのシステム設定（例: 時刻、日付、言語）を構成し、必要なプログラムをすべてインストールした。
- 重要なシステム アップデート。

正常な状態のディスクを保存するため、バックアップの前にウイルスをスキャンすることを勧めます。このためには、ウイルス対策ソフトウェアを使用してください。この操作には長時間かかる場合があることに注意してください。

コンピュータのバックアップを作成する方法

システムを保護するには、次の 2 種類の方法があります。

- **PC 全体のバックアップ (推奨)**

Acronis True Image は、内蔵ハードドライブすべてをディスクモードでバックアップします。バックアップの対象は、オペレーティング システム、インストールされているプログラム、システムの設定、写真、音楽、文書などの個人データすべてです。詳細については、「PC のすべてのデータのバックアップ 『18ページ』」を参照してください。

- **システムディスクのバックアップ**

システムパーティションまたはシステムドライブ全体をバックアップすることができます。詳細については、「ディスクとパーティションのバックアップ 『38ページ』」を参照してください。

コンピュータをバックアップするには、次の手順を実行します。

1. Acronis True Image Data Protection を起動します。
2. サイドバーで **[バックアップ]** をクリックします。

最初のバックアップの場合、バックアップ設定画面が表示されます。バックアップリスト内に既にバックアップがいくつか存在する場合、まず **[バックアップの追加]** をクリックして、次に **[新しいバックアップを作成]** をクリックします。

3. **[バックアップ ソース]** アイコンをクリックし、**[コンピュータ全体]** を選択します。
システムディスクのみをバックアップする場合、**[ディスクとパーティション]** をクリックし、システムパーティション（通常は C:）とシステムで予約済みのパーティション（存在する場合）を選択します。
4. **[バックアップの保存先]** アイコンをクリックし、バックアップの保存場所を選択します（以下の推奨事項を参照してください）。
5. **[今すぐバックアップ]** をクリックします。

結果:新しいバックアップボックスが **[マイバックアップ]** リストに表示されます。今後、新しいバージョンのバックアップを作成するには、リストからバックアップボックスを選択して、**[今すぐバックアップ]** をクリックします。

2.2.2 手順 2. ブータブル レスキュー メディアの作成

ブータブル メディアとは

ブータブルメディアは、CD-R/RW または USB フラッシュドライブなどを使って作成します。このメディアによって、Windows を起動できない場合でも Acronis True Image を実行できます。Acronis メディア ビルダを使用してブート可能なメディアを作成できます。

ブータブル メディアを作成する方法

1. CD-R/RW を挿入するか、USB フラッシュドライブを接続します。
2. Acronis True Image Data Protection を起動します。
3. サイドバーで **[ツール]** をクリックし、**[ブータブル メディア ビルダ]** をクリックします。
4. 最初の手順で、**[Acronis ブータブル レスキュー メディア]** を選択します。
5. ブータブル メディアの作成に使用するデバイスを選択します。
6. **[実行]** をクリックします。

ブータブル メディアを使用する方法

ブータブル メディアは、Windows を起動できないときにコンピュータを復元するために使用します。

1. ブータブル メディアをコンピュータに接続します (CD を挿入します。または、USB ドライブを接続します)。
2. レスキュー メディア デバイス (CD または USB ドライブ) が最初の起動デバイスになるように、BIOS で起動順を並べ替えます。

詳細については、「BIOS での起動順の並べ替え 『94ページ 』」を参照してください。

3. レスキューメディアからコンピュータを起動して、**[Acronis True Image Data Protection]** を選択します。

結果: Acronis True Image が読み込まれたら、これを使用してコンピュータを復元できます。

詳細については、「Acronis メディア ビルダ」を参照してください。

2.3 PC のすべてのデータのバックアップ

PC全体のバックアップについて

PC 全体のバックアップは、コンピュータ上のすべてのコンテンツをバックアップする最も簡単な方法です。どのデータを保護する必要があるかわからない場合には、このオプションを選択することをおすすめします。システムパーティションのみをバックアップする場合、詳細については「ディスクとパーティションのバックアップ 『38ページ 』」を参照してください。

バックアップの種類として [コンピュータ全体] を選択すると、Acronis True Image はディスクモードで内部のハードドライブをすべてバックアップします。バックアップ対象は、オペレーティングシステム、インストールされているプログラム、システムの設定、写真、音楽、ドキュメントなどの個人データすべてです。

PC 全体のバックアップからの復元も簡単です。必要な操作は、データを戻す時点の選択だけです。Acronis True Image はバックアップからすべてのデータを元の場所に復元します。具体的なディスクやパーティションを選択して復元することはできません。また、デフォルトの保存先を変更することもできません。こうした制限を避ける必要がある場合は、通常の

ディスクレベルのバックアップ方法でデータをバックアップすることをおすすめします。詳細については、「ディスクとパーティションのバックアップ 『38ページ 』」を参照してください。

PC 全体のバックアップから特定のファイルやフォルダを復元することもできます。詳細については、「ファイルやフォルダのバックアップ 『40ページ 』」を参照してください。

PC 全体のバックアップにダイナミックディスクが含まれている場合、データをパーティションモードで復元します。つまり、復元対象のパーティションを選択したり、復元先を変更したりできます。詳細については、「ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームのリカバリについて 『90ページ 』」を参照してください。

PC全体のバックアップを作成する方法

コンピュータ全体をバックアップするには、次の手順を実行します。

1. Acronis True Image Data Protection を起動します。
2. サイドバーで **[バックアップ]** をクリックします。
3. **[バックアップの追加]** をクリックしてから、**[新しいバックアップを作成]** をクリックします。
4. **[バックアップ ソース]** アイコンをクリックし、**[コンピュータ全体]** を選択します。
5. **[バックアップの保存先]** アイコンをクリックし、バックアップの保存先を選択します。
6. (オプションの手順) **[オプション]** をクリックして、スケジュール 『43ページ 』、スキーム 『47ページ 』、パスワードによる保護などのバックアップオプションを設定します。詳細については、「バックアップオプション 『41ページ 』」を参照してください。
7. **[今すぐバックアップ]** をクリックします。

2.4 ファイルのバックアップ

文書、写真、音楽のファイル、ビデオのファイルなどのファイルを保護するために、そのファイルを含むパーティション全体をバックアップする必要はありません。具体的なファイルとフォルダをバックアップして、以下のストレージ タイプに保存することができます。

- **ローカルまたはネットワーク ストレージ**

時間がかからず、簡単です。ほとんど変更されないファイルの保護に使用します。

▪ **Acronis Cloud**

信頼性が高いタイプです。重要なファイルや、デバイス間またはユーザー間で共有するファイルの保護に使用します。

Acronis Cloud を使用するには、Acronis アカウントと Acronis Cloud サービスのサブスクリプションが必要です。詳細については、「サブスクリプション情報」を参照してください。



ファイルやフォルダをバックアップする手順は、次のとおりです。

1. Acronis True Image Data Protection を起動します。
2. サイドバーで **[バックアップ]** をクリックします。
3. **[バックアップ ソース]** アイコンをクリックし、**[ファイルとフォルダ]** を選択します。
4. 表示されたウィンドウで、バックアップするファイルやフォルダの横にあるチェック ボックスをオンにし、**[OK]** をクリックします。
5. **[バックアップの保存先]** アイコンをクリックし、バックアップの保存先を選択します。
 - **Acronis Cloud:** Acronis のマイアカウントにサインインし、**[OK]** をクリックします。
 - **外付けドライブ:** 外付けドライブがコンピュータに接続されている場合は、リストからそのドライブを選択できます。
 - **参照:** フォルダツリーから保存先を選択します。
6. **[今すぐバックアップ]** をクリックします。

詳細については、「ファイルやフォルダのバックアップ 『40ページ 』」を参照してください。

2.5 コンピュータのリカバリ

システム ディスクのリカバリは重要な処理ですのでご注意ください。開始する前に、以下のヘルプ トピックにある詳細な説明を参照することをお勧めします。

- 異常停止の原因を特定する 『74ページ 』
- リカバリの準備 『75ページ 』
- 同じディスクへのシステムのリカバリ 『76ページ 』

次の 2 つ異なるケースについて考えてみましょう。

1. Windows は正しく動作していないが、Acronis True Image Data Protection は起動できる。
2. Windows を起動できない（たとえば、コンピュータの電源を入れても画面に表示される内容が通常とは異なる）。

ケース 1. Windows が正しく動作しない場合のコンピュータのリカバリ方法

1. Acronis True Image Data Protection を起動します。
2. サイドバーで **[バックアップ]** をクリックします。
3. バックアップ リストから、システム ディスクが格納されているバックアップを選択します。
4. バックアップの種類に応じて、**[PC をリカバリ]**、または **[ディスクをリカバリ]** をクリックします。
5. 表示されたウィンドウで、バックアップ バージョン（特定の日時のデータ状態）を選択します。
6. リカバリするシステム パーティションとシステム予約パーティション（存在する場合）を選択します。
7. **[今すぐリカバリ]** をクリックします。

処理を完了するには、*Acronis True Image Data Protection* でシステムを再起動する必要があります。

ケース 2. Windows を起動できない場合のコンピュータのリカバリ方法

1. Acronis ブータブルメディアをコンピュータに接続し、専用のスタンドアロン版の *Acronis True Image Data Protection* を実行します。

詳細については、「手順 2 ブータブルレスキューメディアの作成 『17ページ 』」と「BIOS での起動順の並べ替え 『94ページ 』」を参照してください。

2. [よろこそ] 画面で、**[リカバリ]** の下にある **[マイディスク]** を選択します。
3. リカバリに使用するシステムディスクバックアップを選択します。バックアップを右クリックして、**[リカバリ]** を選択します。
バックアップが表示されない場合には、**[参照]** をクリックし、バックアップのパスを手動で指定します。
4. **[リカバリの方法]** で、**[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。
5. **[リカバリ元]** 画面で、システム パーティション（通常は C）を選択します。システムパーティションは Pri フラグ、Act フラグでも識別できます。システム予約パーティションも選択します（存在する場合）。
6. パーティションの設定を変更せずに、すべてそのままにして、**[完了]** をクリックしてもかまいません。
7. 処理の概要を確認して **[実行]** をクリックします。
8. 処理が終了したら、スタンドアロン版の Acronis True Image Data Protection を終了し、レスキューメディアを取り出して（存在する場合）、リカバリしたシステムパーティションから起動します。必要な状態まで Windows をリカバリしたことを確認してから、元の起動順序を復元します。

2.6 ファイルとフォルダのリカバリ

ファイルレベルとディスクレベルのバックアップからファイルやフォルダをリカバリできます。

ファイルやフォルダをリカバリする手順は、次のとおりです。

1. Acronis True Image Data Protection を起動します。
2. サイドバーで **[バックアップ]** をクリックします。
3. バックアップリストから、リカバリするファイルやフォルダを含むバックアップを選択します。
4. 右側のパネルで、**[ファイルのリカバリ]** をクリックします。

5. バックアップ バージョン（特定の日時のデータ状態）を選択します。
6. リカバリするファイルやフォルダを選択し、**[次へ]** をクリックします。
7. リカバリしたファイルやフォルダを保存するコンピュータ上の場所を選択します。元の場所にデータをリカバリすることができます。また、必要に応じて新しい場所を選択することもできます。新しい場所を選択するには、**[参照]** ボタンをクリックします。
8. リカバリ処理を開始するには、**[今すぐリカバリする]** ボタンをクリックします。

3 基本的な概念

セクションの内容

基本的な概念	24
ファイル バックアップとディスク/パーティション イメージの違い.....	28
完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ	29
バックアップと復元に関する FAQ	32
FTP 接続	34
認証設定.....	35
バックアップファイルの命名	35
ウィザード.....	36

3.1 基本的な概念

ここでは、プログラムの動作のしくみを理解するうえで役立つと思われる、基本的な概念について説明します。

注意:ご使用の *True Image* エディションでは一部の機能を使用できない場合があります。

バックアップと復元

バックアップとは、元のデータが失われてもそのコピーから**復元**できるように、データのコピーを作成しておくことです。

バックアップの主な目的は 2 つあります。1 つは、障害または災害発生後に状態を復旧することで（「災害復旧」という）、もう 1 つは、誤って削除されたファイル、破損した少数のファイルを復元することです。

Acronis True Image Data Protection は、この最初の目的を達成するために、ディスク（またはパーティション）イメージの作成機能を備え、第 2 の目的のために、ファイル レベル バックアップ作成機能を備えています。

バックアップ バージョン

バックアップ バージョンは、それぞれのバックアップ処理中に作成された単独または複数のファイルです。統合機能を使用しない場合、作成されるバージョンの数は、バックアップが実行された回数（この時点での保存回数）と常に同じになります。

つまり、バージョンはそれぞれ特定の時点を表しており、その時点の状態にシステムやデータを復元することができます。言い換えれば、バックアップ バージョンは、完全バックアップおよび増分バックアップを表しています。「完全バックアップ、増分バックアップ 『29 ページ 』」を参照してください。

バックアップ バージョンは、ファイル バージョンと似ています。ファイル バージョンという考えは、「以前のバージョンのファイル」と呼ばれている Windows Vista や Windows 7 の機能を使用しているユーザーにはよく知られています。この機能を使用すると、ファイルを特定の日時における状態に復元できます。バックアップ バージョンを使用すると、同様の方法でデータを復元できます。

バックアップ バージョンは、破損したり削除されたりしたファイルを見つけようとする場合に便利です。目的のファイルが格納されたバックアップ バージョンが見つかるまで Acronis バックアップ エクスプローラ内の各バックアップ バージョンを参照するだけです。さらに、発見されたファイルの異なる保存済みバージョンを復元することもできます。

ディスクのクローン作成

これは、1 つのディスク ドライブの内容全体を別のディスク ドライブに移行/コピーする処理です。たとえば、大容量のディスクを取り付ける場合などに、この機能が必要となる場合があります。この機能を使用すると、同じファイル構造を持つ 2 つのまったく同じドライブが作成されます。「ディスクのクローン作成」ツールを実行すると、1 つのハード ディスクドライブのすべての内容が別のハードディスク ドライブにコピーされます。この処理を利用すると、ハード ディスク ドライブの内容が、オペレーティング システムやインストール済みプログラムも含めてすべて別のドライブに転送されるので、すべてのソフトウェアを再インストールして再設定する必要はなくなります。

Acronis True Image Data Protection では、特定のパーティションのみのクローン作成はできません。クローンを作成できるのは、ドライブ全体のみです。

ハード ディスク ドライブの情報をすべて別のドライブに転送するには、他にも、古いハード ディスク全体をバックアップしてから、そのバックアップを新しいディスクに復元するという方法があります。

バックアップ ファイルの形式

Acronis True Image Data Protection では通常、バックアップ データは独自の TIB 形式で圧縮して保存されます。その結果、必要な保存領域を減らすことができます。

tib ファイルの作成時に、データ ブロックのチェックサム値が計算されて、バックアップ対象のデータに追加されます。このチェックサムの値を使用すると、データの整合性を検証できます。

tib ファイルのバックアップのデータは、Acronis 製品を使用した場合にのみ復元できます。この復元は、Windows または復元環境で実行できます。

Acronis ノンストップ バックアップでは、データおよびメタデータ用に特殊な隠しストレージが使用されています。バックアップ データは圧縮され、約 1 GB の複数のファイルに分割されます。また、ファイルには独自の形式が採用されており、保存されたデータは、Acronis True Image Nonstop または Acronis True Image Home 2012 を使用した場合にのみ復元できます。

バックアップのベリファイ

バックアップのベリファイ機能を使用すれば、データを復元できるかどうかを確認できます。前述のように、バックアップされるデータにはチェックサム値が追加されます。バックアップ ベリファイの実行時に、Acronis True Image Data Protection はバックアップ ファイルを開いてチェックサム値を再計算し、保存されているチェックサム値と比較します。比較した値がすべて一致していれば、そのバックアップ ファイルは破損していないので、バックアップからのデータ復元はかなり高い確率で成功します。

統合

統合を行うと、バックアップ チェーンから不要になったバックアップを削除することができます。

統合するチェーンは、完全バックアップ、および、1 つまたは複数の増分バックアップという構成にできます。

必要に応じて、バックアップ チェーンからベースの完全バックアップを削除できます。プログラムによって、残っている最も古いバックアップの代わりに新しい完全バックアップが作成されます。統合では、選択されたバックアップが保持され、選択されなかったバックアップは削除されます。

統合には長い時間と、大量のシステム リソース（ディスク領域を含む）が必要になる可能性があるため、統合する場合は慎重に検討することをお勧めします。多くの場合、新しいバックアップ チェーンを開始してから古いバックアップ チェーンを削除するほうがよいでしょう。

Acronis ノンストップ バックアップでは、異なる統合メカニズムが使用されています。Acronis ノンストップ バックアップでは、バックアップ データを管理するために使用されるメタデータが統合されます。メタデータの情報はバックアップ データ量よりもはるかに少ないので、統合で必要になる時間とシステム リソースも大幅に少なくなります。

災害復旧

障害からの復元には、通常レスキュー メディアおよびシステム パーティションのバックアップが必要になります。

Acronis True Image Data Protection は、システム データの破損、ウィルス、マルウェアなどを原因とする障害からの復元を行います。

オペレーティング システムが起動できなかった場合、Acronis True Image Data Protection によって、システム パーティションが復元されます。メディア ビルダ ツールを使用してレスキュー メディアを作成することができます。

スケジュール設定

作成したバックアップを実際に役立てるには、可能な限り「最新」のバックアップを作成しておく必要があります。つまり、バックアップを定期的に行う必要があります。Acronis True Image Data Protection のバックアップは簡単に作成できますが、バックアップを実行し忘れてしまうこともあります。

そのような作業はスケジューラに任せることができます。スケジューラを使用すれば、自動バックアップのスケジュールをあらかじめ設定できます。十分なストレージ領域が存在する限り、データはバックアップされます。

このプログラムの機能を使用する場合、これらの用語と概念を理解しておく役立ちます。

工場出荷時のイメージ

工場出荷時のイメージは、工場出荷時のコンピュータの構成が記録された特別なディスク バックアップです。このバックアップは、通常、コンピュータのハードウェア サプライヤが作成、提供します。

コンピュータの工場出荷時のイメージは Acronis セキュアゾーン に保存されており、Acronis バックアップのリストから選択できます。工場出荷時のイメージを使用して、工場出荷時の設定にコンピュータを復元するには、Windows から直接、または工場出荷時のブータブル メディアを使用して行います。詳細については、「コンピュータを工場出荷時の設定に復元するには」を参照してください。

3.2 ファイル バックアップとディスク/パーティション イメージの違い

ファイルとフォルダをバックアップする場合、ファイルとフォルダ ツリーのみが圧縮されて保存されます。

ディスク/パーティションのバックアップは、ファイルとフォルダのバックアップとは異なります。Acronis True Image では、ディスクまたはパーティションの正確なスナップショットが保存されます。この処理は「ディスク イメージの作成」または「ディスク バックアップの作成」と呼ばれ、作成されたバックアップは一般的に「ディスク/パーティション イメージ」または「ディスク/パーティション バックアップ」と呼ばれます。

ディスク/パーティションのバックアップには、ディスクまたはパーティションに保存されているすべてのデータが含まれます。

1. マスター ブート レコード (MBR) があるハード ディスクのゼロトラック (MBR ディスク バックアップのみに適用)。
2. 以下を含む、1 つ以上のパーティション
 1. ブート コード。
 2. サービス ファイル、ファイル アロケーション テーブル (FAT)、およびパーティション ブート レコードを含むファイル システム メタ データ。

3. オペレーティング システム (システム ファイル、レジストリ、ドライバ) 、ユーザー データ、およびソフトウェア アプリケーションを含むファイル システム データ。
3. システム予約済みパーティション (存在する場合) 。
4. EFI システム パーティション (存在する場合) (GPT ディスク バックアップにのみ適用) 。

デフォルトでは、データを含むハードディスク内のセクタのみが Acronis True Image によって保存されます。また、Acronis True Image の場合、Windows XP 以降の pagefile.sys や hiberfil.sys (コンピュータが休止状態になる際に RAM の内容を保持するファイル) はバックアップされません。その結果、イメージ ファイルのサイズが小さくなり、イメージ ファイルの作成とリカバリに要する時間が短縮されます。

このデフォルトの方法は、セクタ単位モードをオンにすることで、変更できます。この場合、Acronis True Image では、含まれるデータだけではなく、すべてのハードディスクセクタがコピーされます。

3.3 完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ

注意:ご使用の Acronis True Image のエディションでは、増分バックアップおよび差分バックアップを使用できない場合があります。

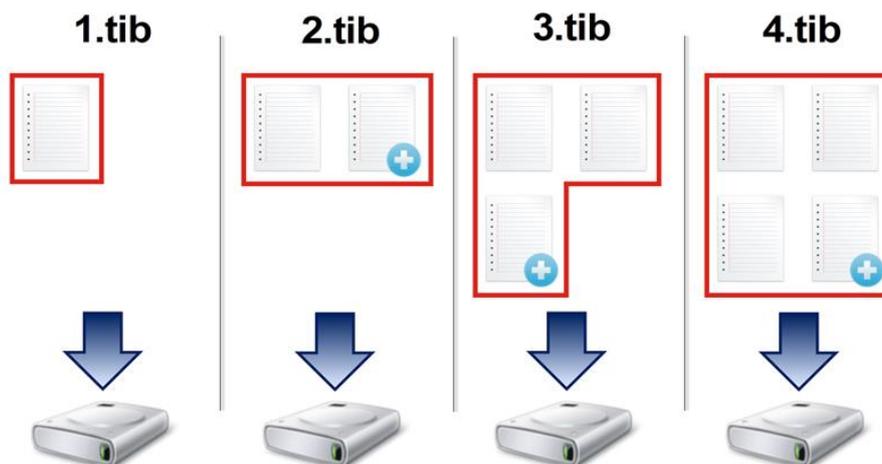
Acronis True Image には次の 3 つのバックアップ方法が用意されています。

完全バックアップ

完全バックアップ処理 (別名「完全バックアップ バージョン」) の結果には、バックアップ作成時のすべてのデータが含まれます。

例:毎日、ドキュメントの 1 ページを書き、完全バックアップを使用してバックアップします。True Image は、バックアップを実行するたびにドキュメント全体を保存します。

1.tib、2.tib、3.tib、4.tib: 完全バックアップ バージョン。



追加情報

完全バックアップ バージョンは、増分バックアップや差分バックアップの基になるデータとなります。スタンドアロンのバックアップとしても使用できます。スタンドアロンの完全バックアップは、システムを最初の状態に戻すことが多い場合や、複数のバックアップ バージョンを管理することが望ましくない場合に最適なソリューションです。

増分バックアップ

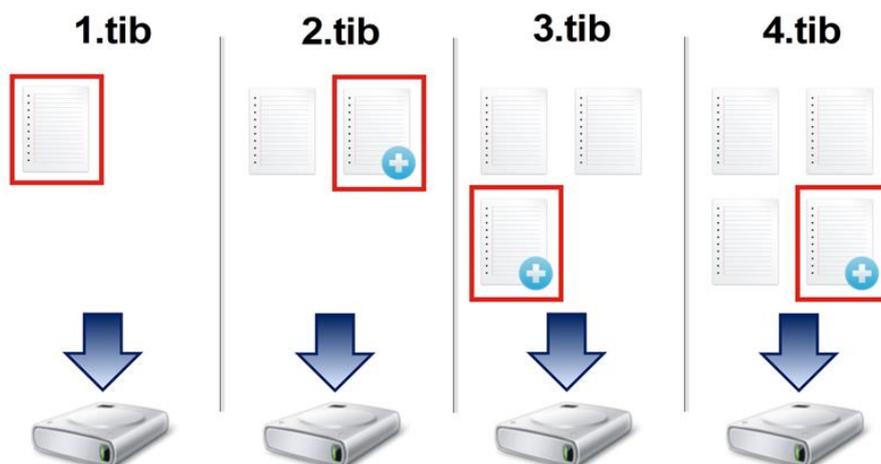
増分バックアップ処理（別名「増分バックアップ バージョン」）の結果には、前回のバックアップ以降に変更されたファイルのみが含まれます。

例:毎日、ドキュメントの 1 ページを書き、増分バックアップを使用してバックアップします。True Image は、バックアップを実行するたびに新しいページを保存します。

注意:作成する最初のバックアップ バージョンは必ず完全バックアップである必要があります。

- 1.tib: 完全バックアップ バージョン。

- 2.tib、3.tib、4.tib: 増分バックアップ バージョン。



追加情報

増分バックアップは、頻繁なバックアップと特定の時点に戻す機能が必要な場合に非常に便利です。一般に、増分バックアップ バージョンは完全バージョンや差分バージョンに比べてかなり小さくなります。

一方、増分バージョンでは、リカバリの実行時にプログラムでの処理が増加します。上記の例では、4.tib ファイルから作業全体をリカバリする場合、True Image はすべてのバックアップ バージョンからデータを読み取ることとなります。そのため、1 つの増分バックアップ バージョンを失ったり、破損したりすると、それ以降のすべての増分バックアップ バージョンが使用できなくなります。

差分バックアップ

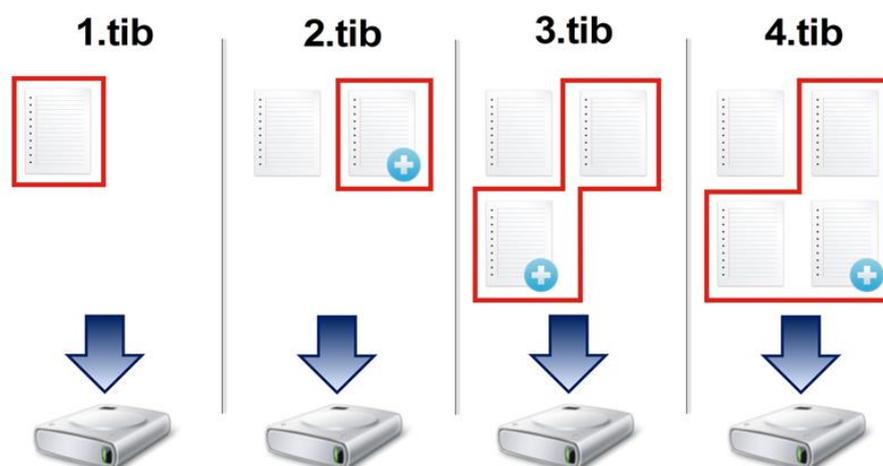
差分バックアップ処理（別名「差分バックアップ バージョン」）の結果には、前回の完全バックアップ以降に変更されたファイルのみが含まれます。

例:毎日、ドキュメントの 1 ページを書き、差分バックアップを使用してバックアップします。True Image は、完全バックアップ バージョンに保存された最初のページ以外のドキュメント全体を保存します。

注意:最初に作成するバックアップバージョンは必ず完全バックアップである必要があります。

- 1.tib: 完全バックアップバージョン。

- 2.tib、3.tib、4.tib: 差分バックアップ バージョン。



追加情報

差分バックアップは、前述の 2 つの方法の中間的な方法です。「完全」よりもかかる時間と領域は少ないですが、「増分」よりは多くなります。差分バックアップ バージョンからデータをリカバリする場合、True Image には差分バージョンと最後の完全バージョンのみが必要です。そのため、差分バージョンからのリカバリは、増分バージョンからのリカバリより単純で、信頼性が高くなります。

ディスクを最適化した後に、増分バックアップ、または差分バックアップを作成すると、通常に比べかなり大きなサイズになります。これは、ディスクの最適化プログラムによってディスク上のファイルの位置が変更され、バックアップにこれらの変更が反映されるためです。このため、ディスク最適化後に、完全バックアップを再度作成することをお勧めします。

目的のバックアップ方法を選択するには、通常、カスタム バックアップ スキームを設定する必要があります。詳細については、「カスタム スキーム 『49ページ』」を参照してください。

3.4 バックアップと復元に関する FAQ

- **150 GB のシステムパーティションがありますが、このパーティションで使用されている領域は 80 GB のみです。Acronis True Image Data Protection のバックアップには何が含まれますか？** - デフォルトでは、Acronis True Image ではデータが含まれるハードディスクセクタのみがコピーされるため、バックアップは 80 GB のみになります。セクタ単位モードを選択することもできます。このようなバックアップモードが必要な

は特殊な場合のみです。詳細については、「イメージ作成モード 『58ページ』」を参照してください。セクタ単位モードのバックアップの作成中には、プログラムによって使用済みと未使用の両方のハードディスクセクタがコピーされるため、通常バックアップファイルは非常に大きくなります。

- **システムディスクのバックアップにドライバ、ドキュメント、画像などが含まれますか？**
- はい、システムディスクのバックアップにはドライバが含まれ、さらにマイドキュメントフォルダのデフォルトのロケーションを変えていない場合、マイドキュメントフォルダとそのサブフォルダの内容も含まれます。PC に搭載されたハードディスクが 1 台のみの場合、このバックアップに、オペレーティングシステム、アプリケーション、およびデータのすべてが含まれます。
- **パーティションまたはディスク全体のどちらをバックアップすればよいですか？** - ほとんどの場合、ディスク全体をバックアップする方が効果的です。ただし、場合によってはパーティションのバックアップが推奨されることもあります。たとえば、ノートブックにハードディスクが 1 台搭載されており、システム（ドライブ文字 C）とデータ（ドライブ文字 D）の 2 つのパーティションに分割されている場合です。システムパーティションのマイドキュメントフォルダとサブフォルダには仕事用のドキュメントが保存されています。データパーティションにはビデオ、画像、音楽のファイルが保存されています。これらのファイルは既に圧縮されているため、Acronis True Image を使用してバックアップしても、バックアップファイルのサイズが大幅に縮小することはありません。この場合、データパーティションのファイルにはローカルの同期を使用し、システムパーティションには別のバックアップを使用した方がよい場合があります。ただし、バックアップストレージに十分な領域がある場合は、ディスク全体のバックアップを少なくとも 1 つ作成することもおすすめします。
- **Acronis True Image Data Protection で RAID はサポートされますか？** - Acronis True Image では、一般的なハードウェア RAID アレイのすべてがサポートされています。ダイナミックディスクでのソフトウェア RAID 構成もサポートされています。Acronis ブータブルレスキューメディアでは、よく使われるハードウェア RAID コントローラのほとんどがサポートされています。標準の Acronis レスキューメディアで RAID が 1 つのボリュームとして「検出」されない場合、メディアに適切なドライバがないことが原因です。

3.5 FTP 接続

Acronis True Image Data Protection を使用すれば、FTP サーバーにバックアップを保存できます。

新しい FTP 接続を作成するには、バックアップストレージの選択時に **[FTP 接続]** をクリックし、開いたウィンドウに次の情報を入力します。

- FTP サーバーへのパス（例: *my.server.com*）
- ポート
- ユーザー名
- パスワード

設定を確認するには、**[接続のテスト]** ボタンをクリックします。コンピュータで、指定した FTP サーバーに対する接続が試行されます。テスト接続が確立された場合、**[接続]** ボタンをクリックして、FTP 接続を追加します。

作成した FTP 接続は、フォルダツリーに表示されます。接続を選択し、使用するバックアップストレージを参照します。

単に FTP サーバーのルートフォルダを開いても、ユーザーのホームディレクトリに移動しないことに注意してください。

Acronis True Image Data Protection は、FTP サーバーに直接バックアップするときにバックアップを 2 GB ずつのサイズのファイルに分割します。バックアップを後で FTP サーバーに転送するためにハードディスクにバックアップする場合は、バックアップオプションでファイルサイズを設定することでバックアップを 2 GB ずつのファイルに分割することができます。この操作を行わない場合、復元は実行できません。

FTP サーバー側がパッシブモードのファイル転送を許可している必要があります。

バックアップ元のコンピュータのファイアウォール設定では、ポート 20 および 21 が TCP プロトコルと UDP プロトコル用に開いており、機能するようになっていることが必要です。Windows の **ルーティングとリモート アクセス** サービスは無効にする必要があります。

3.6 認証設定

ネットワーク上のコンピュータに接続する場合、通常、ネットワーク共有にアクセスするために必要なログイン情報を入力する必要があります。たとえば、バックアップストレージを選択する際にこの操作が必要になることがあります。ネットワーク上のコンピュータの名前を選択すると、**[認証設定]** ウィンドウが自動的に表示されます。

必要に応じて、ユーザー名とパスワードを指定し、**[接続のテスト]** をクリックします。テストが成功した場合は、**[接続]** をクリックします。

トラブルシューティング

バックアップストレージとして使用する予定のネットワーク共有を作成する場合は、以下の条件の1つ以上を満たしていることを確認してください。

- 共有フォルダが置かれているコンピュータの Windows アカウントにパスワードが設定されている。
- Windows のパスワード保護共有が無効になっている。
たとえば、Windows 7 では、**[コントロールパネル]** → **[ネットワークとインターネット]** → **[ネットワークと共有センター]** → **[共有の詳細設定]** → **[パスワード保護の共有を無効にする]** でこの設定を確認できます。

これらの条件のいずれも満たしていない場合は、共有フォルダに接続できません。

3.7 バックアップファイルの命名

バックアップファイル名には次の属性があります。

- バックアップ名
- バックアップ方法 (full、inc、diff: 完全、増分、差分)
- バックアップチェーン番号 (b#形式)
- バックアップバージョン番号 (s#形式)
- ボリューム番号 (v#形式)

たとえば、バックアップを複数のファイルに分割するとこの属性は変更されます。詳細については、「バックアップの分割 『59ページ』」を参照してください。

たとえば、バックアップ名は次のようになります。

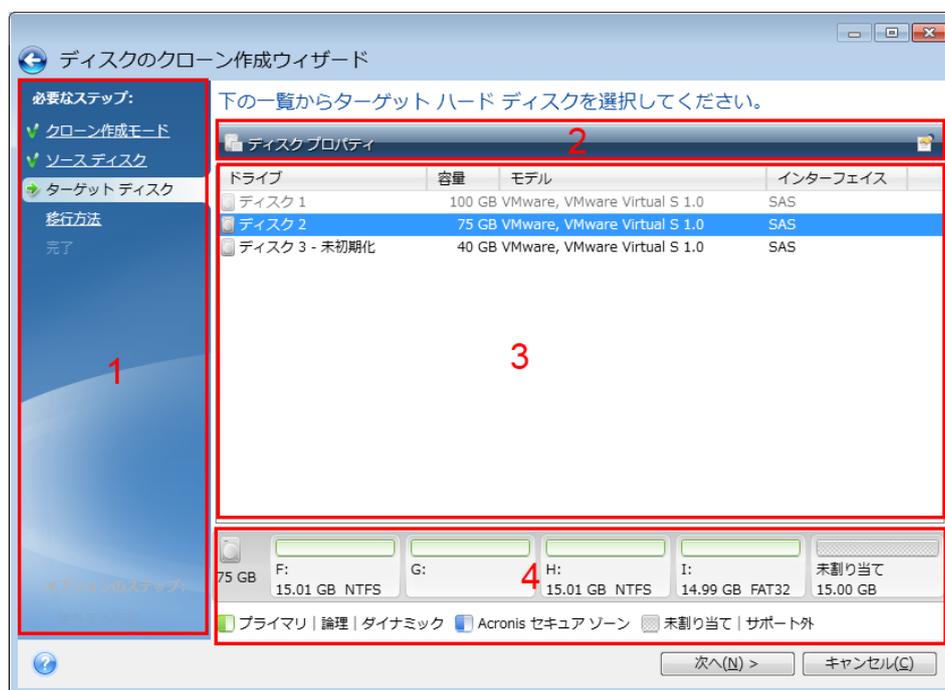
1. my_documents_full_b1_s1_v1.tib
2. my_documents_full_b2_s1_v1.tib
3. my_documents_inc_b2_s2_v1.tib
4. my_documents_inc_b2_s3_v1.tib

新たにバックアップを作成しているときに、既に同じ名前のファイルが存在する場合、プログラムによって古いファイルは削除されず、新しいファイルに「-number」サフィックスが追加されて、my_documents_inc_b2_s2_v1-2.tib のようになります。

3.8 ウィザード

利用可能な Acronis True Image ツールおよびユーティリティを使用する際、ほとんどの場合にはウィザードが表示されるため、指示に従って処理を進めることが可能です。

たとえば、次のスクリーンショットを確認してください。



ウィザード ウィンドウは、通常、次の領域で構成されています。

1. 処理を完了するうえで必要なステップのリスト。完了したステップの横には緑のチェックマークが表示されます。緑の矢印は現在処理中のステップを示します。すべてのステップが完了すると、**[完了]** ステップで概要画面が表示されます。概要を確認し、**[実行]** をクリックして処理を開始します。

2. 領域 3 で選択するオブジェクトを管理するためのボタンが表示されたツールバー。

たとえば、次のようになります。

-   **詳細**: 選択したバックアップに関する詳細な情報を提供するウィンドウが表示されます。
-   **プロパティ**: 選択した項目のプロパティウィンドウが表示されます。
-   **新しいパーティションの作成**: 新しいパーティションの設定を行えるウィンドウが表示されます。
-   **項目**: 表示する表の列とその表示順序を選択できます。

3. 項目を選択し、設定を変更する主要領域。

4. 領域 3 で選択する項目についての追加情報が表示される領域。

4 データのバックアップ

注意:ご使用の True Image エディションでは一部の機能を使用できない場合があります。

Acronis True Image Data Protection は、IT の専門家をも満足させる洗練されたバックアップ機能を豊富に備えています。それらのバックアップ機能によって、ディスク（パーティション）およびファイルをバックアップできます。最適なバックアップ機能を 1 つ選んで使用することも、すべてのバックアップ機能を使用することも可能です。以降の各セクションでは、これらのバックアップ機能について詳しく説明します。

セクションの内容

ディスクとパーティションのバックアップ	38
ファイルやフォルダのバックアップ	40
バックアップ オプション	41
バックアップの操作	66

4.1 ディスクとパーティションのバックアップ

ファイルのバックアップとは対照的に、ディスクやパーティションのバックアップには、ディスクやパーティションに保存されているすべてのデータが含まれます。この種類のバックアップは通常、システム ディスク全体のシステム パーティションの正確なコピーを作成するために使用されます。このバックアップは、Windows が正しく動作しなかったり起動しない場合に、コンピュータをリカバリすることが可能です。

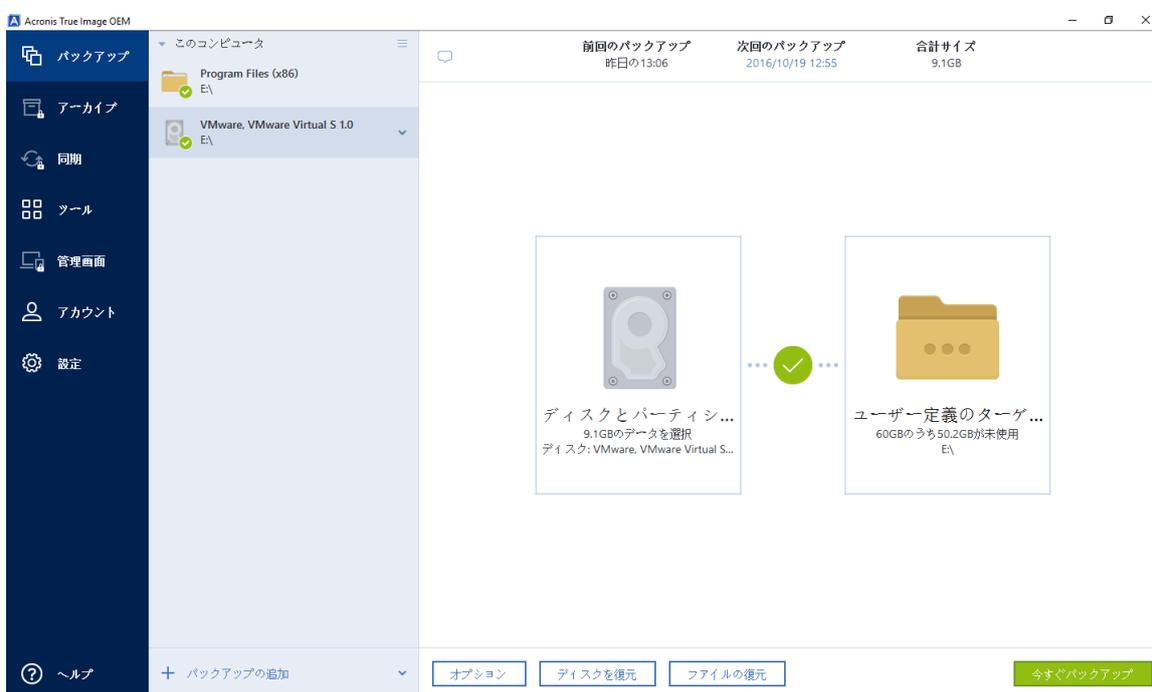
パーティションまたはディスクをバックアップするには:

1. Acronis True Image を起動します。
2. サイドバーで **[バックアップ]** をクリックします。
3. **[バックアップの追加]** をクリックしてから、**[新しいバックアップを作成]** をクリックします。
4. (オプション) バックアップの名前を変更するには、バックアップ名の横にある矢印をクリックし、**[名前の変更]** をクリックして、新しい名前を入力します。
5. **[バックアップ対象]** アイコンをクリックし、**[ディスクとパーティション]** を選択します。

- 表示されたウィンドウで、バックアップするディスクやパーティションの横にあるチェックボックスをオンにし、**[OK]** をクリックします。

非表示のパーティションを表示するには、**[パーティションの完全な一覧]** をクリックします。

ダイナミック ディスクをバックアップするには、パーティション モードのみを使用できます。



- [バックアップの保存先]** アイコンをクリックし、バックアップの保存先を選択します。
 - 外付けドライブ:** 外付けドライブがコンピュータに接続されている場合、リストからそのドライブを選択できます。
 - 参照:** フォルダツリーから保存先を選択します。

システム パーティションのバックアップをダイナミック ディスクに保存することは避けるようにしてください。システム パーティションは *Linux* 環境でリカバリされるからです。*Linux* と *Windows* では、ダイナミック ディスクの動作が異なります。その結果、リカバリ中に問題が発生する可能性があります。

- (オプションの手順) **[オプション]** をクリックして、スケジュール 『43ページ』、スキーム 『47ページ』、パスワードによる保護などのバックアップオプションを設定します。詳細については、「バックアップオプション 『41ページ』」を参照してください。
- 次のいずれかを実行します。

- バックアップを直ちに実行するには、**[今すぐバックアップ]** をクリックします。
- 後でバックアップを実行する、またはスケジュールに基づいてバックアップを実行するには、**[今すぐバックアップ]** ボタンの右側にある矢印をクリックし、**[後で実行]** をクリックします。

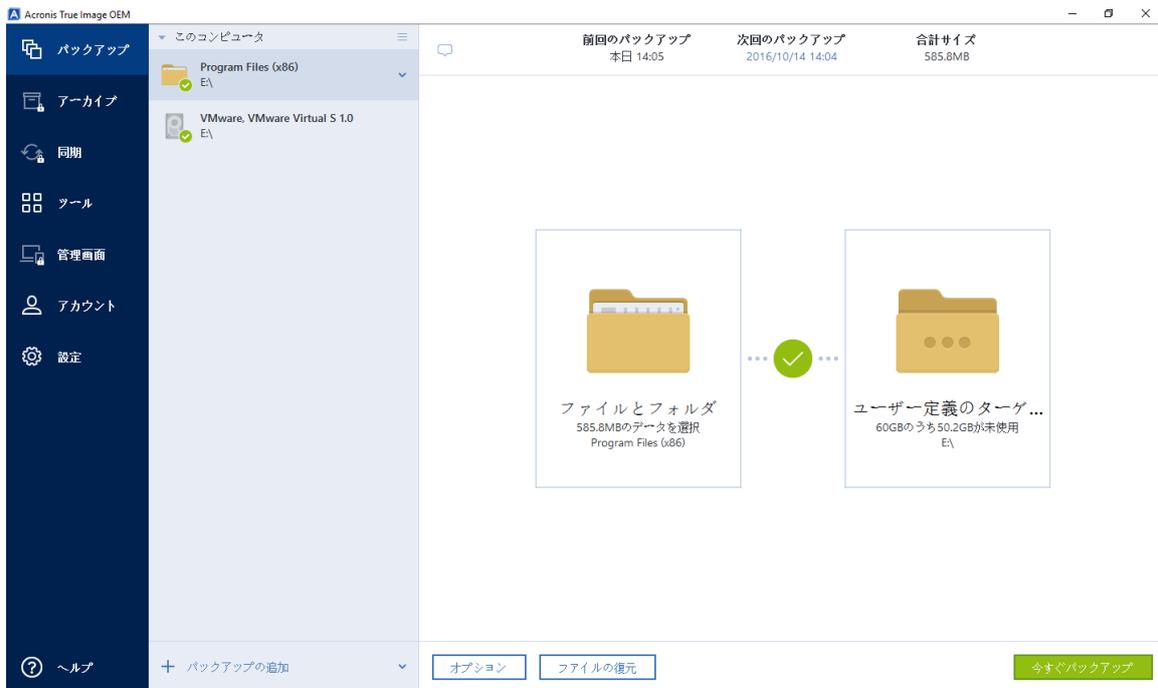
4.2 ファイルやフォルダのバックアップ

ドキュメント、写真、音楽のファイル、ビデオのファイルなどのファイルを保護するために、ファイルを含むパーティション全体をバックアップする必要はありません。特定のファイルやフォルダをバックアップできます。

ファイルやフォルダをバックアップするには、次の手順を実行します。

1. Acronis True Image Data Protection を起動します。
2. サイドバーで **[バックアップ]** をクリックします。
3. **[バックアップの追加]** をクリックしてから、**[新しいバックアップを作成]** をクリックします。
4. (オプション) バックアップの名前を変更するには、バックアップ名の横にある矢印をクリックし、**[名前の変更]** をクリックして、新しい名前を入力します。
5. **[バックアップ対象]** アイコンをクリックし、**[ファイルとフォルダ]** を選択します。

6. 表示されたウィンドウで、バックアップするファイルやフォルダの横にあるチェックボックスをオンにし、**[OK]** をクリックします。



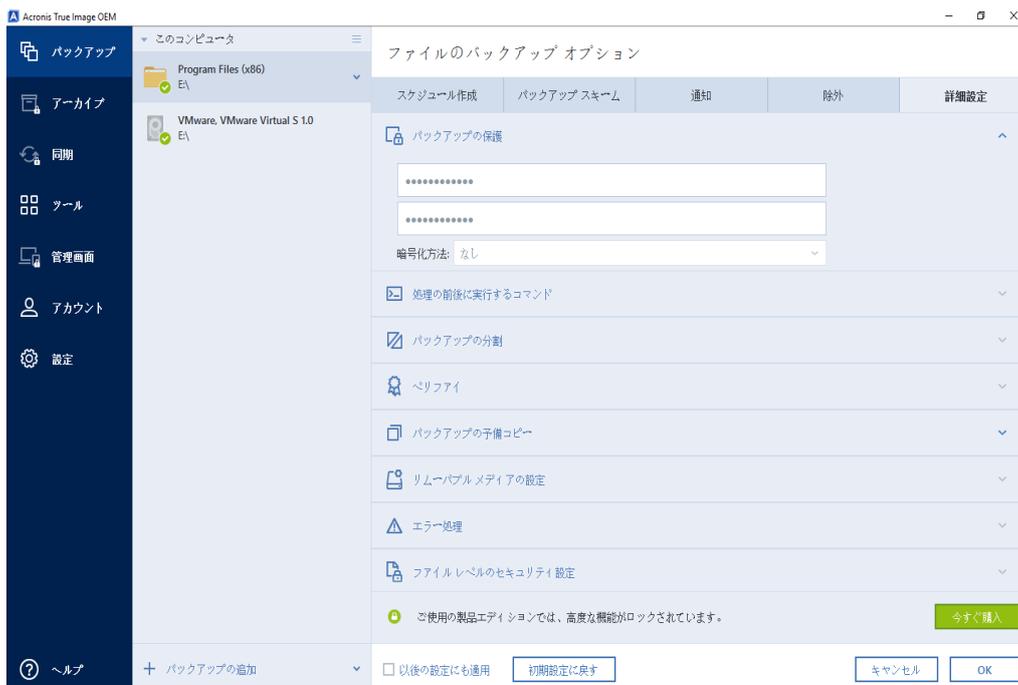
7. **[バックアップの保存先]** アイコンをクリックし、バックアップの保存先を選択します。
- **外付けドライブ:** 外付けドライブがコンピュータに接続されている場合、リストからそのドライブを選択できます。
 - **参照:** フォルダツリーから保存先を選択します。
8. (オプションの手順) **[オプション]** をクリックして、スケジュール 『43ページ』、スキーム 『47ページ』、パスワードによる保護などのバックアップオプションを設定します。詳細については、「バックアップ オプション 『41ページ』」を参照してください。
9. 次のいずれかを実行します。
- バックアップを直ちに実行するには、**[今すぐバックアップ]** をクリックします。
 - 後でバックアップを実行する、またはスケジュールに基づいてバックアップを実行するには、**[今すぐバックアップ]** ボタンの右側にある下向きの矢印をクリックし、**[後で実行]** をクリックします。

4.3 バックアップ オプション

注意: ご使用の True Image エディションでは一部の機能を使用できない場合があります。

[ディスク バックアップ オプション]、[ファイル バックアップ オプション] のウィンドウで、それぞれ、ディスクとパーティションおよびファイルのバックアップ処理のオプションを設定できます。オプションのウィンドウを開くには、該当するリンクをクリックします。

アプリケーションをインストールすると、すべてのオプションは初期値に設定されます。これらのオプションは、現在のバックアップ処理のためだけに変更することも、今後のすべてのバックアップ向けに変更することも可能です。[設定をデフォルトとして保存する] チェックボックスをオンにすると、変更した設定が今後のバックアップ作業すべてにデフォルトで適用されます。



それぞれのバックアップのオプションは完全に独立しているため、これらは個別に設定する必要がある点にご注意ください。

製品の初回インストール後に変更したオプションをすべてリセットする場合は、[初期設定にリセット] ボタンをクリックします。

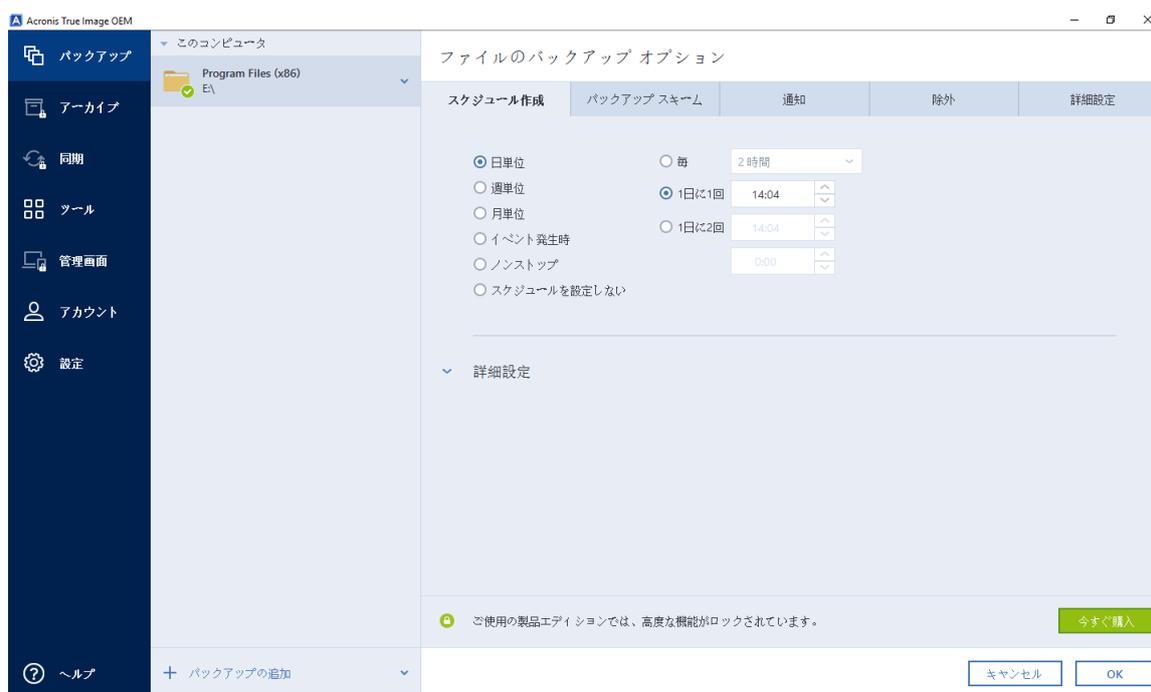
セクションの内容

スケジュール設定	43
バックアップスキーム	47
バックアップ処理の通知.....	53
バックアップからの項目の除外	56

イメージ作成モード	58
バックアップ処理前後に実行するコマンド	58
バックアップの分割	59
バックアップのベリファイ オプション	60
バックアップの予備コピー	61
リムーバブル メディアの設定	61
バックアップのコメント	62
エラー処理	63
バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定	64
コンピュータのシャットダウン	65
バックアップ処理のパフォーマンス	65

4.3.1 スケジュール設定

[スケジュール] タブを使用すると、バックアップを指定し、スケジュール設定をベリファイできます。



バックアップおよびベリファイ実行の間隔を、次のいずれかから選択して設定できます。

- **ノンストップ**: バックアップは 5 分おきに実行されます。
- **日単位** 『45ページ』: 処理は 1 日 1 回以上実行されます。

- **週単位** 『45ページ』：処理は1週間に1回、または1週間に複数回、指定した曜日に実行されます。
- **月単位** 『46ページ』：処理は1か月に1回、または1か月に複数回、指定した日に実行されます。
- **イベント発生時** 『46ページ』：処理はイベントの発生時に実行されます。
- **スケジュールを設定しない**：現在の処理に対してスケジューラがオフになります。この場合、バックアップやベリファイはそれぞれ、メイン ウィンドウで **[今すぐバックアップ]** または **[ベリファイ]** をクリックした場合にのみ実行されます。

詳細設定

[詳細設定] をクリックすると、バックアップおよびベリファイの次の追加設定を指定できます。

- スケジュールされた処理の実行を、コンピュータが使用中でない状態（スクリーン セーバーが表示される、またはコンピュータがロックされている状態）になるまで延期するには、**[コンピュータのアイドル時にのみバックアップを実行]** チェックボックスをオンにします。ベリファイのスケジュールを設定すると、チェックボックスが **[コンピュータのアイドル時にのみベリファイを実行する]** に変化します。
- スリープ/休止状態のコンピュータを起動して、スケジュールされた処理を実行するには、**[スリープ/休止状態のコンピュータを起動]** チェックボックスをオンにします。
- スケジュールした時刻にコンピュータの電源が入っていない場合、処理は実行されません。実行されなかった処理は、次のシステム起動時に強制的に実行することができます。そのように設定するには、**[システム起動時に遅延して実行（分単位）]** チェックボックスをオンにします。

さらに、システムを起動して一定時間後にバックアップを開始するために、時間遅延を設定できます。たとえば、システム起動の 20 分後にバックアップを開始するには、該当するボックスに「20」と入力します。

- USB フラッシュ ドライブへのバックアップ、または USB フラッシュ ドライブに存在するバックアップのベリファイを設定すると、もう 1 つのチェックボックス、**[現在のターゲット デバイスが接続されている場合に実行]** が表示されます。チェックボックスをオンにすると、スケジュールした時刻に USB フラッシュ ドライブが接続されてい

かったために実行されなかった処理を、USB フラッシュ ドライブが接続されたときに実行することができます。

- リムーバブル メディア（たとえば、USB フラッシュ ドライブ）またはリモート ストレージ（たとえば、ネットワーク フォルダまたは NAS）にあるデータを定期的にバックアップする場合、**[現在のソース デバイスが接続されている場合に実行]** チェックボックスをオンにすることをお勧めします。バックアップの予定時間に、外部のストレージ デバイスが利用できないことも多いため、この設定は便利です。この場合、チェックボックスをオンにすると、デバイスが接続または取り付けられた時点で、予定されていたバックアップ処理が開始されます。

4.3.1.1 日単位の実行パラメータ

日単位の処理の実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **開始時刻または実行間隔**
 - **[時刻:]** を選択した場合、開始時刻を設定します。時と分を手動で入力するか、上下の矢印ボタンを使用して開始時刻を設定します。複数の開始時刻を指定するには、**[追加]** をクリックします。
 - **[毎]** を選択した場合は、ドロップダウン リストから日単位の処理の実行間隔を選択します（例：2 時間ごと）。

[詳細設定] の説明については、「スケジュール設定 『43ページ 』」を参照してください。

4.3.1.2 週単位の実行パラメータ

週単位の処理の実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **曜日**

処理の名前をクリックして、処理を実行する日を選択します。
- **開始時刻**

処理の開始時刻を設定します。時と分を手動で入力するか、上下の矢印ボタンを使用して開始時刻を設定します。

[詳細設定] の説明については、「スケジュール設定 『43ページ 』」を参照してください。

4.3.1.3 月単位の実行パラメータ

月単位の処理の実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **実行間隔または日付**
 - **[毎]** を選択した場合、ドロップダウン リストから週の番号と曜日を選択します（たとえば、第 1 月曜日を選択すると、処理は毎月第 1 月曜日に実行されます）。
 - **[指定日]** を選択した場合、処理の実行日を選択します（たとえば、その月の 10 日、20 日、および最終日に処理を実行できます）。
- **開始時刻**

処理の開始時刻を設定します。時と分を手動で入力するか、上下の矢印ボタンを使用して開始時刻を設定します。

[詳細設定] の説明については、「スケジュール設定 『43ページ 』」を参照してください。

4.3.1.4 イベント発生時の実行パラメータ

イベント発生時の処理の実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **イベント**
 - **[ユーザー ログオン]**: 現在のユーザーがオペレーティング システムにログオンするたびに処理が実行されます。
 - **[ユーザー ログオフ]**: 現在のユーザーがオペレーティング システムからログオフするたびに処理が実行されます。
 - **[システムの起動]**: オペレーティング システムの起動時に毎回処理が実行されます。さらに、システムを起動して一定時間後にバックアップを開始するために、時間遅延を設定できます。たとえば、システム起動の 20 分後にバックアップを開始するには、該当するボックスに「20」と入力します。
 - **[システム シャットダウンまたは再起動]**: コンピュータのシャットダウン時または再起動時に毎回処理が実行されます。
- **追加条件**
 - 当日そのイベントが最初に発生したときにのみ処理を実行する場合は、**[1 日 1 回のみ]** チェックボックスをオンにします。

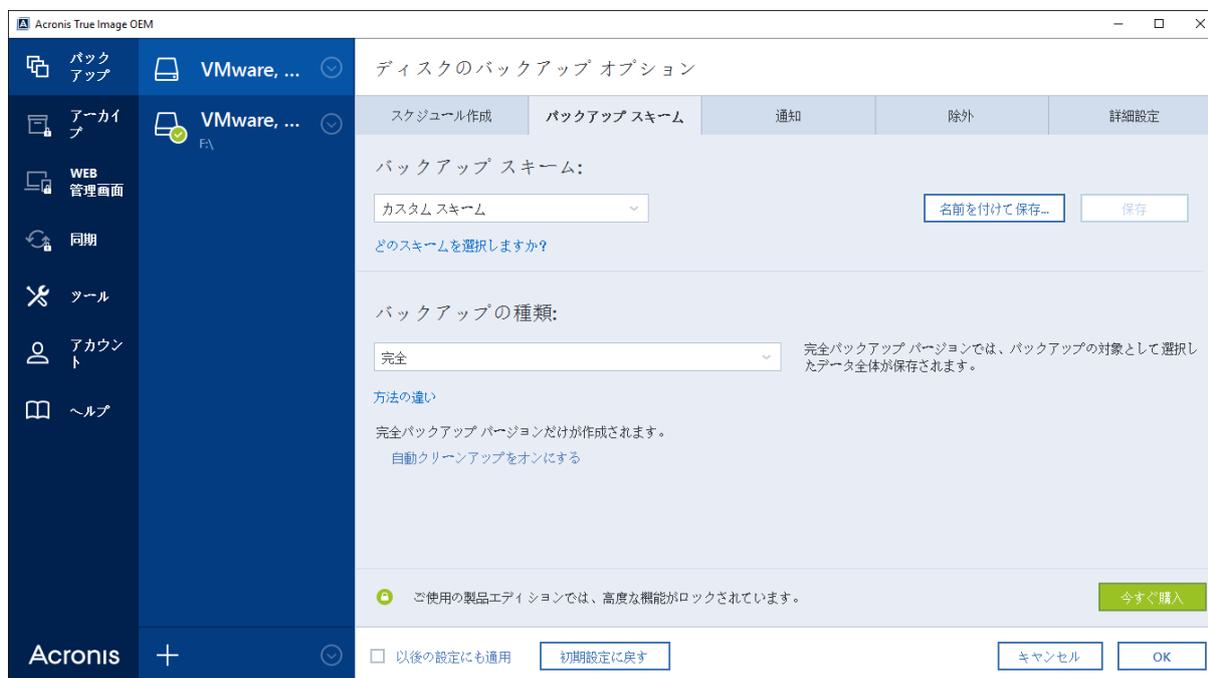
[詳細設定] の説明については、「スケジュール設定 『43ページ 』」を参照してください。

4.3.2 バックアップスキーム

バックアップ スキームとスケジューラを使用して、バックアップ戦略を設定できます。このスキームを使用することで、バックアップ ストレージ領域の使用を最適化し、データ ストレージの信頼性を向上させ、使用しなくなったバックアップ バージョンを自動的に削除することができます。

バックアップ スキームでは、以下のパラメータを定義します。

- バックアップ バージョン作成の際に使用するバックアップ方法（完全、差分、増分）
- 別の方法で作成したバックアップ バージョンのシーケンス
- バージョンのクリーンアップ ルール



Acronis True Image Data Protection で選択可能なバックアップ スキームは次のとおりです。

- **単一バージョン** 『48ページ』：最小限のバックアップ ストレージを使用する場合にこのスキームを選択します。
- **バージョン チェーン** 『48ページ』：多くの場合に最適なスキームです。
- **増分**: 5 つの増分バージョンが作成されるごとに完全バージョンを作成する場合に選択します。これはデフォルトのスキームです。

- **差分:** 最初の完全バックアップの後で差分バックアップのみを作成する場合に選択します。
- **カスタム** 『49ページ』: バックアップ スキームを手動で設定する場合に選択します。

既存のバックアップのバックアップスキームは簡単に変更できます。バックアップスキームを変更してもバックアップチェーンの整合性には影響しないため、以前の任意のバックアップバージョンからデータを復元することができます。

DVD/BD などの光学メディアにバックアップするときは、バックアップ スキームを変更できません。この場合、Acronis True Image Data Protection はデフォルトで完全バックアップのみのカスタムスキームを使用します。これは、プログラムが光学メディアに保存されたバックアップを統合できないためです。

4.3.2.1 単一バージョン スキーム

プログラムにより完全バックアップバージョンが作成されます。この完全バックアップバージョンは、手動でバックアップを行った際に毎回上書きされます。

結果: 単一で最新の完全バックアップ バージョンが作成されます。

必要なストレージ領域:最小

4.3.2.2 バージョン チェーン スキーム

注意:この機能は、ご使用の True Image エディションでは使用できない場合があります。

このオプションは、ディスク レベル バックアップを Acronis セキュアゾーン に作成する場合のみ使用可能です。

最初に完全バックアップ バージョンが作成されます。このバージョンは、手動で削除されるまで保存されます。これ以降、指定のスケジュールに従って（または手動バックアップの実行時に）、1 つの完全バックアップ バージョンと、5 つの差分バックアップ バージョンが作成されます。続いて、同じく 1 つの完全バックアップ バージョンと、5 つの差分バックアップ バージョンが再作成され、これが繰り返されます。作成したバージョンは 6 ヶ月間保存されます。この期間が経過すると、（最初の完全バージョン以外の）最も古いバックアップ バージョンを削除してもよいかどうか分析されます。この結果は、バージョンの最小限の数（8）およびバージョン チェーンの一貫性によって変わります。同じバックアップ方法で新しいバージョンが作成されると、最も古いバージョンが 1 つずつ削除されます（たと

例えば最も古い差分バージョンは、最新の差分バージョンの作成後に削除されます)。まず最も古い差分バージョンが削除され、次に最も古い完全バージョンが削除されます。

バックアップ スケジューラ設定: 月単位。

結果: 直近の 6 カ月間のバックアップ バージョンが月単位で保持されます (最初の完全バックアップ バージョンを含む。このバージョンは、さらに長期間保管可能)。

必要なストレージ領域: バージョンの数とサイズによって異なります。

4.3.2.3 カスタムスキーム

Acronis True Image Data Protection を使用すると、独自のバックアップスキームを作成できます。事前定義されたバックアップ スキームに基づいてスキームを作成することもできます。事前定義されたスキームを選択して自身の要件に合わせて変更し、その変更後のスキームを新しいものとして保存します。

既存の事前定義されたバックアップ スキームは、上書きできません。

また、完全バックアップ、差分バックアップ、または増分バックアップのバージョンを参考にして、カスタム スキームをゼロから作成することもできます。

したがって、まず該当のボックスでバックアップ方法を 1 つ選択してください。

- 完全 『29ページ』

完全バックアップ バージョンのみを作成する場合は、この方法を選択します。

- 差分 『29ページ』

完全バックアップ バージョンと差分バックアップ バージョンのみを含むバックアップ チェーンを作成する場合は、この方法を選択します。

以下のオプションのうちの 1 つを使用してスキームを設定できます。

- **[最初の完全バージョン後は、差分バージョンだけ作成する]** - バックアップ バージョン チェーンを 1 つだけ作成する場合は、この項目を選択します。このオプションでは自動クリーンアップを使用できません。
- **[次のバージョンごとに完全バージョンを作成する : [n] 差分バージョン]** - 複数のバックアップ バージョン チェーンを作成する場合は、この項目を選択します。このバックアップ スキームは信頼性の高いものですが、使用領域が多くなります。

- 増分 『29ページ』

完全バックアップ バージョンと増分バックアップ バージョンのみを含むバックアップ チェーンを作成する場合は、この方法を選択します。

以下のオプションのうちの 1 つを使用してスキームを設定できます。

- **[最初の完全バージョン後は、増分バージョンだけ作成する]** - バックアップ バージョン チェーンを 1 つだけ作成する場合は、この項目を選択します。このオプションでは自動クリーンアップを使用できません。
- **[次のバージョンごとに完全バージョンを作成する : [n] 増分バージョン]** - 複数のバックアップ バージョン チェーンを作成する場合は、この項目を選択します。このバックアップ スキームは信頼性の高いものですが、使用領域が多くなります。

自動クリーンアップのルール

使用しなくなったバックアップ バージョンを自動的に削除するには、以下のクリーンアップ ルールのうちの 1 つを設定します。

- **[次の期間が経過したバージョンを削除する [定義した期間]]** (完全バックアップの場合のみ使用可能) - バックアップ バージョンの保存期間を限定する場合は、このオプションを選択します。指定した期間を超過したバージョンは、すべて自動的に削除されます。
- **[次の期間が経過したバージョン チェーンを削除する [定義した期間]]** (増分バックアップと差分バックアップでのみ使用可能) - バックアップ バージョン チェーンの保存期間を限定する場合は、このオプションを選択します。最も古いバージョンチェーンは、指定した期間をそのチェーンの最新のバックアップバージョンが超過した場合にのみ削除されます。
- **[最長保存期間[n]バージョン (新しい順)]** (完全バックアップの場合のみ使用可能) - バックアップ バージョンの最大数を制限する場合は、このオプションを選択します。バージョン数が指定値を超えると、最も古いバックアップ バージョンが自動的に削除されます。
- **最大 [[n] つの最新のバージョン チェーンを保存する]** (増分バックアップと差分バックアップでのみ使用可能) - バックアップ バージョン チェーンの最大数を制限する場合は、このオプションを選択します。バージョン チェーン数が指定値を超えると、最も古いバックアップ バージョン チェーンが自動的に削除されます。

- **[バックアップのサイズを次のサイズ以下に保つ [定義したサイズ]]** - バックアップの最大サイズを制限する場合は、このオプションを選択します。新しいバックアップ バージョンが作成された後に、バックアップの合計サイズが、指定した値を超えているかどうか確認されます。指定した値を超えている場合は、古いバックアップ バージョンが削除されます。

最初のバックアップ バージョンのオプション

バックアップの最初のバージョンは多くの場合、最も重要なバージョンの 1 つです。このバージョンには、初期のデータ状態（最近インストールした Windows のシステム パーティションなど）や、その他の安定したデータ状態（ウィルス チェック完了後のデータなど）が保存されるためです。

[バックアップの最初のバージョンは削除しない] - 初期のデータ状態を維持する場合は、このチェックボックスをオンにします。最初の完全バックアップ バージョンが 2 つ作成されます。最初のバージョンは自動クリーンアップから除外され、手動で削除するまで保存されます。

増分または差分バックアップを選択した場合、最初のバックアップ チェーンは 2 番目の完全バックアップ バージョンから開始されます。3 番目のバックアップ バージョンのみが増分または差分バックアップになります。

このチェックボックスをオンにすると、**[[n] つの最新バージョンだけ保存する]** チェックボックスが、**[1+[n] つの最新バージョンだけ保存する]** に変わります。

カスタム バックアップ スキームの管理

既存のバックアップ スキームに何らかの変更を加えた場合、変更したスキームを新しいものとして保存できます。その場合、そのバックアップ スキームに新しい名前を指定する必要があります。

- 既存のカスタム スキームを上書きすることもできます。
- 既存の事前定義されたバックアップ スキームは、上書きできません。
- スキーム名には、その OS でファイル名に使用できるすべての文字（記号）を使用できます。バックアップ スキーム名の最大長は、255 文字です。
- カスタム バックアップ スキームは、最高 16 個まで作成できます。

カスタム バックアップ スキームを作成した後は、バックアップを設定するときに他の既存のバックアップ スキームと同様に使用できます。

また、カスタム バックアップ スキームを保存しないで使用することもできます。その場合は、作成したときのバックアップでのみ使用され、他のバックアップには使用できません。

カスタム バックアップ スキームが必要なくなった場合は、削除できます。バックアップ スキームを削除するには、バックアップ スキームのリストで削除するスキームを選択し、**[削除]** をクリックして、確認ウィンドウで再度 **[スキームを削除]** をクリックします。

事前定義されたバックアップ スキームは、削除できません。

カスタム スキーム例

注意:この機能は、ご使用の *True Image* エディションでは使用できない場合があります。

このオプションは、ディスク レベル バックアップを Acronis セキュアゾーン に作成する場合のみ使用可能です。

ディスク バックアップ: 完全バージョン 2 カ月ごとと差分バックアップ月 2 回

ケース: システム パーティションを月 2 回バックアップし、新しい完全バックアップ バージョンを 2 カ月ごとに作成する必要があります。また、バックアップ バージョンの保存に使用するディスク領域は、100 GB 以下にします。カスタム バックアップ スキームを使用して、これを実行する方法について説明します。

1. **[バックアップと復元]** タブで、**[ディスクとパーティションのバックアップ]** をクリックします。
2. **[ディスク バックアップ]** ウィンドウで、システム パーティション (通常、C:) を選択し、バックアップの保存先を指定します。詳細については、「パーティションとディスクのバックアップ」を参照してください。
3. **[スケジュール]** 項目の **[オンにする]** をクリックします。**[スケジューラ]** ウィンドウで、**[月単位]** をクリックして、たとえば、毎月 1 日と 15 日を指定します。これにより、約 2 週間ごとにバックアップ バージョンが作成されます。次に、バックアップ処理の開始時刻を指定します。

4. **[バックアップ スキーム]** 項目の横にある **[増分]** (**[増分]**はデフォルトのバックアップ スキーム) をクリックします。
5. **[ディスク バックアップ オプション]** ウィンドウで、**[バックアップ スキーム]** タブが選択されていることを確認します。
6. **[増分スキーム]** ではなく、**[カスタム スキーム]** を選択します。
7. **[バックアップの種類]** ボックスで、ドロップ ダウン リストから **[差分]** を選択します。
8. **[次のバージョンごとに完全バージョンを作成する: [n] 差分バージョン]** をクリックして、「3」を入力するか、または選択します。

この場合、プログラムは最初に初回の完全バックアップ バージョンを作成し (バックアップ処理の設定方法にかかわらず、初回バックアップ バージョンは完全バックアップになります)、3 つの差分バージョンを約 2 週間ごとに作成します。そして再び 1 つの完全バージョンと 3 つの差分バージョンを作成します。このように新しい完全バージョンは 2 カ月ごとに作成されます。

9. バージョンの保存領域を制限するには、**[自動クリーンアップをオンにする]** をクリックします。
10. **[バックアップのサイズを次のサイズ以下に保つ [定義したサイズ]]** をクリックして、「100」、「GB」を入力するか、または選択して、**[OK]** をクリックします。

バックアップの合計サイズが 100 GB を超えた場合、Acronis True Image Data Protection は既存のバックアップ バージョンをクリーンアップして、残りのバージョンがサイズ制限を満たすようにします。プログラムは、1 つの完全バックアップ バージョンと 3 つの差分バックアップ バージョンで構成される、最も古いバックアップ チェーンを削除します。

11. **[ディスク バックアップ]** ウィンドウで、すべての設定が正しいことを確認し、**[今すぐバックアップ]** をクリックします。初回バックアップをスケジューラで指定した時刻にのみ実行するようになるには、**[今すぐバックアップ]** ボタンの右側にある下向き矢印をクリックして、ドロップ ダウン リストで **[後で実行]** を選択します。

4.3.3 バックアップ処理の通知

バックアップまたはリカバリの処理には 1 時間以上かかる場合があります。Acronis True Image Data Protection では、この処理の終了時に電子メールで通知を受け取ることができます。また、処理中に発行されたメッセージや、処理完了後の完全な処理ログもプログラムによって送信されます。

デフォルトでは、すべての通知は無効になっています。

空きディスク領域のしきい値

バックアップストレージの空き領域が指定のしきい値より少なくなったときに、通知を受け取ることができます。バックアップの開始後、選択したバックアップ保存先の空き領域が指定値よりも既に少ないことが Acronis True Image Data Protection によって検出された場合には、プログラムで実際のバックアップ処理は開始されず、空き領域が少ない旨の通知メッセージが直ちに表示されます。メッセージには次の 3 つの選択肢が示されます。メッセージを無視してバックアップを続行する、バックアップを保存する別の場所を参照する、バックアップをキャンセルする、の中からいずれかを選択します。

バックアップの実行中に空き領域が指定値より少なくなった場合にも、プログラムにより同じメッセージが表示されるため、同様の選択を行う必要があります。

ディスクの空き領域のしきい値を設定するには、次の手順を実行します。

- **[ディスクの空き領域が不十分なときに通知メッセージを表示する]** チェックボックスをオンにします。
- **[サイズ]** ボックスでしきい値を入力または選択し、単位を選択します。

Acronis True Image Data Protection では、次のストレージデバイスの空き領域をチェックすることができます。

- ローカルハードドライブ
- USB カードおよびドライブ
- ネットワーク共有 (SMB/NFS)

[エラー処理] 設定で **[処理中にメッセージやダイアログを表示しない (サイレントモード)]** チェックボックスがオンになっている場合、メッセージは表示されません。

FTP サーバーと *CD/DVD* ドライブでは、このオプションを有効にすることはできません。

電子メールによる通知

メール通知の送信に使用するメール アカウントを指定することができます。

メール通知を設定するには:

1. **[処理状態に関する電子メール通知を送信する]** チェックボックスを選択します。

2. 電子メールを設定します。

- **[宛先]** フィールドに電子メール アドレスを入力します。複数の電子メール アドレスをセミコロンで区切って入力することもできます。
- 送信メール サーバー (SMTP) を **[送信メール サーバー (SMTP)]** フィールドに入力します。
- 送信メール サーバーのポート番号を設定します。デフォルトの場合、ポート番号は 25 に設定されます。
- 必要に応じて、**[SMTP 認証]** チェック ボックスを選択し、対応するフィールドにユーザー名とパスワードを入力します。

3. 設定が正しいかどうかをチェックするには、**[テスト メッセージを送信する]** ボタンをクリックします。

テスト メッセージの送信に失敗した場合は、以下を実行します。

1. **[拡張設定を表示]** をクリックします。

2. 追加の電子メール設定を行います。

- **[差出人]** フィールドに電子メール送信者のアドレスを入力します。指定するアドレスが不明な場合は、たとえば、*aaa@bbb.com* のような標準形式で任意のアドレスを入力します。
- 必要に応じて、**[件名]** フィールドのメッセージの件名を変更します。
- **[受信メール サーバーにログオンする]** チェック ボックスをオンにします。
- 受信メール サーバー (POP3) を **[POP3 サーバー]** フィールドに入力します。
- 受信メール サーバーのポート番号を設定します。デフォルトの場合、ポート番号は 110 に設定されます。

3. **[テストメッセージを送信する]** ボタンをもう一度クリックします。

その他の通知設定:

- 処理の完了に関する通知を送信するには、**[処理が正常に完了したら通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。
- 処理の失敗に関する通知を送信するには、**[処理が失敗したら通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。

- 処理メッセージを添付して通知を送信するには、**[ユーザーの操作が必要な場合に通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。
- 処理の詳細なログを添付して通知を送信するには、**[完全なログを通知に含める]** チェックボックスをオンにします。

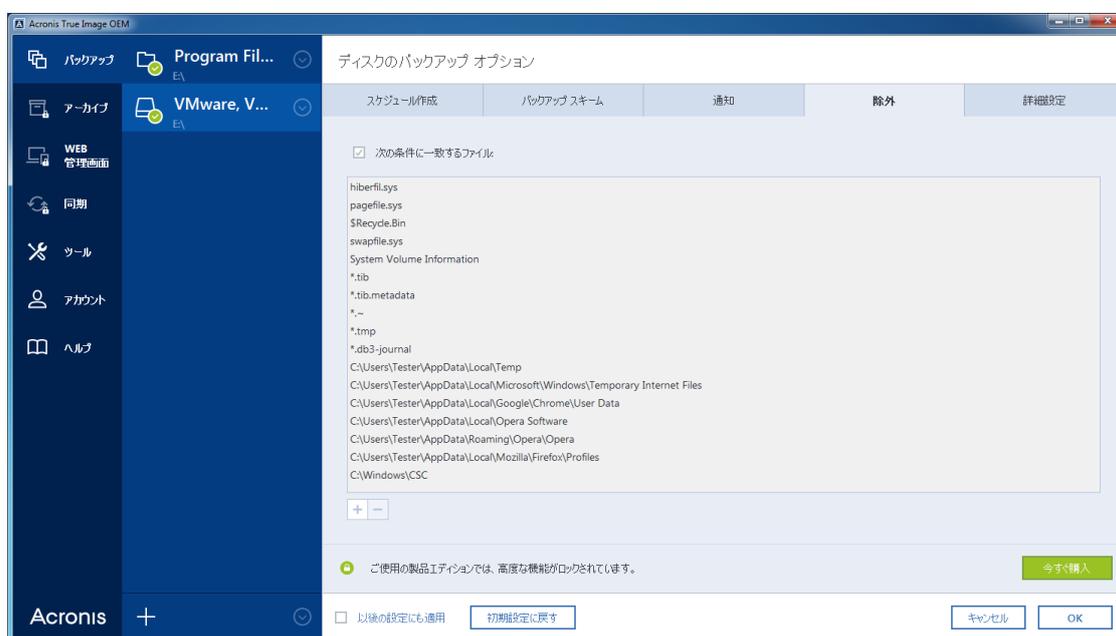
4.3.4 バックアップからの項目の除外

バックアップから不要なファイルを除外する場合は、バックアップ オプションの **[除外]** タブで該当するファイルの種類を指定します。ディスクのバックアップ、ファイルのバックアップ、またはオンライン バックアップに対して、除外を指定できます。

バックアップ対象として特定のファイルを選択した場合、除外設定で除外することはできません。除外設定は、バックアップ対象として指定されたパーティション、ディスク、またはフォルダ内に存在するファイルにのみ適用できます。

デフォルトの除外設定を使用する方法

アプリケーションをインストールすると、すべての除外設定は初期値に設定されます。これらのオプションは、現在のバックアップ処理のためだけに変更することも、今後のすべてのバックアップ向けに変更することも可能です。**[デフォルトとして保存する]** チェックボックスをオンにすると、変更した設定が今後のバックアップ作業すべてにデフォルトで適用されます。製品のインストール後に変更した設定をすべて初期値にリセットする場合は、**[初期設定にリセット]** ボタンをクリックします。



除外の対象と方法を次に示します。

1. 対応するチェックボックスをチェックすることで、隠しファイルとシステム ファイルをバックアップから除外できます。

システム パーティションのバックアップから隠しファイルやシステム ファイルを除外することはお勧めできません。

2. 指定した条件と一致するファイルを除外することができます。この場合は、**[次の条件に一致するファイル]** チェックボックスをオンにし、除外条件を入力して **[追加]** をクリックします。

除外条件を追加する方法は、次のとおりです。

- バックアップから除外するファイル名を、次のように明示的に入力します。
 - `file.ext` - 該当するファイルはすべてバックアップから除外されます。
 - `C:¥file.ext` - C: ドライブにある `file.ext` ファイルが除外されます。
- 次のように、ワイルドカード文字 (* および ?) を使用できます。
 - `*.ext` - `.ext` の拡張子を持つすべてのファイルが除外されます。
 - `??name.ext` - 拡張子が `.ext` のファイルで、合計 6 文字 (最初の 2 文字が任意の文字 (??) で、残りの部分が `name`) のファイル名を持つすべてのファイルが除外されます。
- ディスクレベル バックアップからフォルダを除外する場合は、**[参照]** をクリックし、除外するフォルダをディレクトリ ツリーで選択して、**[OK]** → **[追加]** の順にクリックします。

たとえば誤って追加した条件を削除するには、その条件の右にある **[削除]** アイコンをクリックします。

4.3.4.1 オンライン データの除外

バックアップを開始する前に、バックアップする必要のないデータを除外することでバックアップ サイズを縮小できます。Acronis True Image Data Protection では、Dropbox や Microsoft OneDrive などのサードパーティ製クラウド サービスにアップロード済みまたは同期済みのローカル データを除外することができるようになりました。このデータは既に確実に保護されており、コンピュータへのダウンロードも簡単に実行できます。そのため、こ

これらのデータを除外してバックアップ サイズを縮小し、バックアップ処理の速度を向上させることができます。

バックアップからオンライン データ ソースを除外するには、次の手順を実行します。

1. バックアップ処理を開始する前に、**[バックアップから項目を除外]** をクリックします。
2. 除外する項目の横にあるチェックボックスをオフにして、**[OK]** をクリックします。

4.3.5 イメージ作成モード

これらのパラメータを使用して、データが含まれるセクタと、パーティションまたはハードディスク全体のコピーを作成できます。たとえば、Acronis True Image がサポートしていないオペレーティングシステムが含まれているパーティションまたはディスクをバックアップする場合にこの機能が役立ちます。このモードでは、より多くの処理時間がかかり、通常より大きいイメージ ファイルが作成されます。

- セクタ単位のイメージを作成するには、**[セクタ単位でバックアップする]** チェック ボックスをオンにします。
- ディスクのすべての未割り当ての領域をバックアップに含めるには、**[未割り当て領域をバックアップする]** チェック ボックスをオンにします。

このチェック ボックスは、**[セクタ単位でバックアップする]** チェック ボックスがオンの場合にのみ使用できます。

4.3.6 バックアップ処理前後に実行するコマンド

バックアップ処理の前後に自動的に実行するコマンド（またはバッチ ファイル）を指定することができます。

たとえば、バックアップを開始する前に特定の Windows プロセスを開始/停止することや、バックアップ対象のデータを調べることができます。

コマンド（バッチ ファイル）を指定する手順は、次のとおりです。

- バックアップ処理の開始前に実行するコマンドを **[処理前に実行するコマンド]** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**[編集]** ボタンをクリックします。

- バックアップ処理の終了後に実行するコマンドを **[処理後に実行するコマンド]** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**[編集]** ボタンをクリックします。

ユーザーの入力を必要とする対話型のコマンド (pause など) は実行しないでください。これらのコマンドは、サポートされていません。

4.3.6.1 バックアップ用ユーザー コマンドの編集

バックアップ処理の前または後に実行するユーザー コマンドを指定することができます。

- コマンドを **[コマンド]** フィールドに入力するか、一覧から選択します。**[...]** をクリックすると、バッチ ファイルを選択できます。
- **[作業ディレクトリ]** フィールドに、コマンド実行のためのパスを入力するか、入力済みのパスの一覧から選択します。
- コマンド実行引数を **[引数]** フィールドに入力するか、一覧から選択します。

[コマンドの実行が完了するまで処理を行わない] パラメータを無効にすると (デフォルトでは有効)、コマンド実行と並行してバックアップ処理を実行できます。

[ユーザー コマンドが失敗したら処理を中止する] パラメータを有効にした場合は (デフォルトでは有効)、コマンド実行でエラーが発生すると処理が中止されます。

入力したコマンドをテストするには、**[コマンドのテスト]** ボタンをクリックします。

4.3.7 バックアップの分割

Acronis True Image Data Protection では、既存のバックアップを分割することはできません。バックアップの分割は作成時のみ可能です。

サイズの大きいバックアップを、元のバックアップを構成するいくつかのファイルに分割することができます。また、リムーバブル メディアに書き込めるようにバックアップを分割することもできます。

デフォルトの設定は **[自動]** です。この設定を使用すると、Acronis True Image Data Protection は次のように動作します。

ハードディスクにバックアップする場合:

- 選択したディスクに十分な空き領域があり、予想ファイル サイズがファイル システムの許容範囲内である場合は、1 つのバックアップ ファイルを作成します。
- ストレージディスクに十分な空き領域があっても、予想ファイル サイズがファイル システムの許容範囲を超える場合、プログラムは自動的にイメージを複数のファイルに分割します。
- ハードディスクに、イメージを保存するだけの十分な空き領域がない場合、プログラムは警告を表示し、問題への対処方法の入力を求めます。空き領域を増やして続行するか、別のディスクを選択することができます。

CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R/RW、および BD-R/RE にバックアップする場合:

- 前のディスクがいっぱいになると、Acronis True Image Data Protection によって新しいディスクを挿入するように指示されます。

また、ドロップダウン リストからファイル サイズを選択することもできます。バックアップは、指定したサイズの複数のファイルに分割されます。後で CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R/RW、または BD-R/RE にバックアップを書き込むためにハードディスクにバックアップを保存する場合には、この機能が役立ちます。

CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R/RW、および BD-R/RE に直接イメージを作成すると、ハードディスクに作成するよりも大幅に時間がかかる場合があります。

4.3.8 バックアップのベリファイ オプション

注意:ご使用の製品エディションでは一部の機能を使用できない場合があります。

追加のベリファイ設定を指定することができます。**作成後にバックアップをベリファイする。**

このオプションを有効にすると、バックアップの直後に、最近作成または追加したバックアップ バージョンの整合性がチェックされます。重大なデータのバックアップ、またはディスク/パーティションのバックアップを設定するときには、バックアップを使用して消失したデータを確実にリカバリできるよう、このオプションを有効にすることをお勧めします。

標準ベリファイ

バックアップが正常な状態であることを確認するために、バックアップのベリファイをスケジュールすることも可能です。デフォルトでは、標準ベリファイは次の設定でオンになります。

- 間隔:週 1 回
- 日付:バックアップが開始された日
- 時間:バックアップが開始された時間 + 15 分
- 詳細設定:[**コンピュータのアイドル時にのみベリファイを実行**] チェックボックスをオン

デフォルト設定を変更して、独自のスケジュールを指定することもできます。詳細については、「スケジュール設定 『43ページ』」を参照してください。

4.3.9 バックアップの予備コピー

バックアップの予備コピーを作成して、ファイル システムまたはネットワーク ドライブに保存できます。

予備コピーを作成する手順は、次のとおりです。

- [**バックアップの予備コピーを作成する**] チェックボックスをオンにします。
- [**場所の設定...**] をクリックし、バックアップ コピーの場所を指定します。

すべてのバックアップ オプション (バックアップの圧縮、バックアップの分割など) がソース バックアップから継承されます。

予備コピーには、バックアップとして選択したすべてのデータが常に含まれます。つまり、予備コピーを作成する場合は常にソース データの完全バックアップが作成されます。

また、通常のバックアップと予備コピーは、両方同時ではなくどちらか一方しか実行できないので、利便性とデータ セキュリティが向上するかわりに、バックアップにかかる時間が増えます。

4.3.10 リムーバブル メディアの設定

リムーバブル メディアにバックアップする際には、追加コンポーネントを書き込むことで、このメディアをブータブルにすることができます。このようにすると、別のブータブル ディスクが不要になります。

フラッシュ ドライブが NTFS または exFAT でフォーマットされている場合は、Acronis True Image Data Protection ではブータブル メディアは作成できません。ドライブは、FAT16 または FAT32 ファイルシステムにしてください。

次の設定を使用できます。

- **メディアに Acronis True Image Data Protection を配置する**

Acronis True Image Data Protection: USB、PC カード（以前の PCMCIA）、SCSI インターフェイス、およびそれらを介して接続されるストレージデバイスがサポートされます。このコンポーネントの使用を強くおすすめします。

- **Acronis システム レポートをメディアに配置する**

Acronis システム レポート: システム レポートが生成されます。このレポートは、プログラムの問題が発生したときに、システムに関する情報を集めるのに利用できます。レポート生成は、ブータブル メディアから Acronis True Image Data Protection を起動する前でも実行可能です。生成されたシステム レポートは、USB フラッシュ ドライブに保存できます。

- **リムーバブル メディアにバックアップを作成する際に最初のメディアの挿入を求める**

リムーバブル メディアにバックアップする際に、[最初のメディアを挿入] というメッセージを表示するかどうかを選択できます。デフォルトの設定では、メッセージ ボックスの [OK] がクリックされるまでプログラムの実行が停止するので、ユーザーがその場にいなければリムーバブル メディアへのバックアップはできません。したがって、リムーバブル メディアへのバックアップをスケジュールする場合は、応答を要求するメッセージ表示を無効にする必要があります。こうしておくこと、リムーバブル メディアが利用可能（CD-R/RW が挿入されているなど）であれば、バックアップを無人で実行できます。

他の Acronis 製品がコンピュータにインストールされている場合は、それらのプログラムのコンポーネントのブータブル版も同様に利用できます。

4.3.11 バックアップのコメント

このオプションを使用すると、バックアップに対してコメントを追加できます。バックアップのコメントは、ブータブル メディアを使用してデータを復元するときなど、あとで必要なバックアップを検索するときに役立つことがあります。

バックアップにコメントがない場合、コメント領域にコメントを入力します。コメントが既に存在している場合は、**[編集]** をクリックするとそのコメントを編集できます。

4.3.12 エラー処理

バックアップの実行中にエラーが発生した場合は、バックアップ処理が中止されてメッセージが表示され、エラーへの処理に関するユーザーからの応答を待つ状態になります。エラーへの処理方法を設定しておくことで、バックアップ処理は中止されず、設定した規則に従ってエラーが対処されて、処理は継続されます。

以下のエラー処理方法を設定することができます。

- **[処理中にメッセージやダイアログを表示しない (サイレントモード)]**: この設定を有効にすると、バックアップ処理中のエラーが無視されます。バックアップ処理を制御できない場合に便利です。バックアッププロセスの終了後にすべての処理の詳細ログを表示できます。
- **[不良セクタを無視する]**: このオプションは、ディスクとパーティションのバックアップの場合のみ使用できます。このオプションを有効にすると、ハードディスク上に不良セクタがある場合でもバックアップを正常に完了できます。

たとえば次のような場合など、ハードディスクが故障しかかっている場合に、このチェックボックスをオンにすることをおすすめします。

- ハードディスクドライブの動作中にかなり大きな異音や摩擦音が発生している場合。
- S.M.A.R.T.システムによってハードディスクドライブの問題が検出され、可能な限り早くドライブをバックアップするよう促された場合。

このチェックボックスをオフのままにした場合、ドライブ上に不良セクタがあると考えられるためにバックアップが失敗することがあります。

- **[バックアップが失敗した場合は再試行する]**: このオプションを指定すると、何らかの理由でバックアップが失敗したときにバックアップが自動的に再試行されます。試行回数および試行間隔を指定できます。バックアップが繰り返しエラーで中断される場合は、バックアップは作成されません。

データを USB フラッシュドライブまたは USB ハードドライブにバックアップする場合は、このオプションを利用できません。

4.3.13 バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定

注意:この機能は、ご使用の True Image エディションでは使用できない場合があります。

ファイルのバックアップに関するセキュリティ設定を指定することができます（これらの設定が関係するのはファイル/フォルダのバックアップだけです）。

- **[バックアップにファイルのセキュリティ設定を保持する]:** このオプションを選択すると、バックアップ ファイルのすべてのセキュリティ プロパティ（グループまたはユーザーに割り当てられる許可）が、将来のリカバリに備えて保存されます。

デフォルトでは、ファイルとフォルダは元の Windows セキュリティ設定（ファイルの **[プロパティ]** -> **[セキュリティ]** で設定される、各ユーザーまたはユーザー グループに与えられる書き込み、読み取り、実行などの許可）と共にバックアップに保存されます。セキュリティで保護されたファイルまたはフォルダをコンピュータ上でリカバリしようとしているユーザーに、アクセス許可が与えられていない場合は、そのファイルの読み取りや変更ができなくなる可能性があります。

このような問題を回避するため、バックアップの際にファイルのセキュリティ設定を保存するのを無効にすることができます。このようにすれば、リカバリされたファイル/フォルダのアクセス許可は常に、リカバリ先のフォルダ（親フォルダ、ルートにリカバリされる場合は親ディスク）から継承されます。

または、ファイルのセキュリティ設定をリカバリ時に無効化できます。これは、ファイルのセキュリティ設定がバックアップに保存されている場合でも可能です。結果は同じになります。

- **[暗号化されたファイルを暗号解除された状態でバックアップに格納する]**（デフォルト設定は **[無効]**）：バックアップに暗号化ファイルが含まれており、リカバリ後にそのファイルをすべてのユーザーからアクセス可能にしたい場合は、このオプションをオンにします。オフにすると、ファイル/フォルダを暗号化したユーザーのみがそのファイル/フォルダを読むことができます。暗号化されたファイルを別のコンピュータにリカバリする場合にも、暗号解除が役立つことがあります。

Windows XP 以降のオペレーティング システムで利用可能な暗号化機能を使用しない場合は、このオプションは無視してください。ファイル/フォルダの暗号化を設定するには、**[プロパティ]** -> **[全般]** -> **[詳細設定]** -> **[内容を暗号化してデータをセキュリティで保護する]** の順に選択します。

これらのオプションは、ファイルやフォルダのバックアップのみに関係します。

4.3.14 コンピュータのシャットダウン

設定するバックアップ処理に時間がかかることが分かっている場合は、**[バックアップの完了後にコンピュータをシャットダウンする]** チェックボックスを選択することをおすすめします。これにより、処理が完了するまで待つ必要がなくなります。プログラムはバックアップを実行し、自動的にコンピュータの電源を切ります。

このオプションは、バックアップのスケジュールを設定する場合にも便利です。たとえば、すべての作業を保存するには、平日の夕方に毎日バックアップを実行できます。バックアップのスケジュールを設定して、チェックボックスをオンにします。この設定の場合、仕事が完了したら、そのままコンピュータから離れることができます。なぜなら、重要なデータがバックアップされ、コンピュータの電源が切られることがわかっているからです。

4.3.15 バックアップ処理のパフォーマンス

[パフォーマンス] タブでは、以下の設定を行うことができます。

圧縮レベル

バックアップの圧縮レベルを次の中から選択することができます。

- **[なし]**: データが圧縮されずにコピーされるため、バックアップファイルのサイズは非常に大きくなります。
- **[通常]**: 推奨されるデータ圧縮レベルです（デフォルトの設定）。
- **[高]**: バックアップファイルが高い圧縮レベルで圧縮されるため、バックアップの作成時間が長くなります。
- **[最大]**: バックアップは最高圧縮レベルで圧縮されるため、バックアップの作成時間が最も長くなります。

最適なデータ圧縮レベルは、バックアップに保存されるファイルの種類によって異なります。たとえば、*.jpg*、*.pdf*、*.mp3* など、既に圧縮されたファイルを含むバックアップでは、最高圧縮レベルで圧縮してもバックアップサイズが大幅に縮小されることはありません。

処理の優先順位

バックアップ処理や復元処理の優先度を変更すると、（優先度の上げ下げによって）バックアップの処理速度を速くしたり遅くしたりできますが、実行中の他のプログラムのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性もあります。システムで実行中の処理の優先度に応じて、処理に割り当てられる CPU やシステムリソースの使用量が決定されます。処理の優先度を下げると、他の CPU タスクで使用されるリソースを増やすことができます。バックアップや復元の優先度を上げると、実行中の他の処理からリソースを取得することができ、処理の速度が向上します。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

処理の優先度は、次のいずれかに設定することができます。

- **[低]**（デフォルトで有効）：バックアップ処理や復元処理の速度は低下しますが、他のプログラムのパフォーマンスは向上します。
- **[通常]**：バックアップ処理や復元処理に他の処理と同じ優先度が割り当てられます。
- **[高]**：バックアップ処理や復元処理の速度は向上しますが、他のプログラムのパフォーマンスは低下します。このオプションを選択すると、Acronis True Image Data Protection による CPU 使用率が 100%になる場合があるため注意してください。

ネットワーク接続速度の上限

ネットワークドライブまたは FTP にデータをバックアップすると、Acronis True Image が使用する接続がコンピュータのその他のネットワーク接続に及ぼす影響を軽減することができます。速度の低下を気にすることなくインターネットやネットワーク リソースを使用できる接続速度を設定します。

接続速度を下げる手順は、次のとおりです。

- **[転送速度の上限]** チェック ボックスをオンにして、適切な値と単位（キロビット/秒またはメガビット/秒）を指定します。

4.4 バックアップの操作

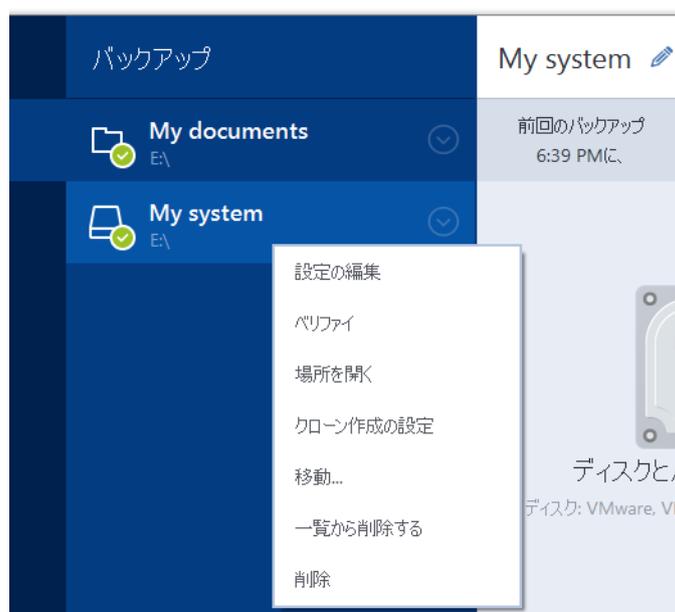
セクションの内容

バックアップ処理メニュー 67

バックアップリストアイコン	68
バックアップのベリファイ	69
バックアップの保存先の分散	70
既存のバックアップをリストに追加する	72
バックアップとバックアップ バージョンの削除	72

4.4.1 バックアップ処理メニュー

バックアップ処理メニューからは、選択したバックアップに関して実行できるその他の操作に簡単にアクセスできます。



バックアップ処理メニューには次の項目が含まれる場合があります。

- **[設定の編集]** - 現在のバックアップ設定を編集できます。
- **[再設定]** (バックアップリストに手動で追加したバックアップの場合) - 以前のバージョンの Acronis True Image によって作成されたバックアップの設定が行えます。この項目は、別のコンピュータで作成し、設定をインポートせずにバックアップ リストに追加したバックアップでも表示されます。

バックアップの設定がない場合、**[今すぐバックアップ]** をクリックしてバックアップを更新することはできません。また、バックアップの設定を編集することも、設定のクローンを作成することもできません。

- **[再設定]** (オンライン バックアップの場合) - 選択したオンライン バックアップを現在のコンピュータにバインドできます。そのためには、この項目をクリックし、バックアップの設定を再度行います。1 台のコンピュータでアクティブにできるのは、1 つのオンライン バックアップのみです。
- **[ベリファイ]** - バックアップのベリファイを開始します。
- **[場所を開く]** - バックアップファイルが格納されているフォルダを開きます。
- **[設定のクローン作成]** - 初期のバックアップ設定を持つ、**(1) [最初のバックアップの名前]** という名前の新しい空のバックアップボックスを作成します。設定を変更して保存し、クローンのバックアップボックスで **[今すぐバックアップ]** をクリックします。
- **[移動]** - すべてのバックアップファイルを他の保存先に移動するにはこれをクリックします。後続のバックアップバージョンは新しい場所に保存されます。

バックアップ設定を編集してバックアップの保存先を変更した場合は、新しいバックアップバージョンのみが新しい場所に保存されます。以前のバックアップバージョンは、元の場所に残ります。

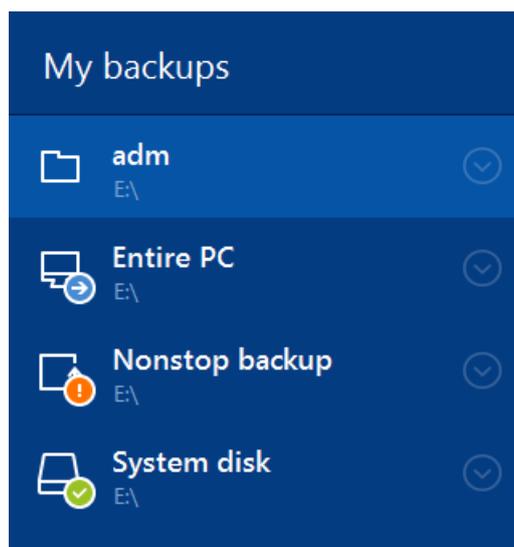
- **[一覧から削除する]** - [マイバックアップ] 領域に表示されているバックアップリストから現在のバックアップを削除します。この操作によって、(スケジュールが設定されていた場合) 削除されたバックアップのスケジュール設定が無効になりますが、バックアップファイルは削除されません。
- **[削除]** - バックアップの種類に応じて、バックアップされている場所からバックアップを完全に削除したり、バックアップを完全に削除するかバックアップボックスのみを削除するかを選択したりすることができます。バックアップボックスを削除する場合、バックアップファイルはそのロケーションに残り、後でバックアップをリストに追加することができます。バックアップを完全に削除した場合、削除を元に戻すことはできません。

4.4.2 バックアップリストアイコン

バックアップリストで作業している間は特別なアイコンが表示されます。各アイコンは次の情報を示します。

- バックアップの種類

- バックアップの現在の状態



バックアップの種類アイコン

-  コンピュータ全体のバックアップ
-  ディスクレベルのバックアップ
-  ファイルレベルのバックアップ

バックアップの状態アイコン

-  前回のバックアップに失敗しました。
-  バックアップが進行中です。
-  前回のバックアップはユーザーにより一時停止されました。
-  前回のバックアップはユーザーにより停止されました。

4.4.3 バックアップのベリファイ

ベリファイ処理でバックアップからデータを復元できるかどうかを確認されます。

Windowsでのバックアップのベリファイ

バックアップ全体をベリファイするには、次の手順を実行します。

1. Acronis True Image Data Protection を起動し、サイドバーの **[バックアップ]** をクリックします。
2. バックアップの一覧からベリファイするバックアップを選択して、**[操作]** をクリックし、**[ベリファイ]** をクリックします。

スタンドアロンバージョンのAcronis True Imageでのバックアップのベリファイ (ブータブルメディア)

特定のバックアップバージョンまたはバックアップ全体をベリファイするには、次の手順を実行します。

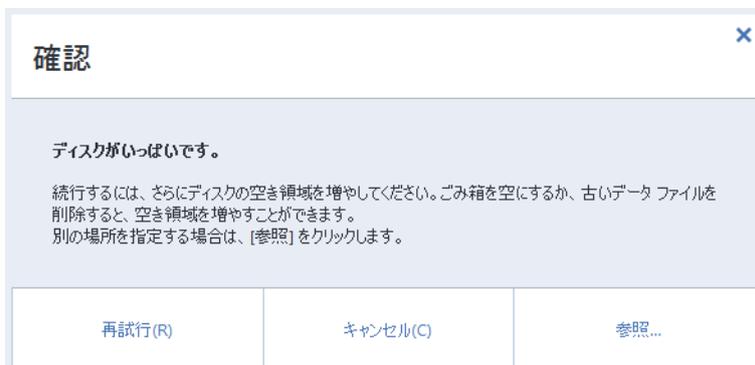
1. **[復元]** タブで、ベリファイするバージョンを含むバックアップを見つけます。バックアップがリストに表示されていない場合、**[バックアップの参照]** をクリックし、バックアップのパスを指定します。Acronis True Image によってこのバックアップがリストに追加されます。
2. バックアップまたは特定のバージョンを右クリックし、**[ベリファイ]** をクリックします。**ベリファイウィザード**が開きます。
3. **[実行]** をクリックします。

4.4.4 バックアップの保存先の分散

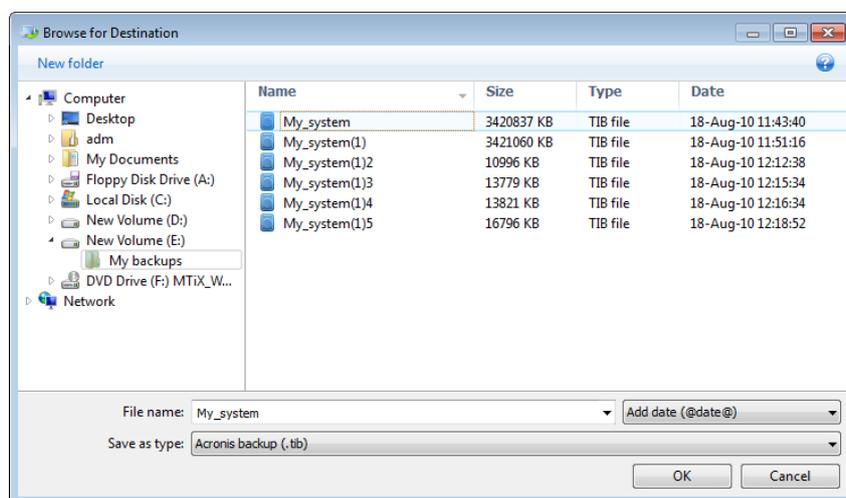
Acronis True Image Data Protection では、バックアップの保存先を選択することができます。完全バックアップバージョンをそれぞれ別の場所（ネットワーク共有、CD/DVD、USB スティック、あるいはローカルの内蔵または外付けのハードディスクドライブなど）に保存することもできます。

選択したバックアップの設定を編集するときにバックアップの保存先を変更して、バックアップバージョンをそれぞれ別の場所に保存することができます。たとえば、最初の完全バックアップを外付けの USB ハード ドライブに保存した後に、バックアップの設定を編集して、バックアップの保存先を USB スティックに変更することができます。

この機能の便利な点として、バックアップを「その場で」分割できることが挙げられます。たとえば、ハードディスクへのバックアップ実行中に、Acronis True Image Data Protection でバックアップ先のディスクの空き領域不足が検出され、バックアップを完了できないとします。ディスクがいっぱいであることを警告するメッセージが表示されます。



バックアップを完了させるには、そのディスクの領域の一部を解放してから **[再試行]** をクリックするか、別の記憶装置を選択します。後者の場合は、確認ウィンドウの **[参照...]** をクリックします。**[保存先を参照する]** ウィンドウが表示されます。



左ペインには、このコンピュータから利用可能なストレージの場所が表示されます。適切な場所を選択した後に、残りのバックアップ対象データを保存するファイルの名前を指定します。名前は手動で入力することも（たとえば「tail_end.tib」など）、行の右にあるボタンをクリックして自動的に生成することもできます。その後 **[OK]** をクリックすると、Acronis True Image Data Protection によるバックアップが最後まで実行されます。

同一のバックアップ「チェーン」に属するバックアップが異なる場所に分散保存されている場合、データ復元時に、Acronis True Image Data Protection で以前のバックアップの場所を求められる場合があります。この画面は、選択されたバックアップ バージョンの中にリ

カバリ対象のファイルが含まれていない（または一部しか含まれていない）場合にのみ表示されます。また、この画面は、分割されたバックアップを即座にリカバリする場合にも表示されます。

4.4.5 既存のバックアップをリストに追加する

Acronis True Image バックアップを過去の製品バージョンで作成したり、他のコンピュータからコピーした場合、Acronis True Image Data Protection を起動するたびに、このようなバックアップに対してコンピュータがスキャンされたり、自動的にバックアップ リストに追加されたりします。

リストに表示されないバックアップについては、手動で追加することができます。

バックアップを手動で追加するには:

1. **[バックアップ]** セクションの **[バックアップの追加]** をクリックして、**[既存のバックアップを追加]** をクリックします。ウィンドウが開き、コンピュータ上に存在するバックアップを参照できます。
2. バックアップ バージョン (.tib ファイル) を選択し、**[追加]** をクリックします。
バックアップ全体がリストに追加されます。

4.4.6 バックアップとバックアップ バージョンの削除

不要になったバックアップやバックアップ バージョンは削除することができます。Acronis True Image Data Protection は、バックアップに関する情報をメタデータ情報データベースに保存します。

このため、不要なバックアップ ファイルを Windows エクスプローラで削除しても、そのバックアップに関する情報はデータベースからは削除されず、Acronis True Image Data Protection からはそれらがまだ存在しているものと見なされます。

その結果、既に存在していないバックアップに対してもプログラムが処理を実行しようとして、エラーが発生します。このため、必要のなくなったバックアップやバックアップ バージョンを削除するときは、必ず Acronis True Image Data Protection のツールを使用してください。

バックアップ全体を削除する手順は、次のとおりです。

Acronis True Image Data Protection の **[バックアップとリカバリ]** タブで、対応するバックアップボックスを見つけます。歯車アイコンをクリックして **[処理]** メニューを開き、**[削除]** をクリックします。

バックアップ全体を削除すると、すべてのバージョンも削除されます。

特定のバックアップ バージョンを削除する手順は、次のとおりです。

1. **[バックアップとリカバリ]** タブで、該当するバックアップ ボックスを参照して **[参照とリカバリ]** をクリックします。
2. バックアップ エクスプローラのタイム ラインで、削除するバージョンを右クリックして、**[バージョンの削除]** をクリックします。

5 データの復元

セクションの内容

ディスクとパーティションの復元	74
ファイルとフォルダの復元	95
リカバリ オプション	97

5.1 ディスクとパーティションの復元

セクションの内容

クラッシュ後のシステムの復元	74
パーティションとディスクのリカバリ	88
ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームの復元について	90
BIOS での起動順の並び替え	94

5.1.1 クラッシュ後のシステムの復元

コンピュータが起動に失敗した場合、「クラッシュの原因を特定する 『74ページ 』」で説明されているヒントを参考にして、まず原因を特定することをおすすめします。クラッシュがオペレーティング システムの破損によって発生した場合は、バックアップを使用してシステムを復元します。「復元の準備 『75ページ 』」を参照して準備を完了し、「システムの復元」の手順に進みます。

5.1.1.1 異常停止の原因を特定する

システムが異常停止する原因には、2 つの基本的な要因があります。

▪ ハードウェア障害

この場合は、ハードウェア メーカーのサービス センターに問い合わせることをおすすめします。その前に、いくつかの検査を実行することもできます。ケーブル、コネクタ、外付けデバイスの電源などを確認します。その後、コンピュータを再起動してください。ハードウェアに問題がある場合は、Power-On Self Test (POST) を通じて障害が通知されます。

POST によってハードウェア障害が見つからなかった場合、BIOS を開始して、システムのハード ディスク ドライブが認識されているかどうかを確認します。BIOS を開始するには、POST シーケンス中に必要なキーの組み合わせ (**Del** キー、**F1** キー、**Ctrl+Alt+Esc** キー、**Ctrl+Esc** キーなど。ご使用の BIOS によります) を押します。通常は起動テスト中に、必要なキーの組み合わせを示すメッセージが表示されます。このキーの組み合わせを押すと、セットアップ メニューが表示されます。ハード ディスク自動検出ユーティリティを選択します。通常は、「Standard CMOS Setup」または「Advanced CMOS setup」の下に表示されています。ユーティリティによってシステムドライブが検出されなかった場合、システム ドライブに障害が発生しているため、ドライブを交換する必要があります。

- **オペレーティング システムの損傷 (Windows を起動できない場合)**

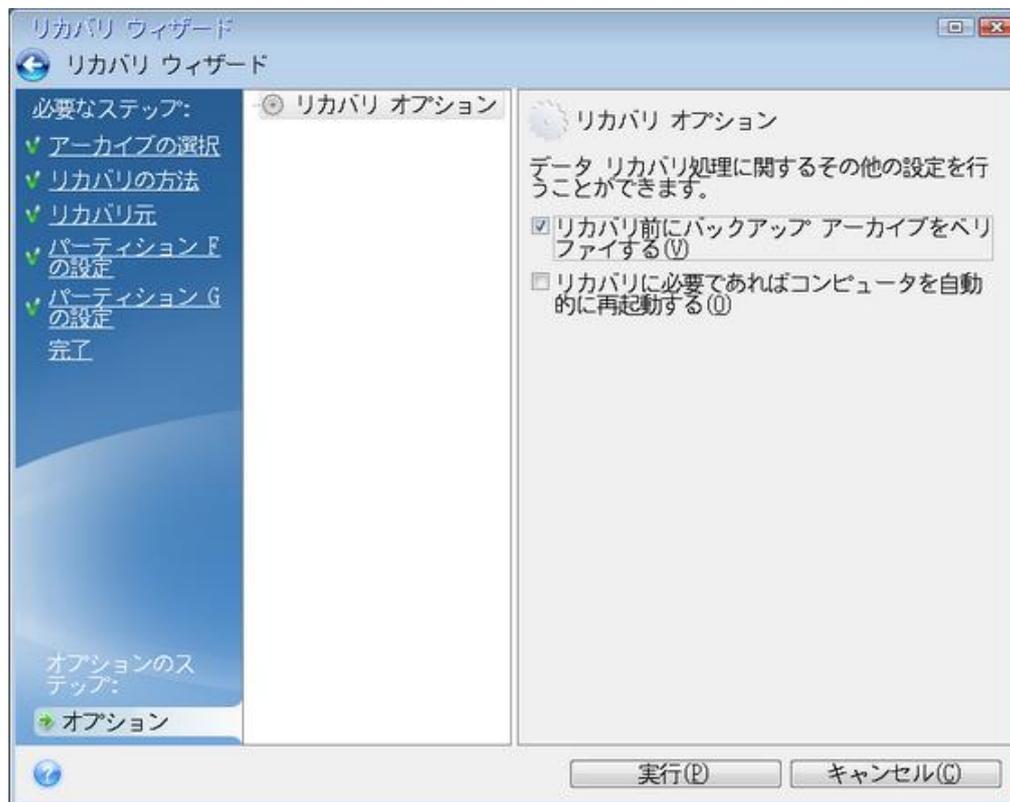
POST によって、システムのハード ディスク ドライブが正常に検出された場合、異常停止の原因は、ウイルス、マルウェア、または起動に必要なシステム ファイルの破損が考えられます。この場合は、システム ディスクまたはシステム パーティションのバックアップを使用してシステムを復元してください。詳細については、「システムの復元『76 ページ』」を参照してください。

5.1.1.2 復元の準備

復元の前に以下の操作を実行することをお勧めします。

- ウィルスまたはマルウェア攻撃のためにクラッシュが発生したことが疑われる場合、コンピュータがウイルスに感染しているかどうかスキャンします。
- ブータブル メディアの配下に予備のハード ディスク ドライブがある場合は、予備のハード ディスク ドライブへのテスト復元を試みます。
- ブータブル メディアの配下でイメージの検証を実行します。Windows での検証中に読み取ることができるバックアップを、**Linux 環境でも常に読み取れるとは限りません。**
ブータブル メディアでは、バックアップをベリファイする方法が 2 つあります。
 - バックアップを手動でベリファイするには、**[復元]** タブでバックアップを右クリックし、**[ベリファイ]** を選択します。

- 復元の前に自動的にバックアップをベリファイするには、**復元ウィザードの [オプション] 手順**で、**[復元前にバックアップ アーカイブをベリファイする]** チェック ボックスをオンにします。



- ハード ディスク ドライブのすべてのパーティションに一意的な名前 (ラベル) を割り当てます。これにより、バックアップを含むディスクを見つけることが容易になります。
Acronis True Image Data Protection のレスキュー メディアを使用すると、Windows でのドライブの識別方法とは異なるディスク ドライブ文字が作成されることがあります。たとえば、スタンドアロン版の Acronis True Image Data Protection の D: ディスクが、Windows の E: ディスクに対応していることもあります。

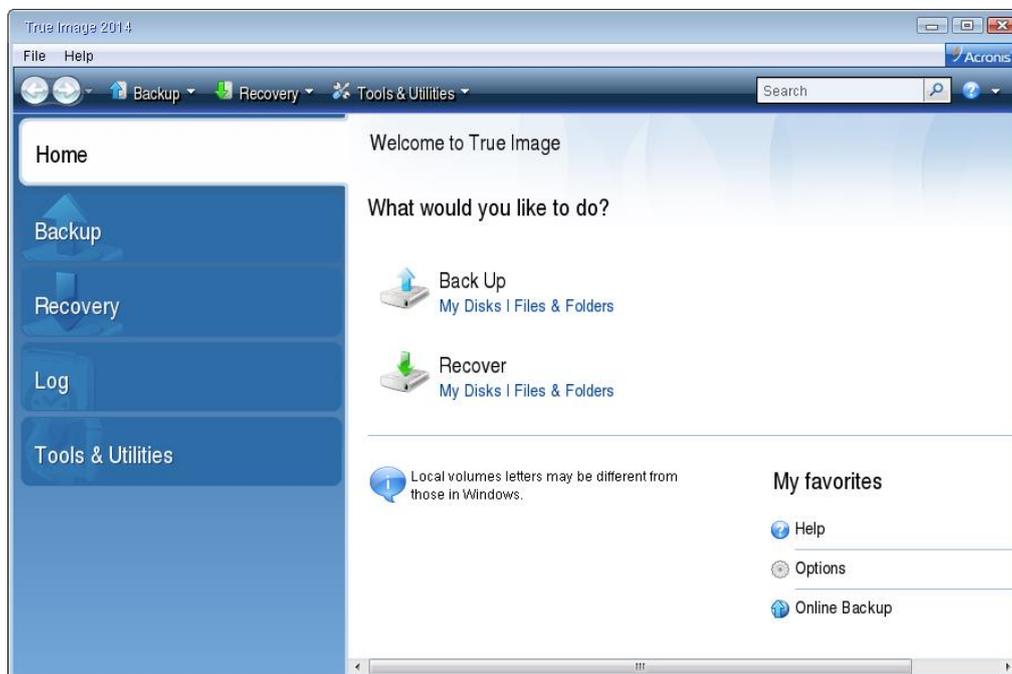
5.1.1.3 同じディスクへのシステムのリカバリ

始める前に、「リカバリの準備 『75ページ』」で説明している手順の実行をおすすめします。

システムをリカバリする手順は、次のとおりです。

- リカバリに使用するバックアップが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続して電源を入れます。

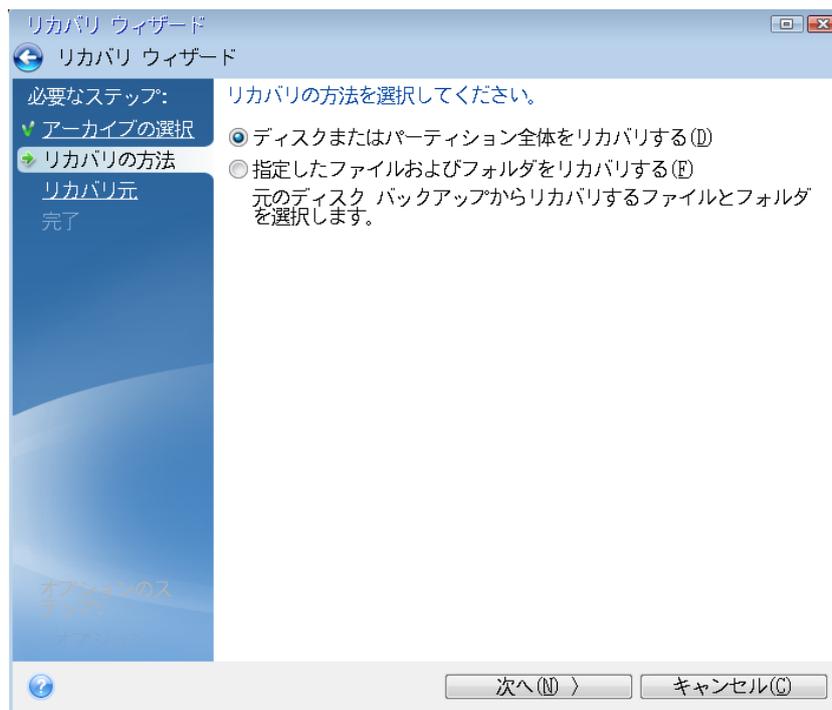
2. BIOS で起動順序を設定して、レスキュー メディア デバイス (CD、DVD、または USB スティック) を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並べ替え 『94 ページ 』」を参照してください。
3. レスキューメディアから起動して、**[Acronis True Image]** を選択します。
4. **[ホーム]** 画面で、**[リカバリ]** の下にある **[マイ ディスク]** を選択します。



5. リカバリに使用するシステム ディスクまたはパーティション バックアップを選択します。

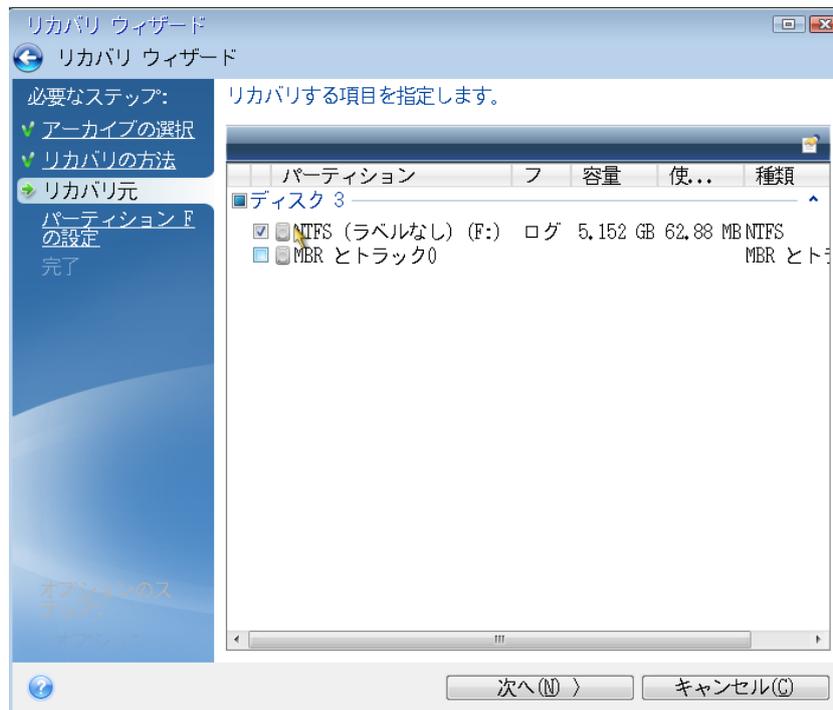
バックアップが表示されない場合には、**[参照]** をクリックし、バックアップのパスを手動で指定します。

6. **[リカバリの方法]** ステップで **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。



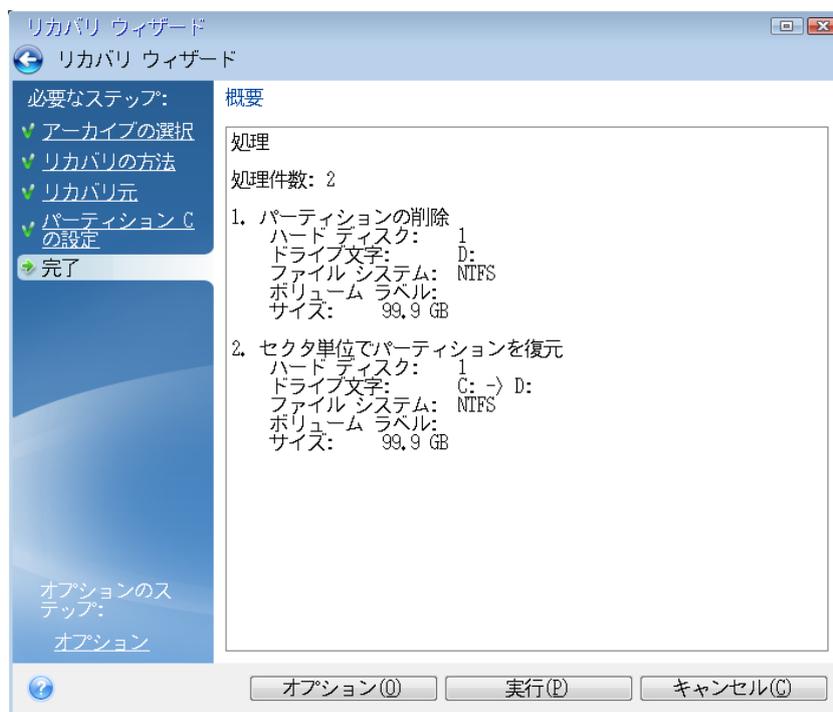
7. **[リカバリ元]** 画面で、システム パーティション (通常は C) を選択します。システム パーティションの文字が異なる場合は、**[フラグ]** 列を使用してパーティションを選択します。**[プライマリ]** および **[アクティブ]** フラグが設定されている必要があります。

Windows 7 の場合、システム予約済みパーティションには、**[プライマリ]**、**[アクティブ]** フラグが設定されます。システム予約済みパーティションとシステムパーティションの両方をリカバリするために選択する必要があります。



8. [パーティション C の設定] (または、異なる場合は実際のシステムパーティションの文字) の手順で、デフォルトの設定を確認し、正しい場合は **[次へ]** をクリックします。正しくない場合は、必要に応じて設定を変更した後、**[次へ]** をクリックします。容量が異なる新しいハードディスクにリカバリする場合は設定を変更する必要があります。

9. **[完了]** の画面で処理の概要を確認します。パーティションのサイズを変更していない場合は、**[パーティションの削除]** 項目と **[パーティションのリカバリ]** 項目のサイズが一致している必要があります。概要を確認して、**[実行]** をクリックします。



10. 処理が終了したら、Acronis True Image のスタンドアロンバージョンを終了し、レスキューメディアを取り出して、リカバリされたシステムパーティションから起動します。必要な状態まで Windows をリカバリしたことを確認してから、元の起動順序を復元します。

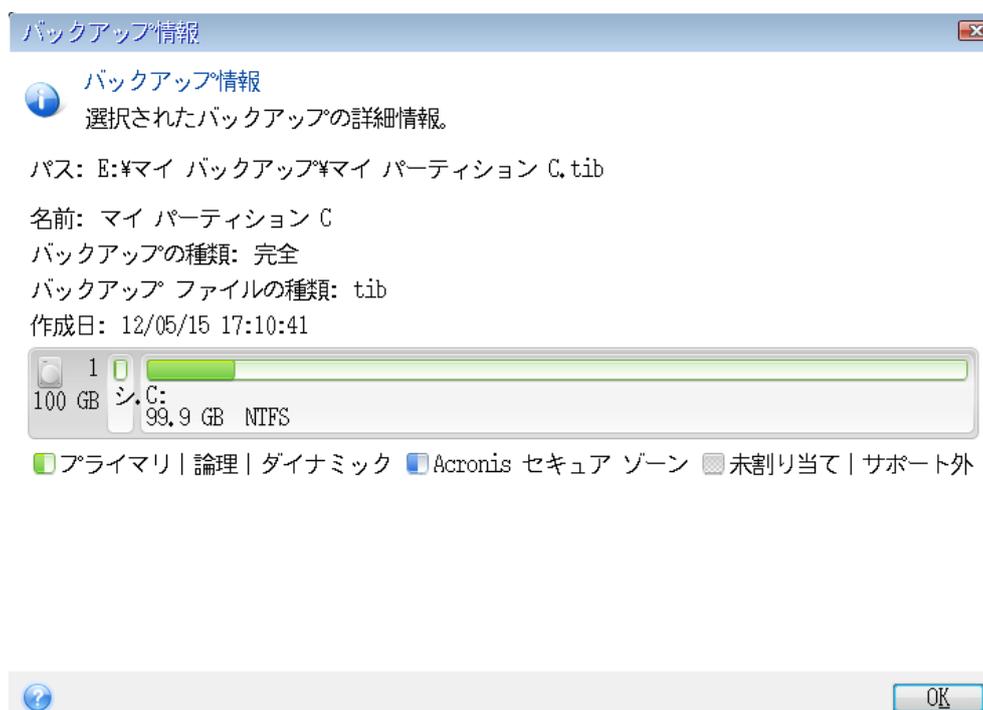
5.1.1.4 ブータブルメディア配下の新しいディスクへのシステムのリカバリ

始める前に、「リカバリの準備 『75ページ』」で説明している準備作業の実行をおすすめします。新しいディスクのフォーマットは、リカバリ処理の中で実行されるので、実行する必要はありません。

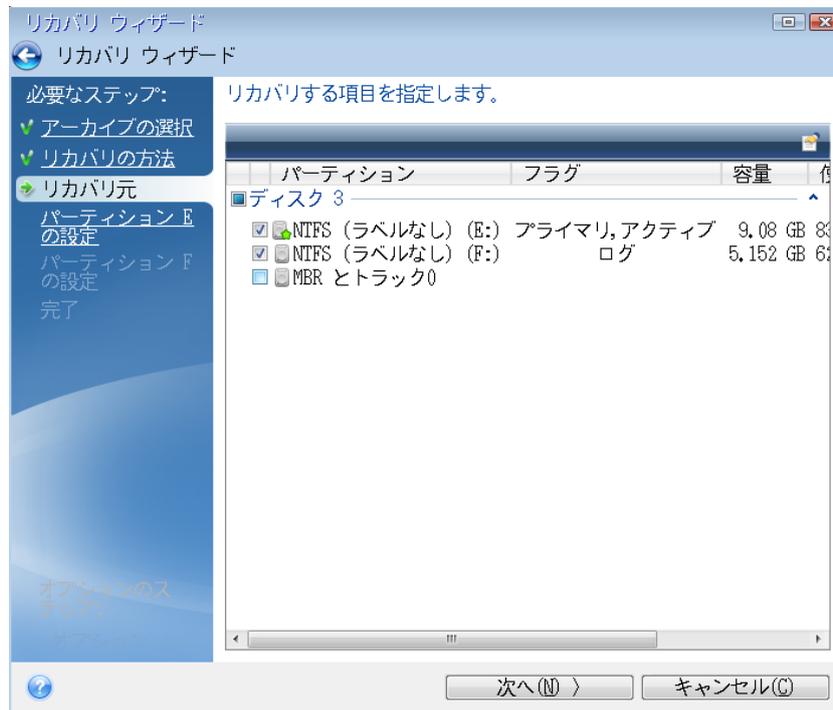
警告:古いハードディスクドライブと新しいハードディスクドライブは同じコントローラモード (*IDE*、*AHCI* など) で動作する必要があります。モードが異なる場合、新しいハードドライブからコンピュータを起動できなくなります。

新しいディスクにシステムをリカバリするには、次の手順を実行します。

1. 新しいハードディスクドライブはコンピュータ内の同じ場所に取り付け、元のドライブで使用したものと同一ケーブルおよびコネクタを使用します。難しい場合には、新しいドライブを使用する場所に取り付けてください。
2. リカバリに使用するバックアップが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続して電源を入れます。
3. BIOS で起動順序を設定して、レスキューメディアデバイス（CD、DVD、または USB スティック）を最初のブートデバイスにします。「BIOS での起動順の並び替え 『94ページ』」を参照してください。
4. レスキューメディアから起動して、**[Acronis True Image]** を選択します。
5. **[ホーム]** 画面で、**[リカバリ]** の下にある **[マイディスク]** を選択します。
6. リカバリに使用するシステムディスクまたはパーティションバックアップを選択します。バックアップが表示されない場合には、**[参照]** をクリックし、バックアップのパスを手動で指定します。
7. 隠しパーティション（システム予約パーティション、PC の製造元が作成した隠しパーティションなど）がある場合は、ウィザードのツールバーの **[詳細]** をクリックします。隠しパーティションの場所とサイズは新しいディスクで同じにする必要があるため、それらのパラメータを控えておいてください。



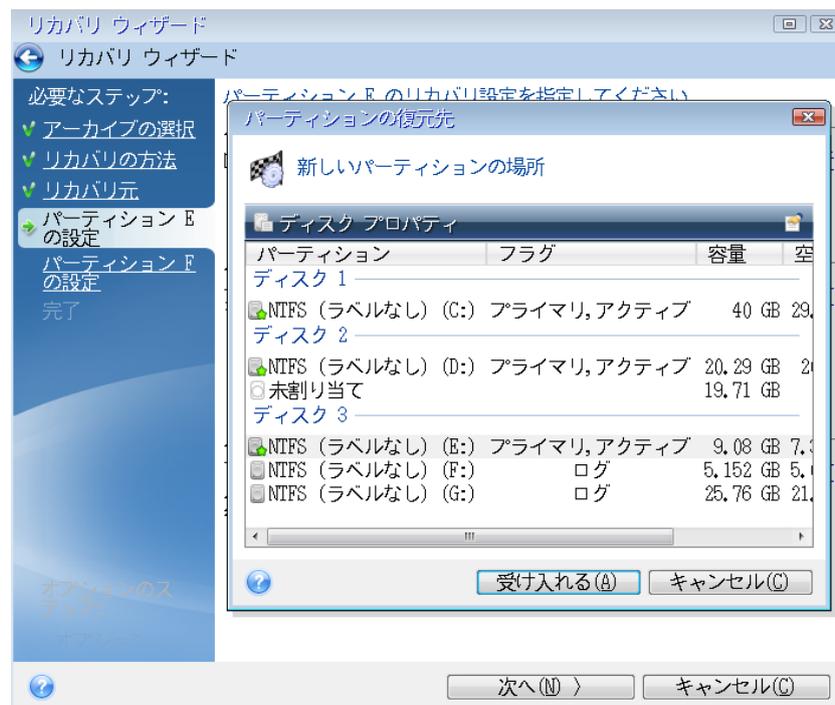
8. **[リカバリの方法]** ステップで **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。
9. **[リカバリ元]** の手順で、リカバリするパーティションのチェックボックスをオンにします。**[MBR とトラック 0]** チェックボックスはオンにしないでください。



パーティションを選択すると、該当する [パーティションの設定...] の手順が表示されます。これらの手順は、ドライブ文字のないパーティション(隠しパーティションには通常、ドライブ文字はありません) から開始します。次に、パーティションのドライブ文字の昇順に進みます。この順序は変更できません。この順序は、ハードディスク上のパーティションの物理的順序とは異なる場合があります。

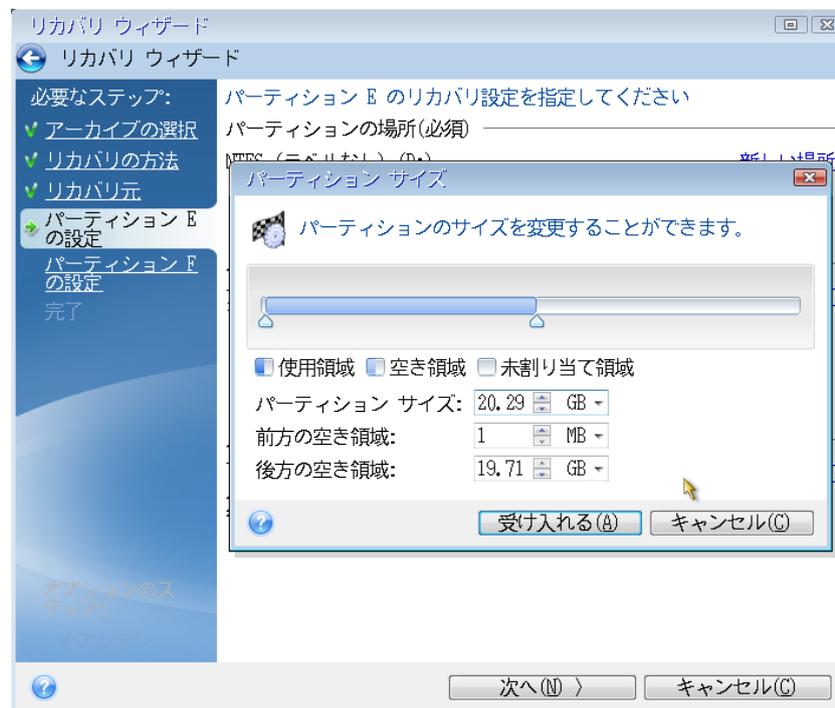
10. 隠しパーティションの設定の手順 (通常は「パーティション 1-1 の設定」という名前) で、次の設定を指定します。

- **[場所][新しい場所]** をクリックし、割り当てられた名前または容量によって新しいディスクを選択し、**[確定]** をクリックします。



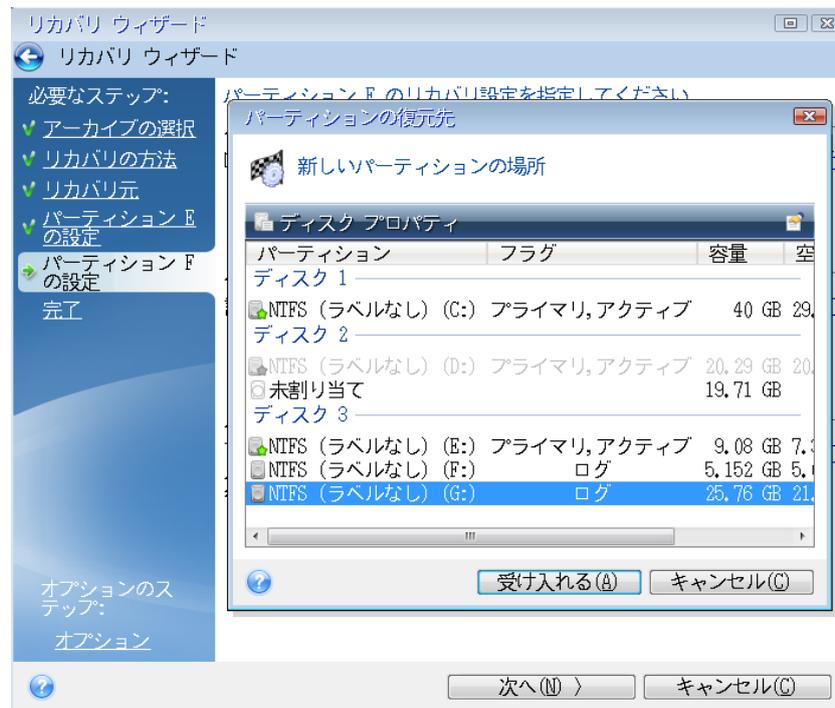
- **[種類]**パーティションの種類を確認し、必要に応じて変更します。システム予約済みパーティション (存在する場合) がプライマリパーティションであり、アクティブに設定されていることを確認します。

- **[サイズ][パーティションサイズ]** の領域で **[デフォルトを変更]** をクリックします。デフォルトでは、新しいディスク全体がパーティションに使用されます。**[パーティションサイズ]** フィールドに正しいサイズを入力します（この値は **[リカバリ元]** の手順で確認できます）。次に、必要に応じて、**[バックアップ情報]** ウィンドウに表示されていた場所と同じ場所に、このパーティションをドラッグします。**[確定]** をクリックします。



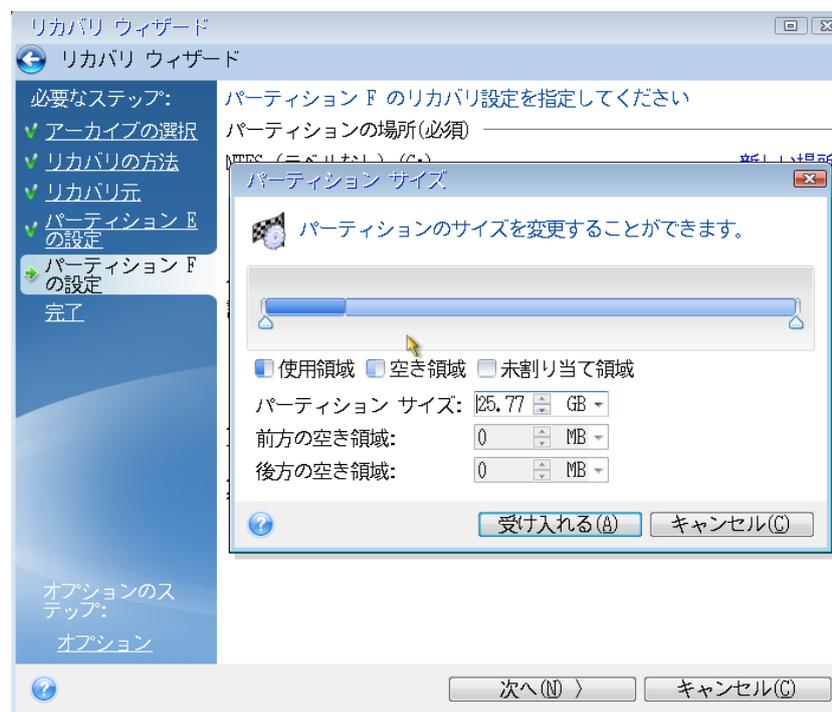
11. **[パーティション C の設定]** の手順で、2 番目のパーティションの設定を指定します。このパーティションは、ここではシステムパーティションです。

- **[新しい場所]** をクリックしてから、パーティションを配置するディスク上の未割り当て領域を選択します。



- パーティションの種類を必要に応じて変更します。システム パーティションは、プライマリにする必要があります。

- パーティションのサイズを指定します。デフォルトでは元のサイズと同じです。通常、このパーティションの後ろには空き領域はないため、新しいディスク上の未割り当て領域のすべてを 2 番目のパーティションに割り当てます。**[確定]** をクリックしてから **[次へ]** をクリックします。



12. 実行する処理の概要を注意深く確認して、**[実行]** をクリックします。

PC の製造元が作成した隠しパーティションが元のディスクに含まれている場合は、MBR のリカバリに進んでください。PC の製造元は、隠しパーティションへのアクセスを提供するために、Windows の MBR やトラック 0 上のセクタを変更している可能性があるため、MBR をリカバリする必要があります。

- 同じバックアップをもう一度選択します。右クリックして、ショートカット メニューで **[リカバリする]** を選択します。[リカバリの方法] で **[ディスクとパーティション全体をリカバリする]** を選択してから、**[MBR とトラック 0]** チェックボックスをオンにします。
- 次の手順で、MBR のリカバリ先のディスクを選択します。ディスクシグネチャをリカバリすることも可能です。詳細については、「MBR のリカバリ先ディスクの選択 『87ページ』」を参照してください。

[次へ] をクリックしてから **[実行]** をクリックします。MBR リカバリが完了したら、スタンドアロンの Acronis True Image を終了します。

リカバリ完了時

コンピュータを起動する前に、古いドライブがあれば取り外してください。Windows の起動中に新しいドライブと古いドライブの両方が認識された場合、Windows の起動に問題が生じます。古いドライブを容量の大きい新しいドライブにアップグレードする場合は、初回起動前に古いドライブを取り外してください。

レスキューメディアを取り外し、コンピュータで Windows を起動します。新しいハードウェア（ハード ドライブ）が見つかったため Windows を再起動する必要があると表示される場合があります。システムが正常に動作することを確認してから、元の起動順序に戻します。

MBR の復元先ディスクの選択

このウィンドウでは、マスタ ブート レコード (MBR) とトラック 0 を復元するためのハードディスクを選択します。

[ディスク シグネチャをリカバリ] チェックボックス

[内容の選択] ステップで MBR のリカバリを選択した場合は、画面の左下に **[ディスク シグネチャをリカバリ]** チェックボックスが表示されます。ディスク シグネチャは、ハードディスク MBR の一部です。このシグネチャによって、ディスク メディアが一意に識別されます。

この **[ディスク シグネチャをリカバリ]** チェックボックスはオンにすることをお勧めします。その理由は次のとおりです。

- Acronis True Image Data Protection でスケジュールされたタスクが作成されるときに、ソースハードディスクのシグネチャが使用されます。同じディスク シグネチャを復元する場合は、前に作成されたタスクを再作成または編集する必要はありません。
- インストールされているアプリケーションの中には、使用許諾などの目的にディスク シグネチャを使用するものがあります。
- Windows の復元ポイントを使用する場合は、ディスク シグネチャがリカバリされなければ復元ポイントは失われます。
- ディスクシグネチャをリカバリすると、Windows Vista および Windows 7 の「以前のバージョン」の機能で使用される VSS スナップショットをリカバリすることができます。

次の場合は、[ディスク シグネチャをリカバリ] チェックボックスをオフにすることをお勧めします。

- イメージ バックアップを使用する目的が、災害復旧ではなく、Windows のハードディスク ドライブのクローン作成である場合。

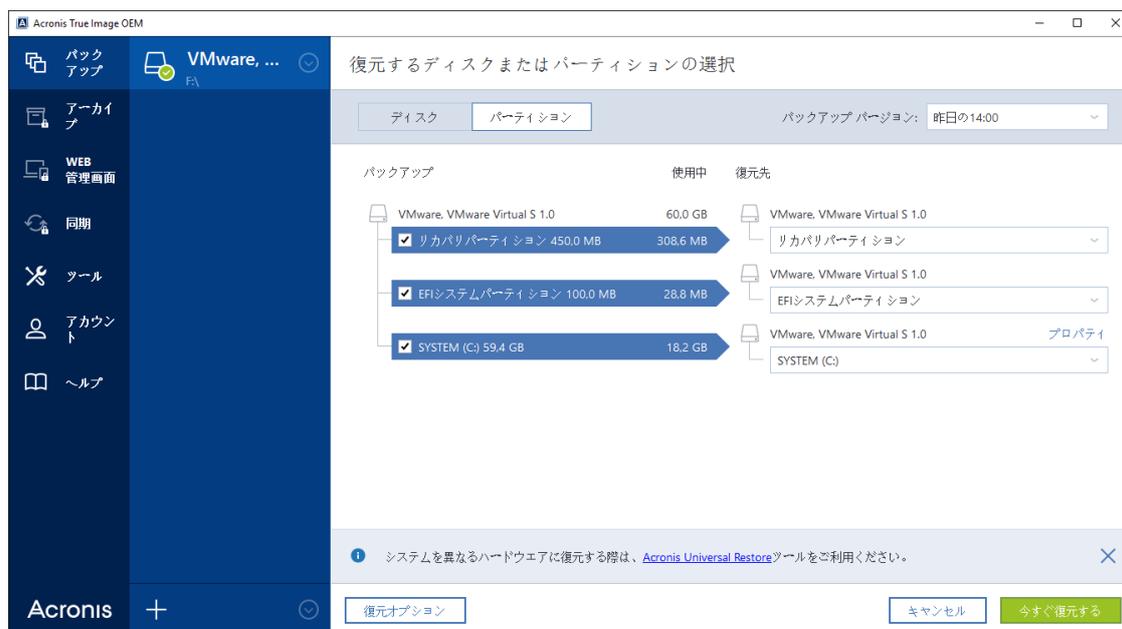
この場合、同じドライブにリカバリしても、リカバリされたハード ディスク ドライブのディスク シグネチャは新たに生成されます。

ハードディスク ドライブを選択し、ディスク シグネチャを復元するかどうかを指定したら、[次へ] をクリックして次に進みます。

5.1.2 パーティションとディスクのリカバリ

パーティションやディスクをリカバリするには、次の手順を実行します。

1. Acronis True Image Data Protection を起動します。
2. [バックアップ] セクションで、リカバリするパーティションまたはディスクが含まれているバックアップを選択し、[ディスクをリカバリ] をクリックします。
3. [バックアップバージョン] の一覧で、リカバリするバックアップバージョンをバックアップの日付と時刻で選択します。



4. リカバリするディスクを選択します。

別々のパーティションをリカバリする必要がある場合、**[特定のパーティションをリカバリ]** をクリックし、リカバリするパーティションを選択します。

- パーティション名の下にあるリカバリ先のフィールドで、リカバリ先パーティションを選択します。適切ではないパーティションは赤い文字で表示されます。リカバリ先のパーティション上のデータは、リカバリされるデータおよびファイル システムによって置き換えられるので、すべて失われます。

元のパーティションにリカバリする場合、パーティション領域に少なくとも 5 %の空き領域が必要です。その領域がない場合、**[今すぐリカバリする]** ボタンは使用できません。

- (オプションの手順) ディスクリカバリ処理に追加パラメータを設定する場合には、**[オプション]** をクリックします。
- 選択し終わったら、**[今すぐリカバリする]** をクリックしてリカバリを開始します。

5.1.2.1 パーティションのプロパティ

ベーシックディスクにパーティションを復元するときに、パーティションのプロパティを変更できます。**[パーティションのプロパティ]** ウィンドウを開くには、復元先のパーティションの横にある **[プロパティ]** をクリックします。

The screenshot shows a 'Manage Partition' dialog box with the following fields and values:

Letter	Label	Type
G	My disk	Primary

Used: 9.9 GB Partition size: 11.5 GB

Unallocated space: Place after partition 4.5 GB

i You can create partitions on the unallocated space, by using Acronis Disk Director.
[Learn more about Acronis Disk Director](#)

Ok

以下のパーティションプロパティを変更できます。

- 文字
- ラベル

- **種類**

パーティションをプライマリ、プライマリアクティブ、論理にすることができます。

- **サイズ**

パーティションのサイズを変更するには、画面の水平バー上でマウスを使用して右の境界をドラッグします。パーティションに特定のサイズを割り当てるには、**[合計サイズ]** フィールドに適切な数字を入力します。未割り当て領域の位置をパーティションの前後で選択することもできます。

5.1.3 ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームの復元について

ダイナミック ボリュームの復元

ローカル ハード ドライブの次のロケーションへダイナミック ボリュームを復元することができます。

- **ダイナミック ボリューム**

ダイナミック ディスクに復元する際に、手動でダイナミック ボリュームのサイズを変更することはサポートされていません。復元中にダイナミック ボリュームのサイズを変更する必要がある場合は、ベーシック ディスクに復元する必要があります。

- **元の場所（同じダイナミック ボリュームへ）**

ターゲット ボリュームの種類は変更されません。

- **別のダイナミック ディスクまたはボリューム**

ターゲット ボリュームの種類は変更されません。たとえば、ダイナミック ストライプ ボリュームをダイナミック スパン ボリュームに復元すると、ターゲット ボリュームはスパンのままです。

- **ダイナミック グループの未割り当て領域**

復元したボリュームの種類は、バックアップでの種類と同じになります。

- **ベーシック ボリュームまたはディスク**

ターゲット ボリュームはベーシックのままです。

- **ベアメタル復元**

ダイナミック ボリュームを新しい未フォーマット ディスクに「ベアメタル復元」を行うと、復元されたボリュームはベーシックになります。復元されたボリュームをダイナミックのままにしておきたい場合は、ターゲット ディスクをダイナミックとして準備（パーティションが設定され、フォーマットされている）する必要があります。これは、Windows Disk Management スナップインなどの、サードパーティのツールを使用して行うことができます。

ベーシック ボリュームおよびディスクの復元

- ベーシック ボリュームをダイナミック グループの未割り当て領域に復元すると、復元されたボリュームはダイナミックになります。
- ベーシック ディスクを 2 つのディスクから構成されるダイナミック グループのダイナミック ディスクに復元すると、復元されたディスクはベーシックのままです。復元の実行先のダイナミック ディスクは「見つからない」状態となり、2 つ目のディスク上のスパン/ストライプ ダイナミック ボリュームは「エラー」になります。

復元後のパーティションのスタイル

ターゲット ディスクのパーティションのスタイルは、ご使用のコンピュータが UEFI をサポートしているかどうか、およびシステムが BIOS 起動であるか、UEFI 起動であるかどうかによって異なります。以下の表を参照してください。

	システムは BIOS 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)	システムは UEFI 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)
ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしていない	この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは MBR のままとなり、ターゲット ディスクは BIOS 起動が可能となります。	処理完了後、パーティション スタイルは GPT に変換されます。お使いのオペレーティング システムではサポートされていないため、UEFI 起動はできません。
ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしている	この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは MBR のままとなり、ターゲット ディスクは BIOS 起動が可能となります。	ターゲットのパーティションが GPT スタイルに変換され、ターゲット ディスクの UEFI 起動が可能になります。「UEFI システムへの復元の例 『92ページ 』」を参照してください。
ソース ディスクは GPT であり、OS は UEFI をサポートしている	処理完了後、パーティション スタイルは GPT のままとなります。お使いのオペレーティング システムは GPT からの BIOS 起動をサポートしていないため、システムは BIOS から起動できなくなります。	処理完了後、パーティション スタイルは GPT のままとなり、オペレーティング システムは UEFI 起動が可能となります。

復元処理の例

「UEFI システムへの復元の例 『92ページ 』」を参照してください。

5.1.3.1 UEFI システムへの復元の例

次に、以下の条件でシステムを転送する例を挙げます。

- ソースディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしている。
- ターゲットシステムは UEFI 起動である。

- 古いハードディスクドライブと新しいハードディスクドライブは同じコントローラモード（IDE、AHCI など）で動作する。

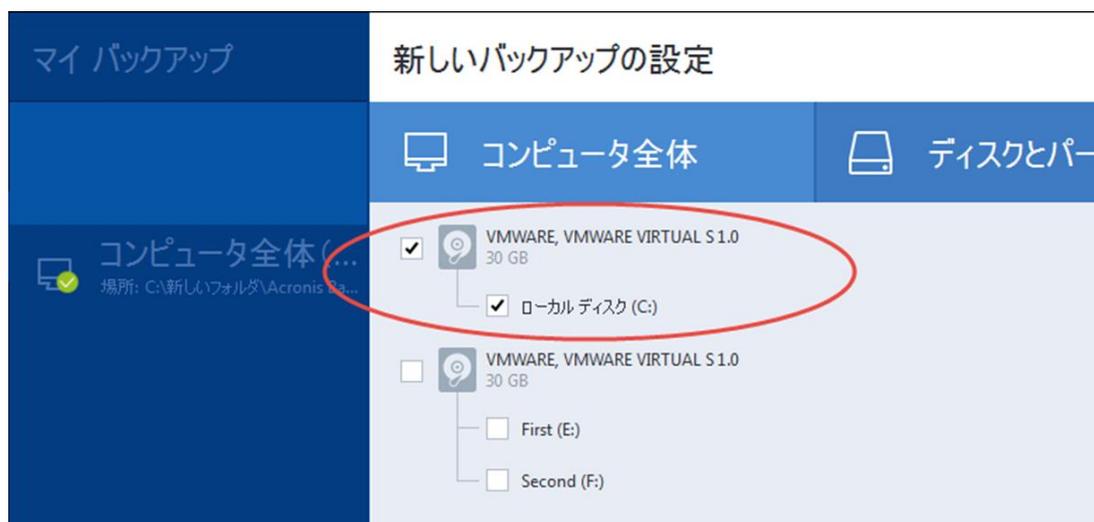
手順を開始する前に、以下があることを確認してください。

- **ブータブルレスキューメディア**

詳細については、「ブータブル レスキュー メディアの作成 『17ページ 』」を参照してください。

- **ディスクモードで作成されたシステムディスクのバックアップ**

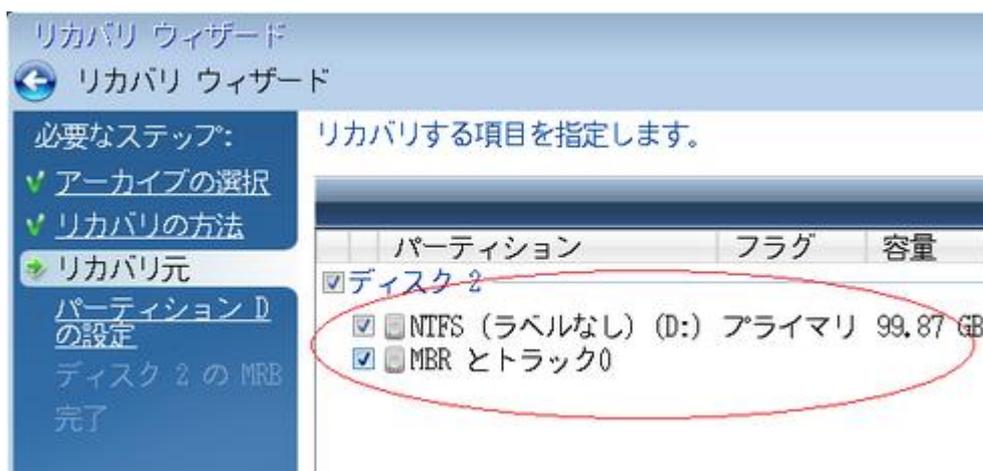
このバックアップを作成するには、ディスクモードに切り替えてから、システムパーティションがあるハードドライブを選択します。詳細については、「ディスクとパーティションのバックアップ 『38ページ 』」を参照してください。



MBR ディスクから UEFI 起動のコンピュータにシステムを転送するには、次の手順を実行します。

1. レスキューメディアから UEFI モードで起動して、[Acronis True Image] を選択します。
2. **復元ウィザード**を実行して、「システムの復元 『76ページ 』」で説明されている手順を実行します。
3. **[復元元]** で、ディスク名の横にあるチェックボックスをオンにして、システムディスク全体を選択します。

下の例では、**[ディスク 1]** のチェックボックスをオンにします。



4. **[完了]** で、**[実行]** をクリックします。

操作が完了すると、復元先ディスクは GPT スタイルに変換されて、UEFI モードで起動できるようになります。

復元後は、UEFI モードでコンピュータを起動してください。システムディスクの起動モードを UEFI のブートマネージャのユーザーインターフェイスで変更する必要がある場合があります。

5.1.4 BIOS での起動順の並び替え

Acronis ブータブル レスキュー メディアからコンピュータを起動するためには、そのメディアが最初の起動デバイスとなるように、BIOS で起動順序を割り当てる必要があります。

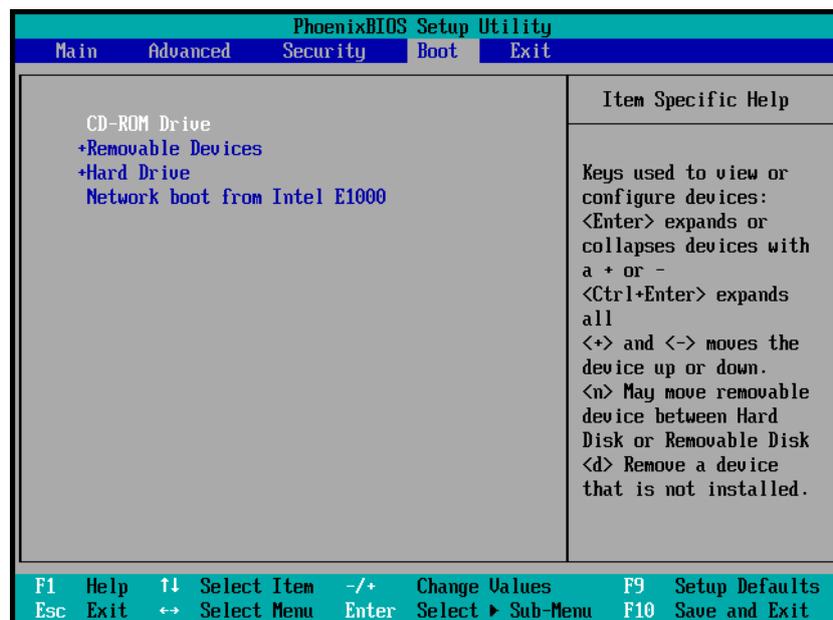
Acronis ブータブル メディアから起動する手順は、次のとおりです。

1. USB フラッシュ ドライブをブータブル メディアとして使用している場合は、USB フラッシュ ドライブを USB ポートに接続します。
2. コンピュータの電源を入れます。Power-On Self Test (POST) の実行中、BIOS に移るために押す必要があるキーの組み合わせが表示されます。
3. キーの組み合わせを押します（たとえば、**Del キー**、**F1 キー**、**Ctrl+Alt+Esc キー**、**Ctrl+Esc キー**）。BIOS セットアップ ユーティリティが起動します。BIOS ごとに表示、項目のセット、名称などが異なります。

マザーボードの中には、いわゆるブート メニューが用意されているものもあります。ブート メニューは、特定のキーまたはキーの組み合わせ、たとえば **F12** キーなどを押すと開きます。ブート

メニューを使用すれば、BIOS 設定を変更することなく、ブータブル デバイスのリストからブート デバイスを選択できます。

4. CD または DVD をブータブル メディアとして使用している場合は、CD または DVD を CD ドライブまたは DVD ドライブに挿入します。
5. レスキュー メディア (CD、DVD、または USB ドライブ) を最初の起動デバイスにします。
 1. キーボードの矢印キーを使用してブート順序の設定に移動します。
 2. ブータブル メディアのデバイスの上にマウス ポインタを置き、リスト内の最初の項目にします。通常は、プラス記号キーとマイナス記号キーを使用して順序を変更できます。



6. BIOS を終了して変更内容を保存します。コンピュータが Acronis ブータブル メディアから起動します。

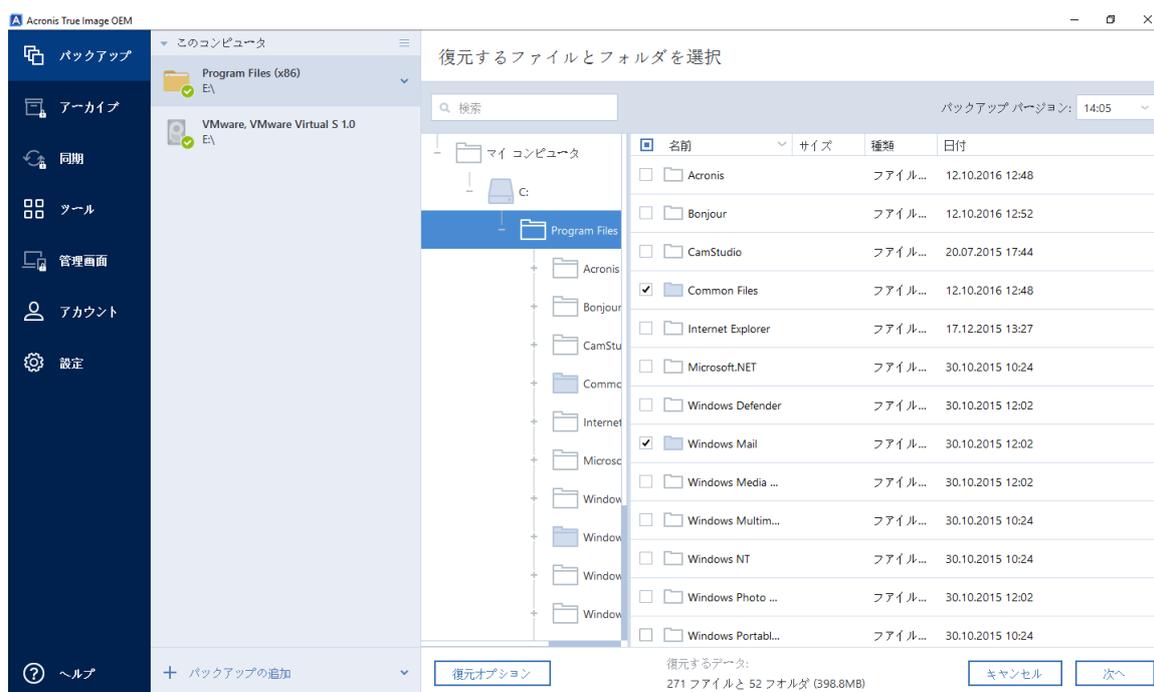
コンピュータが最初のデバイスからの起動に失敗した場合は、起動するまで、2 台目以降のデバイスからの起動が試みられます。

5.2 ファイルとフォルダの復元

ファイル レベルとディスク レベルのバックアップからファイルやフォルダを復元できます。

ファイルやフォルダを復元する手順は、次のとおりです。

1. Acronis True Image Data Protection を起動します。
2. サイドバーで **[バックアップ]** をクリックします。
3. バックアップ リストから、復元するファイルやフォルダが格納されているバックアップを選択します。
4. 右側のパネルで、**[ファイルの復元]** をクリックします。
5. バックアップのバージョン(特定の日付および時刻におけるデータの状態)を選択します。
6. 復元するファイルやフォルダを選択し、**[次へ]** をクリックします。



7. 選択したファイルまたはフォルダを復元するコンピュータ上の復元先を選択します。元のロケーションにデータを復元することができます。また、必要に応じて新しいロケーションを選択することもできます。新しい場所を選択するには、**[参照]** ボタンをクリックします。

新しいロケーションを選択した場合、デフォルトでは、元の絶対パスは復元せずに、選択した項目が復元されます。項目をフォルダ構造全体と共に復元することもできます。その場合は、**[元のフォルダ構造を維持する]** チェック ボックスをオンにします。

8. 必要に応じて、復元処理のオプション（復元処理の優先度、ファイルレベルのセキュリティ設定など）を選択します。オプションを設定するには、**[オプション]** をクリックします。ここで設定するオプションは、現在の復元処理にのみ適用されます。

9. 復元処理を開始するには、**[今すぐ復元する]** ボタンをクリックします。

[キャンセル] をクリックすると、復元は中止されます。中止した復元によって復元先のフォルダが変更されている場合があります。

Windows エクスプローラでのファイルの復元

Windows エクスプローラから直接ファイルとフォルダを復元する手順は、次のとおりです。

1. 対応する .tib ファイルをダブルクリックし、復元するファイルまたはフォルダまで移動して参照します。
2. ファイルまたはフォルダをハード ディスクにコピーします。

注意: コピーしたファイルの「圧縮」属性と「暗号化」属性は失われます。これらの属性を維持したい場合は、バックアップを復元することをお勧めします。

5.3 リカバリ オプション

[ディスク リカバリ オプション]、**[ファイル リカバリ オプション]** のウィンドウで、それぞれ、ディスクとパーティションおよびファイルのリカバリ処理のオプションを設定できます。アプリケーションをインストールすると、すべてのオプションは初期値に設定されます。それらのオプションは、現在のリカバリ処理用のみに、または、その後のすべてのリカバリ処理用に変更できます。**[設定をデフォルトとして保存する]** チェックボックスをオンにすると、変更した設定が今後のリカバリ作業すべてにデフォルトで適用されます。

ディスク リカバリ オプションとファイル リカバリ オプションは完全に独立しており、個別に設定する必要があるので注意してください。

製品のインストール後に変更したオプションをすべて初期値にリセットする場合は、**[初期設定にリセット]** ボタンをクリックします。

セクションの内容

ディスク復元モード	98
復元の前後に実行するコマンド	98
ベリファイ オプション	99
コンピュータの再起動	99
ファイル復元オプション.....	100
ファイル上書きオプション.....	100
復元処理のパフォーマンス.....	101
リカバリ処理の通知	102

5.3.1 ディスク復元モード

このオプションを使用して、イメージ バックアップのディスク復元モードを選択できます。

- **[セクタ単位の復元]** - ディスクまたはパーティションの使用済みセクタと未使用セクタの両方を復元する場合にこのチェックボックスをオンにします。このオプションが有効になるのは、セクタ単位バックアップの復元を選択した場合のみです。

5.3.2 復元の前後に実行するコマンド

復元処理の前後に自動的に実行するコマンド（またはバッチ ファイル）を指定することができます。

たとえば、復元を開始する前に特定の Windows プロセスを開始/停止することや、復元対象データのウィルスの有無を調べることができます。

コマンド（バッチ ファイル）を指定する手順は、次のとおりです。

- 復元処理の開始前に実行するコマンドを **[処理前に実行するコマンド]** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**[編集]** ボタンをクリックします。
- 復元処理の終了後に実行するコマンドを **[処理後に実行するコマンド]** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**[編集]** ボタンをクリックします。

ユーザーの入力を必要とする対話型のコマンド（pause など）は実行しないでください。これらのコマンドは、サポートされていません。

5.3.2.1 復元用ユーザー コマンドの編集

復元の前または後に実行するコマンドを指定することができます。

- **[コマンド]** フィールドにコマンドを入力するか、一覧から選択します。[...] をクリックすると、バッチ ファイルを選択できます。
- **[作業ディレクトリ]** フィールドに、コマンド実行のためのパスを入力するか、入力済みのパスの一覧から選択します。
- コマンド実行引数を **[引数]** フィールドに入力するか、一覧から選択します。

[コマンドの実行が完了するまで処理を行わない]（デフォルトでは有効）パラメータを無効にすると、コマンド実行と同時に復元処理を実行できます。

[ユーザー コマンドが失敗したら処理を中止する] パラメータを有効にした場合は（デフォルトでは有効）、コマンド実行でエラーが発生すると処理が中止されます。

入力したコマンドをテストするには、**[コマンドのテスト]** ボタンをクリックします。

5.3.3 ベリファイ オプション

- **復元前にバックアップをベリファイする:** 復元前にバックアップの整合性を確認するには、このオプションを有効にします。
- **復元後にファイルシステムをチェックする:** 復元されたパーティションでファイルシステムの整合性を確認するには、このオプションを有効にします。

確認できるのは FAT16/32 および NTFS ファイル システムのみです。

システム パーティションを元の場所に復元する場合のように、復元中に再起動が必要な場合は、ファイル システムはチェックされません。

5.3.4 コンピュータの再起動

復元が必要な場合に自動的にコンピュータを再起動させるには、**[復元に必要であればコンピュータを自動的に再起動する]** チェックボックスをオンにします。このオプションは、オペ

レーティング システムによってロックされているパーティションを復元する必要がある場合に使用します。

5.3.5 ファイル復元オプション

次のファイル復元オプションを選択できます。

- **[元のセキュリティ設定でファイルを復元する]**: バックアップ時にファイルのセキュリティ設定を保存してある場合（「バックアップ用ファイル レベルのセキュリティ設定 『64ページ 』」を参照してください）は、ファイルの元のセキュリティ設定を復元するか、復元先のフォルダのセキュリティ設定をファイルに継承させるかを選択できます。このオプションは、ファイルまたはフォルダのバックアップからファイルを復元する場合にのみ有効です。
- **[復元されたファイルに現在の日時を設定する]** - ファイルの日付/時刻をバックアップから復元するか、現在の日付/時刻を割り当てるかを選択することができます。デフォルトでは、バックアップの日付と時刻が割り当てられます。

5.3.6 ファイル上書きオプション

バックアップにあるファイルと同じファイル名が復元先フォルダで見つかった場合の処理を選択します。

このオプションは、ファイルレベルのバックアップからデータを復元する場合にのみ使用できます。

[既存のファイルを上書きする] チェックボックスをオンにすると、ハードディスクにあるファイルよりバックアップにあるファイルの方が無条件で優先されますが、デフォルト設定では、新しいファイルやフォルダは上書きから保護されます。これらのファイルやフォルダも上書きする場合は、該当するチェックボックスをオフにします。

一部のファイルは上書きする必要がない場合:

- **[隠しファイルと隠しフォルダ]** チェックボックスをオン/オフすることで、すべての隠しファイルと隠しフォルダの上書きを有効または無効にします。
- **[システム ファイルとシステム フォルダ]** チェックボックスをオン/オフすることで、すべてのシステム ファイルとシステム フォルダの上書きを有効または無効にします。

- **[復元するものよりも新しいファイルとフォルダ]** チェックボックスをオン/オフすることで、すべての新しいファイルとフォルダの上書きを有効または無効にします。
- **[特定のファイルやフォルダを追加する]** をクリックして、上書きしたくないカスタム ファイルとカスタム フォルダの一覧を管理します。
 - 特定のファイルの上書きを無効にするには、**[追加...]** ボタンをクリックして、除外の条件を作成します。
 - 条件の指定には、一般的な Windows のワイルドカード文字を使用できます。たとえば、拡張子 **.exe** を持つすべてのファイルを保護するには、***.exe** を追加します。**My????.exe** を追加すると、「my」で始まり 5 文字で構成される名前が付いた拡張子 **.exe** のファイルがすべて保護されます。

たとえば誤って追加した条件を削除するには、その条件の右にある **[削除]** アイコンをクリックします。

5.3.7 復元処理のパフォーマンス

[パフォーマンス] タブでは、以下の設定を行うことができます。

処理の優先順位

バックアップ処理や復元処理の優先度を変更すると、（優先度の上げ下げによって）バックアップの処理速度を速くしたり遅くしたりできますが、実行中の他のプログラムのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性もあります。システムで実行中の処理の優先度に応じて、処理に割り当てられる CPU やシステムリソースの使用量が決定されます。処理の優先度を下げると、他の CPU タスクで使用されるリソースを増やすことができます。バックアップや復元の優先度を上げると、実行中の他の処理からリソースを取得することができ、処理の速度が向上します。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

処理の優先度は、次のいずれかに設定することができます。

- **[低]**（デフォルトで有効）：バックアップ処理や復元処理の速度は低下しますが、他のプログラムのパフォーマンスは向上します。
- **[通常]**：バックアップ処理や復元処理に他の処理と同じ優先度が割り当てられます。

- **[高]**: バックアップ処理や復元処理の速度は向上しますが、他のプログラムのパフォーマンスは低下します。このオプションを選択すると、Acronis True Image Data Protection による CPU 使用率が 100%になる場合があるため注意してください。

5.3.8 リカバリ処理の通知

空きディスク領域のしきい値

バックアップストレージの空き領域が指定のしきい値より少なくなったときに、通知を受け取ることができます。バックアップの開始後、選択したバックアップ保存先の空き領域が指定値よりも既に少ないことが Acronis True Image Data Protection によって検出された場合には、プログラムで実際のバックアップ処理は開始されず、空き領域が少ない旨の通知メッセージが直ちに表示されます。メッセージには次の 3 つの選択肢が示されます。メッセージを無視してバックアップを続行する、バックアップを保存する別の場所を参照する、バックアップをキャンセルする、の中からいずれかを選択します。

バックアップの実行中に空き領域が指定値より少なくなった場合にも、プログラムにより同じメッセージが表示されるため、同様の選択を行う必要があります。

ディスクの空き領域のしきい値を設定するには、次の手順を実行します。

- **[ディスクの空き領域が不十分なときに通知メッセージを表示する]** チェックボックスをオンにします。
- **[サイズ]** ボックスでしきい値を入力または選択し、単位を選択します。

Acronis True Image Data Protection では、次のストレージデバイスの空き領域をチェックすることができます。

- ローカルハードドライブ
- USB カードおよびドライブ
- ネットワーク共有 (SMB/NFS)

[エラー処理] 設定で **[処理中にメッセージやダイアログを表示しない (サイレントモード)]** チェックボックスがオンになっている場合、メッセージは表示されません。

FTP サーバーと *CD/DVD* ドライブでは、このオプションを有効にすることはできません。

6 ツール

Acronis のツールとユーティリティには、保護ツール、マウントツール、およびディスク管理ユーティリティがあります。

保護ツール

- **Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ** 『113ページ』
コンピュータ起動時にオペレーティング システムを読み込まずに Acronis True Image Data Protection を起動することができます (オペレーティング システムが起動する前に F11 キーを押します)。
- **レスキュー メディア ビルダ** 『104ページ』
コンピュータにインストールされている Acronis 製品 (または指定したコンポーネント) が収録されたブータブル レスキュー メディアを作成することができます。

イメージのマウント

- **イメージのマウント** 『126ページ』
作成済みのイメージを参照できるようになります。パーティション イメージに一時的なドライブ文字を割り当てて、通常の論理ドライブとしてアクセスすることができます。
- **イメージのアンマウント** 『128ページ』
イメージを参照するために作成した一時的な論理ドライブのマウントを解除できます。

6.1 ブータブル レスキュー メディアの作成

緊急用ブートメディアを使用して、ベアメタルシステムまたは異常終了したコンピュータで Acronis True Image を起動できます。Windows 以外のコンピュータのハードディスクをバックアップすることもできます。セクタ単位モードでディスクをイメージ作成することにより、すべてのデータをバックアップにコピーします。このためには、そのコンピュータにインストールされているスタンドアロン版の Acronis True Image のコピーが保存されたブータブルメディアが必要です。

ブータブル メディアの取得方法

- パッケージ版の製品のインストール用 CD を使用します。

- Acronis メディアビルダ 『104ページ』 でメディアをブータブルにします。
 - 空の CD
 - 空の DVD
 - USB フラッシュ ドライブ注意:保存されたデータは変更されません。
 - .iso イメージ ファイルを作成し、後で CD または DVD に書き込みます。

6.1.1 Acronis メディア ビルダ

Acronis メディア ビルダでは、USB フラッシュ ドライブまたは空の CD/DVD をブータブルにすることができます。Windows が起動できない場合は、ブータブルメディアを使用してスタンドアロン版の Acronis True Image を実行し、コンピュータを復元します。

以下のさまざまなタイプのブータブル メディアを作成できます。

- **Acronis ブータブル レスキュー メディア**

通常は、このタイプを選択してください。

メモ

- 非光学メディアを使用する場合、メディアのファイル システムは FAT16 または FAT32 でなければなりません。
- Acronis メディア ビルダが USB フラッシュ ドライブを認識しない場合は、Acronis ナレッジ ベース (<http://kb.acronis.com/content/1526>) で説明されている手順を試してください。
- ブータブル メディアから起動する場合は、Ext2/Ext3/Ext4、ReiserFS、Linux SWAP ファイル システムが採用されているディスクやパーティションへのバックアップを行うことはできません。
- レスキューメディアから起動していてスタンドアロン版の Acronis True Image を使用している場合は、Windows XP 以降のオペレーティングシステムの暗号化機能で暗号化されたファイルやフォルダを復元することはできません。詳細については、「バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定 『64ページ』」を参照してください。これに対して、Acronis True Image の暗号化機能を使用して暗号化されたバックアップは復元することができます。

6.1.1.1 ブータブル メディアの作成

ブータブル メディアを作成する手順は、次のとおりです。

1. USB フラッシュ ドライブを差し込むか、空の CD または DVD を挿入します。
2. Acronis True Image Data Protection を起動します。
3. [ツール] セクションの [レスキュー メディア ビルダ] をクリックします。
4. 作成するメディア タイプを選択します。詳細については、「Acronis メディア ビルダ」を参照してください。
5. メディアの作成先を選択します。

- **CD**
- **DVD**
- **USB フラッシュ ドライブ** (Acronis ブータブル レスキュー メディアの場合のみ選択可能)

サポートされていないファイル システムがドライブにある場合、Acronis True Image によって FAT ファイル システムへのフォーマットが自動的に選択されます。

警告 完全にフォーマットすると、ディスク上のデータはすべて消去されます。

- **ISO イメージ ファイル**

.iso ファイルの名前とターゲット フォルダを指定してください。

.iso ファイルが作成されたら、CD または DVD に書き込むことができます。たとえば、Windows 7 以降では、内蔵の書き込みツールを使用してこれを行えます。

Windows エクスプローラで、作成した ISO イメージ ファイルをダブルクリックし、**[書き込み]** をクリックします。

6. **[実行]** をクリックします。

6.1.1.2 ブータブル メディアの起動パラメータ

ブータブル メディアの起動パラメータを設定することにより、ブータブル メディアの起動オプションを構成し、さまざまなハードウェアとの互換性を向上させることができます。

nousb、nomouse、noapic などのオプションが利用できます。上級ユーザー向けに用意されているパラメータです。ブータブル メディアからの起動をテスト中にハードウェアの互換性の問題が発生した場合は、製品のサポート センターにお問い合わせください。

起動パラメータを追加する手順は、次のとおりです。

- **[パラメータ]** フィールドにコマンドを入力します。
- 起動パラメータを指定したら、**[次へ]** をクリックして先に進みます。

Linux カーネルを起動する前に適用できる追加パラメータ

説明

次のパラメータを使用すると、Linux カーネルを特殊モードで読み込むことができます。

- **acpi=off**

ACPI を無効にします。ハードウェアの特定の構成に役立ちます。

- **noapic**

APIC (Advanced Programmable Interrupt Controller) を無効にします。ハードウェアの特定の構成に役立ちます。

- **nousb**

USB モジュールの読み込みを無効にします。

- **nousb2**

USB 2.0 のサポートを無効にします。このオプションを指定しても、USB 1.1 デバイスは動作します。このオプションを指定すると、USB 2.0 モードでは動作しない一部の USB ドライブを USB 1.1 モードで使用できます。

- **quiet**

このパラメータはデフォルトで有効になっており、起動メッセージは表示されません。このパラメータを削除すると、Linux カーネルが読み込まれるときに起動メッセージが表示されるようになり、Acronis プログラムが実行される前にコマンド シェルが提供されます。

- **nodma**

すべての IDE ディスク ドライブの DMA を無効にします。カーネルが一部のハードウェアでフリーズするのを防ぎます。

- **nofw**

FireWire (IEEE1394) のサポートを無効にします。

- **nopcmcia**

PCMCIA ハードウェアの検出を無効にします。

- **nomouse**

マウスのサポートを無効にします。

- **[モジュール名]=off**

モジュールを無効にします (例: **sata_sis=off**) 。

- **pci=bios**

PCI BIOS の使用を強制し、ハードウェア デバイスには直接アクセスしません。たとえば、コンピュータが標準以外の PCI ホスト ブリッジを備えているような場合にこのパラメータを使用することがあります。

- **pci=nobios**

PCI BIOS の使用を無効にします。ハードウェアへの直接アクセスのみを許可します。たとえば、BIOS が原因で起動時にクラッシュが発生すると考えられる場合にこのパラメータを使用することがあります。

- **pci=biosirq**

PCI BIOS の呼び出しを使用して、割り込みルーティング テーブルを取得します。これらの呼び出しは、一部のコンピュータではバグがあり、使用するとコンピュータがフリーズしますが、他のコンピュータでは、割り込みルーティング テーブルを取得する唯一の方法です。カーネルが IRQ を割り当てることができない場合、またはマザーボード上のセカンダリ PCI バスを検出できない場合は、このオプションを試してください。

- **vga=ask**

現在のビデオ カードで使用できるビデオ モードの一覧を取得し、ビデオ カードとモニタに最適なビデオ モードを選択できるようにします。自動的に選択されたビデオ モードがお使いのハードウェアに適合しない場合は、このオプションを試してください。

6.1.2 必要なときにレスキューメディアを確実に使用できるようにする

必要に応じてコンピュータを正常に復元できるように、レスキューメディアからのコンピュータの起動をテストしておく必要があります。また、レスキューメディアがコンピュータのデバイス（ハードドライブ、マウス、キーボード、ネットワークアダプタなど）をすべて認識することを確認する必要があります。

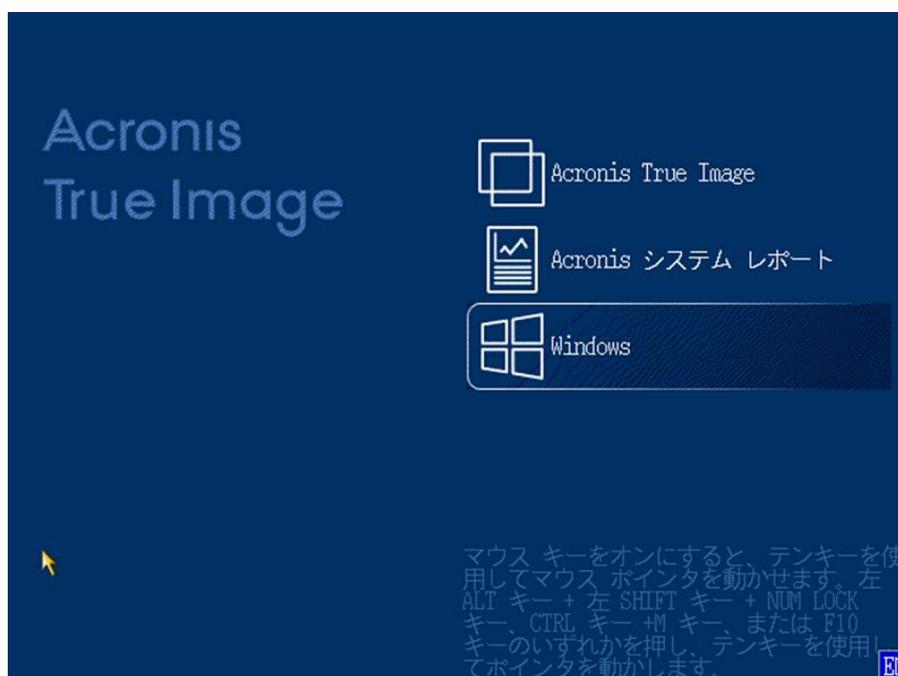
レスキュー メディアをテストするには、次の手順を実行します。

バックアップを保存するために外部ドライブを使用する場合、レスキュー CD から起動する前にそのドライブを接続しておく必要があります。接続しておかないと、そのドライブは検出されません。

1. レスキュー メディアから起動できるように、コンピュータを設定します。次に、レスキュー メディア デバイス（CD-ROM/DVD-ROM ドライブまたは USB スティック）が最初のブート デバイスになっていることを確認します。「BIOS での起動順の並び替え」を参照してください。
2. レスキュー CD がある場合は、「Press any key to boot from CD」というプロンプトが表示されたらすぐに任意のキーを押して CD からの起動を開始します。5 秒以内にキーを押さなかった場合は、コンピュータを再起動する必要があります。
3. 起動メニューが表示されたら、**[Acronis True Image]** を選択します。

ワイヤレス マウスが動作しない場合は、有線のマウスに交換してみてください。キーボードについても、同様です。

予備のマウスやキーボードがない場合は、Acronis サポートにご連絡ください。ご利用のマウスとキーボードのモデルに対応したドライバを含むカスタム レスキュー CD を作成します。適切なドライバを見つけてカスタム レスキュー CD を作成するには、ある程度の時間がかかることをご了承ください。また、一部のモデルには、対応できないことがあります。



4. プログラムが開始されたら、バックアップからいくつかのファイルをリカバリしてみることをお勧めします。リカバリをテストすることによって、そのレスキュー CD をリカバリに使用できることを確認することができます。さらに、システムのすべてのハードディスク ドライブが検出されているかどうかも確認できます。

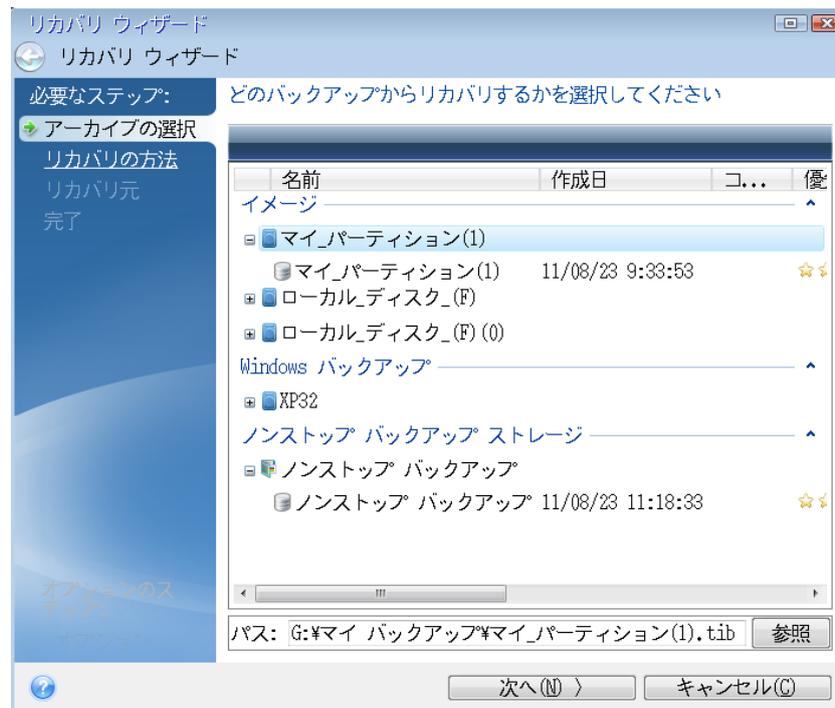
予備のハードドライブがある場合、そのハードドライブへのシステムパーティションの復元をテストすることを強くおすすめします。

リカバリをテストし、同時にドライブとネットワーク アダプタをチェックするには、次の手順を実行します。

1. ファイルのバックアップがある場合、ツールバーで **[リカバリ]** -> **[ファイルのリカバリ]** をクリックして、リカバリ ウィザードを起動します。

ディスクとパーティションのバックアップだけがある場合でも、リカバリ ウィザードを開始して同様の手順を実行します。その場合、**[リカバリの方法]** のステップで **[指定したファイルおよびフォルダをリカバリする]** を選択してください。

2. **[アーカイブのロケーション]** のステップでバックアップを選択し、**[次へ]** をクリックします。

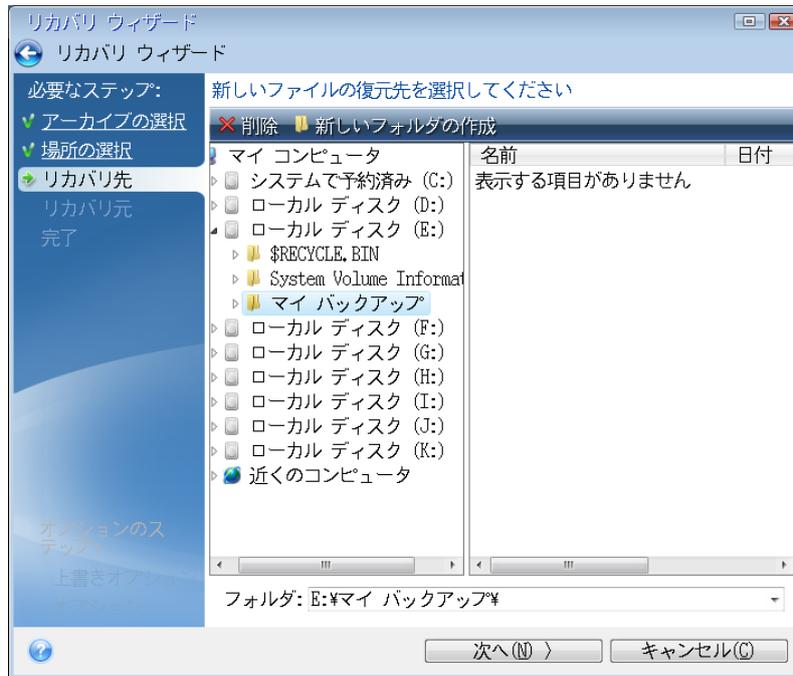


3. レスキュー CD でファイルをリカバリする場合、リカバリされるファイルには新しいロケーションしか選択できません。したがって、**[ロケーションの選択]** ステップでは **[次へ]** をクリックするのみの作業になります。
4. **[リカバリ先]** ウィンドウが開いたら、**[マイ コンピュータ]** の下にすべてのドライブが表示されていることを確認します。

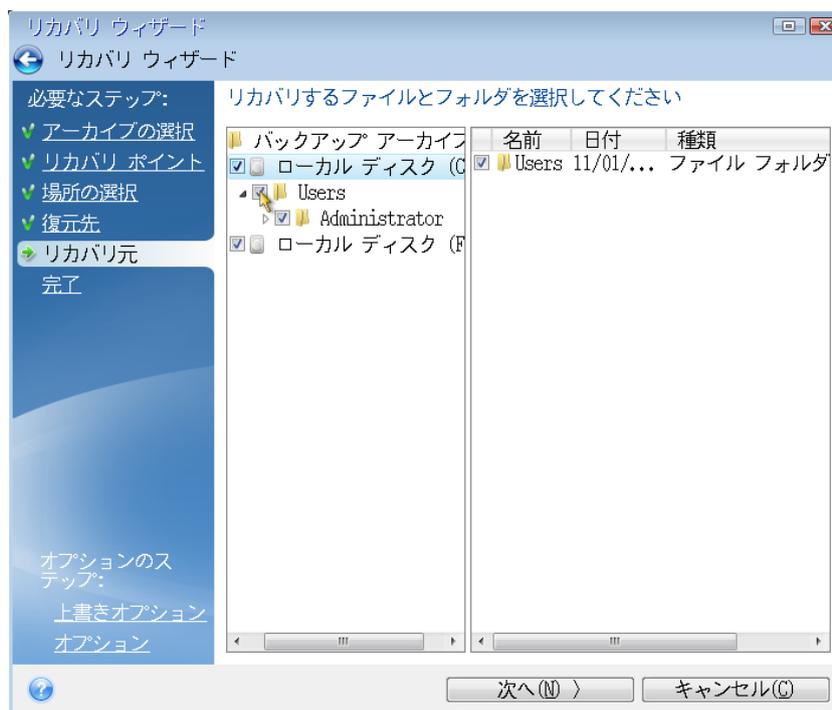
バックアップをネットワークに保存する場合は、ネットワークにアクセスできることも確認してください。

ネットワークにコンピュータがまったく表示されないが **[マイ コンピュータ]** の下に **[近くのコンピュータ]** アイコンが表示されている場合は、ネットワーク設定を手動で指定します。手動で指定するには、**[ツールとユーティリティ]** → **[オプション]** → **[ネットワーク アダプタ]** で使用できるウィンドウを開きます。

[マイ コンピュータ] で [近くのコンピュータ] アイコンが表示されない場合は、ネットワークカードまたは Acronis True Image Data Protection に付属しているカード ドライバに問題がある可能性があります。



5. ファイルの保存場所を選択して、[次へ] をクリックします。
6. リカバリするファイルのチェック ボックスをいくつかオンにして、[次へ] をクリックします。



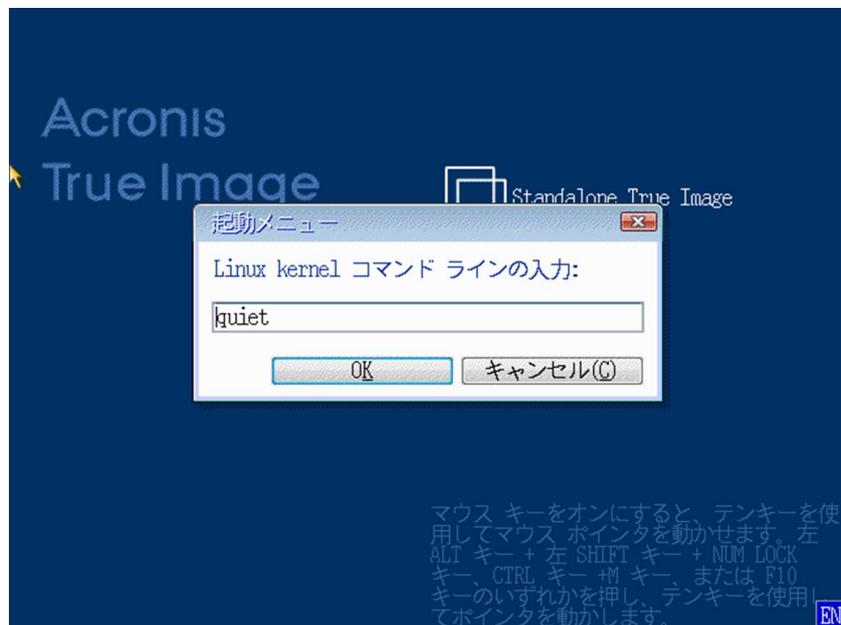
7. [概要] ウィンドウの **[実行]** をクリックして、リカバリを開始します。
8. 復元が完了したら、スタンドアロンの Acronis True Image を終了します。

必要な場合にレスキューCD が役に立つことをご理解いただけたと思います。

6.1.2.1 レスキューメディアからの起動時におけるビデオモードの選択

レスキューメディアからの起動時には、ビデオカードおよびモニタの仕様に応じて最適なビデオモードが自動で選択されます。ただし、使用しているハードウェアに適していないビデオモードが選択される場合もあります。このような場合は、次の手順で適切なビデオモードを選択できます。

1. レスキューメディアからの起動を開始します。ブートメニューが表示されたら、**Acronis True Image Data Protection** の項目にマウスポインタを置いて F11 キーを押します。
2. コマンドラインが表示されたら、「vga=ask」と入力して **[OK]** をクリックします。



3. ブートメニューで **[Acronis True Image Data Protection]** を選択し、レスキューメディアからの起動を続けます。使用できるビデオモードを表示するには、該当するメッセージが表示されたら Enter キーを押します。

4. 使用しているモニタに最適なビデオモードを選択し、その番号をコマンドラインに入力します。たとえば、「338」と入力すると、1600x1200x16 のビデオモードが選択されます（下図参照）。

```
333 1024x768x16 VESA 334 1152x864x16 VESA 335 1280x960x16 VESA
336 1280x1024x16 VESA 337 1400x1050x16 VESA 338 1600x1200x16 VESA
339 1792x1344x16 VESA 33A 1856x1392x16 VESA 33B 1920x1440x16 VESA
33C 320x200x32 VESA 33D 320x400x32 VESA 33E 640x400x32 VESA
33F 640x480x32 VESA 340 800x600x32 VESA 341 1024x768x32 VESA
342 1152x864x32 VESA 343 1280x960x32 VESA 344 1280x1024x32 VESA
345 1400x1050x32 VESA 346 1600x1200x32 VESA 347 1792x1344x32 VESA
348 1856x1392x32 VESA 349 1920x1440x32 VESA 34A 1366x768x8 VESA
34B 1366x768x16 VESA 34C 1366x768x32 VESA 34D 1680x1050x8 VESA
34E 1680x1050x16 VESA 34F 1680x1050x32 VESA 350 1920x1200x8 VESA
351 1920x1200x16 VESA 352 1920x1200x32 VESA 353 2048x1536x8 VESA
354 2048x1536x16 VESA 355 2048x1536x32 VESA 356 320x240x8 VESA
357 320x240x16 VESA 358 320x240x32 VESA 359 400x300x8 VESA
35A 400x300x16 VESA 35B 400x300x32 VESA 35C 512x384x8 VESA
35D 512x384x16 VESA 35E 512x384x32 VESA 35F 854x480x8 VESA
360 854x480x16 VESA 361 854x480x32 VESA 362 1280x720x8 VESA
363 1280x720x16 VESA 364 1280x720x32 VESA 365 1920x1080x8 VESA
366 1920x1080x16 VESA 367 1920x1080x32 VESA 368 1280x800x8 VESA
369 1280x800x16 VESA 36A 1280x800x32 VESA 36B 1440x900x8 VESA
36C 1440x900x16 VESA 36D 1440x900x32 VESA 36E 720x480x8 VESA
36F 720x480x16 VESA 370 720x480x32 VESA 371 720x576x8 VESA
372 720x576x16 VESA 373 720x576x32 VESA 374 800x480x8 VESA
375 800x480x16 VESA 376 800x480x32 VESA 377 1280x768x8 VESA
378 1280x768x16 VESA 379 1280x768x32 VESA
Enter a video mode or "scan" to scan for additional modes: _
```

5. Acronis True Image Data Protection が起動するまで待ってから、[ようこそ] 画面がモニタ上に適切に表示されていることを確認します。

他のビデオモードをテストするには、Acronis True Image Data Protection を閉じてから上記の手順を繰り返してください。

ハードウェアに最適なビデオモードを見つけたら、そのビデオモードを自動的に選択する新しいブータブルレスキューメディアを作成できます。

これを行うには、Acronis メディアビルダを起動して目的のメディアコンポーネントを選択し、[ブータブルメディアの起動パラメータ] のステップにおいてコマンドラインに接頭辞「0x」を付加してモードの番号を入力（この例では「0x338」）してから、通常通りにメディアを作成します。

6.2 Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ

動作

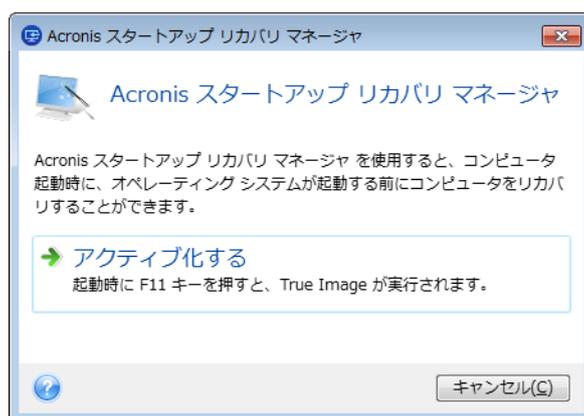
Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用すると、オペレーティング システムを読み込まずに Acronis True Image Data Protection を起動することができます。この機能を利用すれば、オペレーティング システムが起動しなくなったときでも、Acronis True Image Data Protection を使用して、破損したパーティションをリカバリすることができます。Acronis のリムーバブル メディアからコンピュータを起動する場合とは異なり、Acronis

True Image Data Protection の起動時には独立したメディアやネットワーク接続は必要ありません。

アクティブ化する方法

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化するには

1. Acronis True Image Data Protection を起動します。
2. [ツールとユーティリティ] タブで、[Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ] をクリックします。
3. 表示されたウィンドウで、[アクティブ化する] をクリックします。



使用方法

障害が発生した場合は、コンピュータの電源を入れて、「Press F11 for Acronis Startup Recovery Manager」というメッセージが表示されたら F11 キーを押します。スタンドアロン版の Acronis True Image Data Protection が起動します。このスタンドアロン版と完全版との違いはごくわずかです。

追加情報

スタンドアロンの Acronis True Image Data Protection で使用されるドライブ文字は、Windows のドライブ文字とは異なることがあります。たとえば、スタンドアロン版の Acronis True Image Data Protection の D: ディスクが、Windows の E: ディスクに対応していることもあります。ディスクのラベル、パーティション サイズ、ファイル システム、ドライブの性能、メーカー、およびモデル番号に関する情報を参照することによって、ディスクおよびパーティションを正しく特定することができます。

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャの、他のローダーに対する影響

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化すると、MBR (マスター ブート レコード) がスタートアップ リカバリ マネージャのブート コードで上書きされます。サード パーティ製のブート マネージャがインストールされている場合は、スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化した後に、そのブート マネージャを再度アクティブ化する必要があります。Linux のローダー (LiLo、GRUB など) を使用している場合は、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化する前に、ローダーを MBR ではなく、Linux の root (または boot) パーティションのブート レコードにインストールすることをお勧めします。

UEFI ブート メカニズムは BIOS のものと異なります。任意の OS ローダーまたはその他のブート プログラムは、対応するローダーへのパスを定義する、独自のブート変数を持ちます。すべてのローダーは、EFI システム パーティションと呼ばれる特別なパーティションに保存されます。UEFI ブート システムで、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化すると、独自のブート変数が書き込まれ、ブート順序が変更されます。この変数は変数のリストに追加されますが、リスト内の変数自体は変更されません。すべてのローダーは独立しており、相互に影響しないため、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャのアクティブ化の前後で、特に変更は必要ありません。

6.3 セキュリティとプライバシーのツール

注意:ご使用の *True Image* エディションでは一部の機能を使用できない場合があります。

Acronis True Image Data Protection には、ハードディスクドライブ全体と個々のパーティションのデータを確実に消去するためのユーティリティが含まれています。このユーティリティでは、個別ファイルを消去したり、システムでのユーザーの操作履歴を消去したりすることもできます。

古いハードディスク ドライブを新しい大容量のディスクに交換するとき、古いディスク上に個人的な機密情報が大量に残ってしまうことがあります。このような情報は、たとえディスクが再フォーマットされたとしても、復元できてしまうことがあります。

Acronis DriveCleanser は、ハードディスク ドライブやパーティション上の機密情報を消去するツールです。このツールに採用されている技術は、ほとんどの国や州の基準を満たすか

上回っています。データ消去の方法は、機密情報の重要性に応じてさまざまなものから選択することができます。

ファイル シュレッダーは、機能は同じですが、個々のファイルやフォルダに対して実行することができます。

データ消去方法については、このガイドの「ハードディスクの消去方法 『125ページ 』」で詳しく説明されています。

セクションの内容

システム クリーンアップ	116
ハードディスクの消去方法	125

6.3.1 システム クリーンアップ

システム クリーンアップ ウィザードを使用して、ユーザー名、パスワードなどの個人情報を含む、コンピュータ操作に関するすべての履歴を安全に削除することができます。

以下の処理を実行することができます。

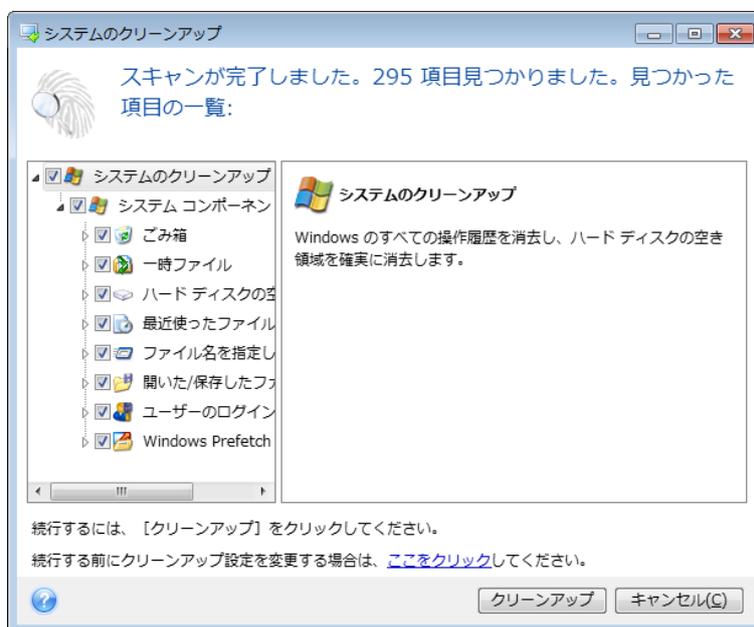
- **Windows のごみ箱**のデータを安全に消去します。
- **一時ファイル**を、該当する Windows フォルダから削除します。
- **ハード ディスクの空き領域**に以前保存されていた情報の痕跡をクリーンアップします。
- 接続されているディスクやローカル エリア ネットワーク内のコンピュータに対する**ファイルとコンピュータ検索**の履歴を削除します。
- **最近使ったドキュメント**の一覧を消去します。
- 「**ファイル名を指定して実行**」の一覧を消去します。
- **開いた/保存したファイル**の履歴を消去します。
- **ネットワーク認証情報**を使用してユーザーが接続したネットワーク プレースの一覧を消去します。
- Windows によって保存されている、最近実行したプログラムに関する情報を **Windows Prefetch ディレクトリ** から消去します。

Windows Vista と Windows 7 では、ファイルやコンピュータの検索に関する情報は保存されません。また、開いたファイルや保存したファイルの情報は別の方法でレジストリに保存されますので、ウィザードでは異なる方法でその情報が表示されます。

Windows はセッション終了までパスワードを保存するため、ネットワーク ユーザーの認証情報の一覧を消去しても、ログアウトまたはコンピュータの再起動によって現在の Windows セッションを終了するまでは処理は有効になりません。

システム クリーンアップ ウィザードを開始するには、**スタート ボタン** → **[Acronis]** (製品フォルダ) → **[True Image]** → **[ツールとユーティリティ]** → **[システム クリーンアップ]** の順にクリックします。

ウィザードを起動すると、Windows に保存されたユーザー操作の履歴が検索されます。検索が終了すると、ウィザード ウィンドウの上部に結果が表示されます。



検索結果を表示して、削除する項目を手動で選択することができます。

システム クリーンアップのデフォルトの設定を変更するには、システム クリーンアップ ウィザードの最初に表示されるウィンドウで、対応するリンクをクリックします。

[クリーンアップ] をクリックすると、検出された項目が削除されます。

6.3.1.1 クリーンアップの設定

クリーンアップの設定ウィンドウで、すべてのシステム コンポーネントのクリーンアップの設定を変更できます。設定の中には、すべてのコンポーネントに適用されるものもあります。

コンポーネントに対するクリーンアップの設定を変更する手順は、次のとおりです。

- ツリーの **[システム コンポーネント]** 項目を展開し、変更が必要なコンポーネントのクリーンアップ設定を選択します。クリーンアップ ウィザードでコンポーネントのスキャンを有効または無効にできます。この設定を行うには、**[有効]** チェックボックスをオンまたはオフにします。

必要に応じて、コンポーネントを展開してさらにカスタマイズすることもできます。カスタマイズできる項目には、データ消去方法、消去するファイル、ローカル ネットワーク内のコンピュータの検索に使用されたレジストリ検索文字列をクリーンアップするか否かなどがあります。カスタマイズするには、コンポーネントの近くにある三角形をクリックし、一覧からオプションを選択して設定を指定します。

- 目的のコンポーネントのプロパティを設定し、**[OK]** をクリックして設定を保存します。これらの設定は、次回クリーンアップ ウィザードを起動したときにデフォルトとして使用されます。

変更したクリーンアップ設定はいつでもプログラムのデフォルト設定に戻すことができます。戻すには、**[デフォルトに戻す]** ボタンをクリックしてください。

システム コンポーネント:

- ごみ箱
- 一時ファイル
- ハードディスクの空き領域
- 検索したコンピュータの一覧
- 検索したファイルの一覧
- 最近使用したドキュメントの一覧
- ファイル名を指定して実行の一覧
- 開いた/保存したファイルの履歴
- ユーザーのログイン情報

- Windows プリフェッチ ディレクトリ

6.3.1.2 デフォルトのクリーンアップ オプション

クリーンアップのデフォルトのオプションは、**[データ消去方法]** オプションのページの **[クリックするとこの設定を変更できます]** リンクをクリックして変更できます。

デフォルトのクリーンアップ オプションを変更する手順は、次のとおりです。

- 変更が必要なコンポーネントのクリーンアップ設定をツリーから選択します。
- オプションを変更したら、**[OK]** をクリックして設定を保存します。

変更したクリーンアップ設定はいつでもプログラムのデフォルト設定に戻すことができます。戻すには、**[デフォルトに戻す]** ボタンをクリックしてください。

全般

デフォルトでは、各クリーンアップ手順が終了するたびに **[概要]** ダイアログ ウィンドウが表示されます (**[概要の表示]** チェックボックスがオンになっている場合)。このウィンドウを表示する必要がない場合は、チェックボックスをオフにしてください。

クリーンアップ オプション

システム クリーンアップには、よく知られているさまざまなデータ消去方法が使用されます。ここでは、他のすべてのコンポーネントでデフォルトで使用される共通のデータ消去方法を選択できます。

データ消去方法については、このガイドの「ハード ディスクの消去方法 『125ページ 』」で詳しく説明されています。

6.3.1.3 特定のクリーンアップ オプション

次のクリーンアップ オプションをカスタマイズできます。

- データ消去方法
- デフォルト オプション
- ファイル
- ドライブ空き領域

- コンピュータ
- コマンド
- ネットワーク プレースのフィルタ

データ消去方法

システム クリーンアップには、よく知られているさまざまなデータ消去方法が使用されます。ここでは使用するデータ消去方法を選択する必要があります。

- **[共通の方法を使用する]** - このパラメータがオンの場合は、デフォルトの方法が使用されます（初期設定は「高速」方式です）。

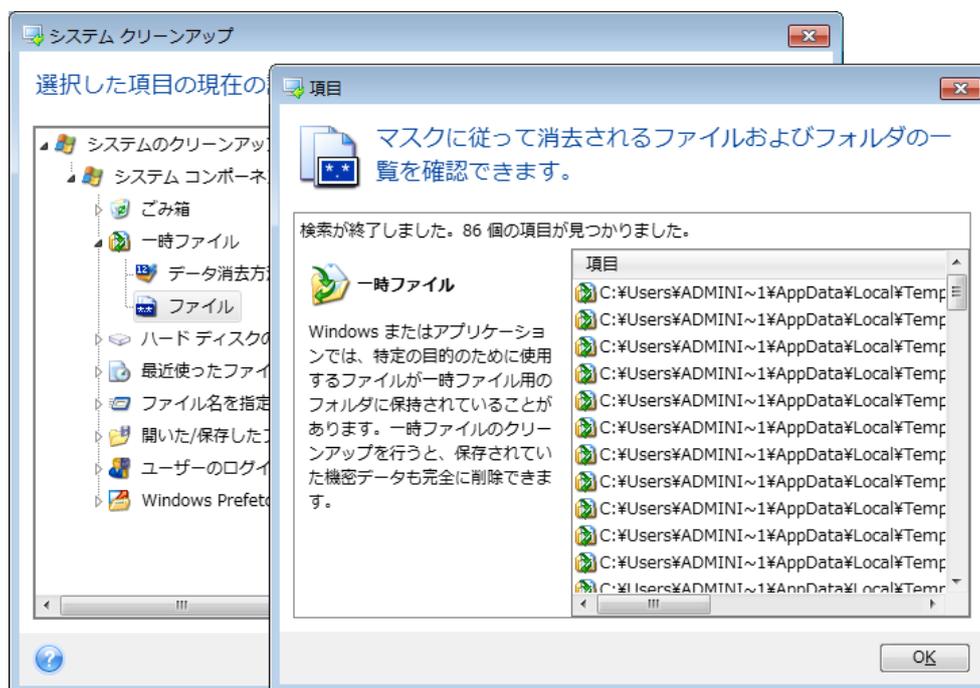
別の消去方法をデフォルトとして設定するには、該当するリンクをクリックします。

- **[このコンポーネントにユーザー定義の方法を使用する]** - このパラメータを選択すると、あらかじめ設定されているデータ消去方法をドロップダウン リストから選択できます。

データ消去方法については、このガイドの「ハード ディスクの消去方法 『125ページ 』」で詳しく説明されています。

ファイル

[ファイル] の設定では、システム クリーンアップ ウィザードによってクリーンアップするファイルを指定します。検索文字列を指定することもできます。



Windows オペレーティング システムでは、ファイル名の全体または一部を検索文字列で表現することができます。検索文字列には、任意の英数字と、カンマなどの記号およびワイルドカードを使用できます。値の例を次に示します。

- *.* - ファイル名や拡張子にかかわらず、すべてのファイルが削除されます。
- *.doc - 指定された拡張子ファイル（この例では Microsoft Word の文書ファイル）が削除されます。
- read*.* - ファイル名が「read」で始まるファイルが拡張子に関係なくすべて削除されます。
- read?.* - 「read」で始まる 5 文字のファイル名を持つファイルが（5 文字目は任意の文字）、拡張子に関係なくすべて削除されます。

たとえば上記の最後の検索文字列では、read1.txt および ready.doc ファイルは削除されますが、readiness.txt は、ファイル名が 5 文字より長いいため削除されません（拡張子はファイル名の文字数に含まれません）。

検索文字列を複数入力するには、次の例のようにセミコロンで区切ります。

.bak;.tmp;*.~.. (検索文字列の間にスペースは不要)

検索文字列の 1 つ以上に名前が一致するファイルが、すべて削除されます。

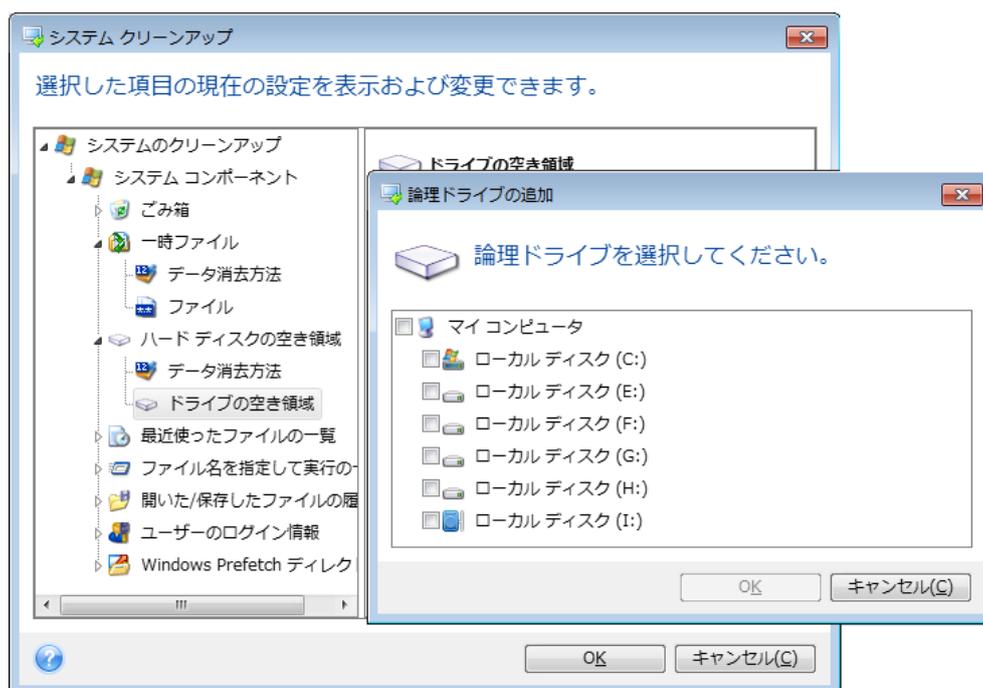
[ファイル] の設定値を入力した後で、検索文字列と一致するファイルの一覧を表示することができます。表示するには、**[ファイルの表示]** をクリックします。見つかったファイルの名前がウィンドウに表示されます。これらのファイルがクリーンアップの対象となります。

ドライブ空き領域

ここでは、空き領域をクリーンアップするドライブを手動で指定できます。デフォルトでは、使用可能なすべてのドライブの空き領域がシステム クリーンアップでクリーンアップされます。

このパラメータの設定を変更する場合は、**[削除]** ボタンを使用すると、空き領域をクリーンアップしないドライブを一覧から削除することができます。

そのドライブを再び一覧に追加するには、**[追加]** ボタンをクリックします。



コンピュータ

[コンピュータ] 設定は、ローカル ネットワーク内のコンピュータの検索に使用したレジストリ検索文字列のクリーンアップに使用されます。この検索文字列に保持される情報は、ネットワーク内でユーザーが何を探していたかを表します。機密性を維持するには、このような項目も削除する必要があります。

[コンピュータ] 設定は、**[ファイル]** 設定と似ています。この文字列には、コンピュータ名の全体または一部をセミコロンで区切って入力します。指定できる数の制限はありません。コンピュータの検索文字列の削除は、Windows の規則に従い、**[コンピュータ]** 設定値との比較に基づいて行われます。

ローカル ネットワーク コンピュータ検索文字列をすべて削除したい場合は、この設定をデフォルト値のままにしてください。デフォルト設定を復元する手順は、次のとおりです。

- **[検索したコンピュータの一覧]** コンポーネントを選択します。
- **[有効]** チェックボックスがオンになっていることを確認します。
- **[コンピュータ]** 設定を選択し、そのテキスト ボックスの内容が消去されていることを確認します。

こうすると、すべてのコンピュータ検索文字列がレジストリから削除されます。

[コンピュータ] の設定値を入力した後に、システム クリーンアップ ウィザードによってレジストリ内で検出された検索文字列を一覧表示することができます。表示するには、[コンピュータの表示] をクリックします。ネットワーク上で検索されたコンピュータ名（完全なコンピュータ名またはその一部）がウィンドウに表示されます。これらの項目が削除されます。

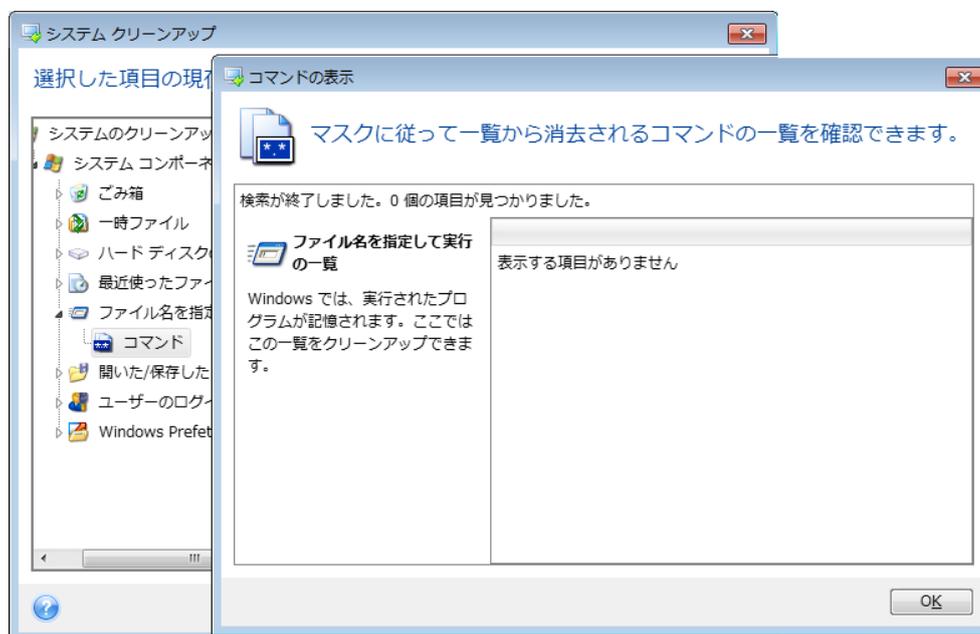
「コマンド」の設定

ここでは、**Windows の実行一覧**のクリーンアップ時に削除するコマンドを選択できます。

このテンプレートには、任意のコマンド名を含めるか、次のようにコマンドの一部をセミコロンで区切って含めることができます。

help; cmd; reg

この手順により、名前に対応したコマンド、または入力した名前またはその一部を含むコマンドが削除されます。



ネットワーク プレースのフィルタ

ここでは、過去に認証情報（ユーザー名およびパスワード）を入力して接続したネットワーク プレース、サーバー、FTP サーバー、ネットワーク共有デバイスなどのホスト名または IP アドレスを入力できます（セミコロンで区切って入力）。ホスト名や IP アドレスを入力するときは、* および ? のワイルドカードを使用できます。

[ネットワーク プレースを表示する] をクリックすると、削除しようとしている認証情報を使用して過去にアクセスしたネットワーク プレースの一覧が表示されます。

6.3.1.4 プレビュー

スキャンが終了すると、その結果がウィザード ウィンドウの上の部分に表示されます。デフォルトでは、クリーンアップ用にすべてのシステム コンポーネントがスキャンされます。どのコンポーネントをスキャンし、どのコンポーネントをスキャン対象から除外するかをカスタマイズするには、クリーンアップのデフォルト設定を変更します。

検索結果を表示して、クリーンアップする項目の選択と残す項目の選択解除を手動で行うことができます。正しく選択できるように、どのコンポーネントにも簡単な説明が付いています。コンポーネントの名前をクリックすると、その説明がウィンドウの右側に表示されます。

コンポーネントを選択/選択解除する手順は、次のとおりです。

- システム クリーンアップ ツリーの **[システム コンポーネント]** 項目を展開し、クリーンアップするコンポーネントのチェックボックスをオンにします。コンポーネントをクリーンアップしない場合は、そのコンポーネントのチェックボックスをオフにします。
- 必要に応じて、コンポーネントを展開し、さらに下位の内容をオンまたはオフにすることもできます。

クリーンアップするコンポーネントを指定したら、**[クリーンアップ]** をクリックして先に進みます。

Windows Vista と Windows 7 では、ファイルやコンピュータの検索に関する情報は保存されません。また、開いた/保存したファイルの情報をレジストリに保存する方法も異なるため、ウィザードでのこの情報の表示方法も異なります。

6.3.1.5 クリーンアップの進行状況

処理のステータス ウィンドウでは、現在の処理の状態についての情報が表示されます。

進行状況バーは、選択した処理の完了レベルを示しています。

場合によっては、処理が完了するまでに時間がかかることがあります。このような場合に **[終了後コンピュータをシャットダウンする]** チェックボックスをオンにすると、処理が完了し

たときに Acronis True Image Data Protection によってコンピュータがシャットダウンされます。

6.3.2 ハードディスクの消去方法

問題点

情報をハードディスクから削除するときに、安全ではない手段（たとえば Windows での単純な削除）を使用すると、その情報は簡単に復元できてしまいます。特殊な機器を使用すれば、繰り返し書き込まれた情報でも復元できます。

漏洩のメカニズム

データとは 1 と 0 という 2 進数の連続としてハード ディスクに記録され、それぞれの数値はディスク上で異なった磁化の形態で表現されています。それぞれの数値はディスクの一部を異なった状態に磁化することによって表現されています。

一般的に言って、ハードディスクに書き込まれた 1 はハードディスク コントローラによって 1 として読み取られ、0 は 0 として読み取られます。しかし、0 の上に 1 と書き込まれた場合、読み出された値はたとえば 0.95 になり、その逆も同様で、1 の上に 1 と書き込まれた場合、結果は 1.05 となります。このような違いは、コントローラにとっては無関係です。しかし、特殊な機器を使用すれば、「下に隠れている」0 と 1 のシーケンスを簡単に読み取ることができます。

Acronis で使用できる情報消去方法

情報の抹消を保証する技術に関する具体的な理論は、Peter Gutmann 氏による論文で紹介されています。『Secure Deletion of Data from Magnetic and Solid-State Memory』(http://www.cs.auckland.ac.nz/~pgut001/pubs/secure_del.html) を参照してください。

No.	アルゴリズム (書き込み方法)	工程数	記録
1.	米国国防省準拠 DoD 5220.22-M 方式	4	1 第 1 工程: 各セクタの各バイトにランダムに選択した記号。第 2 工程: 第 1 工程で書き込まれた値の補数。第 3 工程: 再度、ランダムな記号。第 4 工程: 書き込み結果の検証。

No.	アルゴリズム (書き込み方法)	工程数	記録
2.	米国海軍準拠 NAVSO P-5239-26-RLL 方式	4	1 第 1 工程: 全セクタに 0x01。第 2 工程: 0x27FFFFFF。第 3 工程: ランダムな記号のシーケンス。第 4 工程: 検証。
3.	米国海軍準拠 NAVSO P-5239-26-MFM 方式	4	1 第 1 工程: 全セクタに 0x01。第 2 工程: 0x7FFFFFFF。第 3 工程: ランダムな記号のシーケンス。第 4 工程: 検証。
4.	ドイツ VSITR 方式	7	1 第 1~第 6 工程: 0x00 と 0xFF を交互に。第 7 工程: 0xAA。つまり、順番に 0x00、0xFF、0x00、0xFF、0x00、0xFF、0xAA となる。
5.	ロシア GOST P50739-95 方式	1	セキュリティ レベルが 6~4 のシステムの場合、各セクタの各バイトに論理値ゼロ (数値 0x00)。 セキュリティ レベルが 3~1 のシステムの場合、各セクタの各バイトにランダムに選択された記号 (数値)。
6.	グートマン (Peter Gutmann) 方式	35	非常に高度な方式。この方式は、ハード ディスクの情報抹消についての Peter Gutmann 氏の理論に基づいている (『Secure Deletion of Data from Magnetic and Solid-State Memory』を参照)。
7.	Bruce Schneier 方式	7	Bruce Schneier が著書『応用暗号論』で提唱している 7 回の工程で上書きする方法。11 工程目で 0xFF を、2 工程目で 0x00 を書き込み、その後、暗号的にセキュリティの高い擬似ランダム シーケンスで 5 工程の書き込みを行う。
8.	高速	1	全セクタに対して論理値ゼロ (数値 0x00) で抹消。

6.4 イメージのマウント

イメージを仮想ドライブとしてマウントすると、物理ドライブと同じようにアクセスすることができます。これにより、次のことが可能になります。

- 新しいディスクがシステムに表示される。
- Windows エクスプローラやその他のファイル マネージャでイメージの内容を確認できる。

このセクションで説明した処理は、*FAT* および *NTFS* でファイル システムでのみサポートされます。ディスク バックアップが *FTP* サーバーに保存されている場合には、マウントできません。

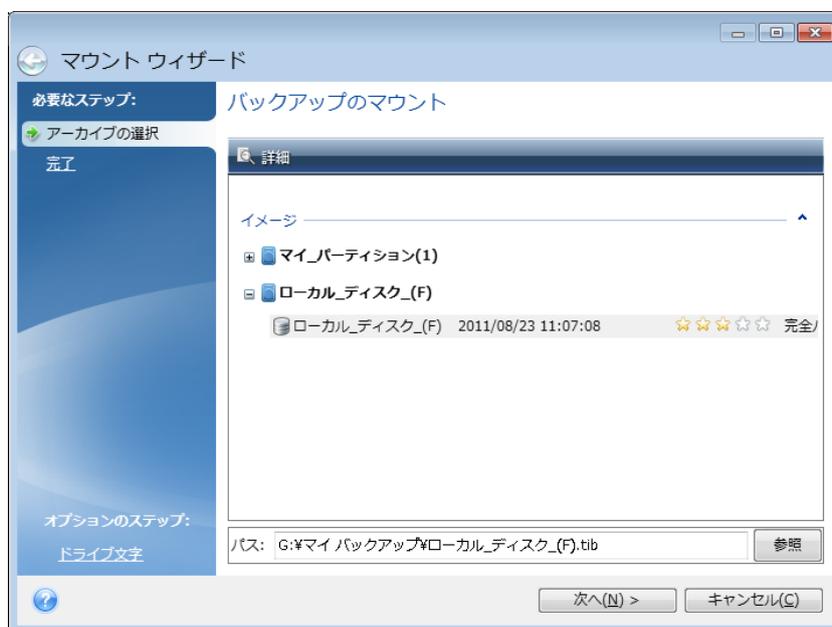
イメージのマウント方法

1. Windows エクスプローラーで、マウントするバージョンのファイルを右クリックし、**[イメージのマウント]** を選択します。

マウント ウィザードが開きます。

2. 作成日時に基づいてマウント対象のバックアップを選択します。これにより、特定時点のデータの状態を参照できます。

ディスクが 1 つのパーティションで構成されている場合を除き、ディスク全体のイメージをマウントすることはできません。



3. (オプションの手順) **[ドライブ文字]** で、仮想ディスクに割り当てる文字を **[マウントドライブ文字]** ドロップダウン リストから選択します。パーティションをマウントしない場合は、ドロップダウン リストから **[マウントしない]** を選択するか、該当するパーティションのチェックボックスをオフにします。
4. **[実行]** をクリックします。
5. イメージが接続されると、Windows エクスプローラーが起動し、仮想ディスクの内容が表示されます。

6.5 イメージのアンマウント

仮想ディスクの維持にはかなりのシステム リソースが消費されるため、必要な操作がすべて終了したら、仮想ディスクをマウント解除することをお勧めします。

イメージのマウント解除を行うには、以下のいずれかを実行します。

- Windows エクスプローラで、ディスク アイコンを右クリックして、**[マウント解除]** を選択します。
- コンピュータを再起動するかシャットダウンします。

7 トラブルシューティング

セクションの内容

Acronis システム レポート	129
クラッシュ ダンプの収集方法	130
Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラム	131

7.1 Acronis システム レポート

製品のサポート センターへのお問い合わせの際には、通常、問題を解決するためにご使用のシステムに関する情報が必要になります。この情報を取得する処理は、簡単に実行できない場合や時間がかかる場合があります。システム レポートの生成ツールを利用すれば、この手順を簡素化できます。ツールを使うと必要なすべての技術情報を含むシステム レポートが生成されます。この情報をファイルに保存し、必要に応じて、作成したファイルを問題の報告に添付して製品のサポート センターに送信することができます。このようにツールを使えば、問題解決の手順を簡素化し、解決に要する時間を短縮することができます。

システム レポートを生成するには、以下のいずれかを実行します。

- メイン プログラム ウィンドウで疑問符をクリックして **[システム レポートを生成する]** を選択します。
- Windows の**[スタート]**メニューで、**[すべてのプログラム]**→**[Acronis]**→**[True Image]**→**[ツールとユーティリティ]**→**[Acronis システムレポート]**の順にクリックします。
- **Ctrl+F7** キーを押します。このキーの組み合わせは、Acronis True Image Data Protection が他の処理を実行中であっても、使用できます。

レポート生成後に、次の操作を行います。

- 生成されたシステム レポートをファイルに保存するには、**[保存]** をクリックし、表示されたウィンドウで、作成されるファイルを保存するロケーションを指定します。
- レポートを保存せずにメイン プログラム ウィンドウを終了するには、**[キャンセル]** をクリックします。

- ブータブルレスキューメディアを作成すると、**Acronis システムレポートツール**が個別のコンポーネントとしてそのメディアに自動的に配置されます。このコンポーネントを使用して、コンピュータが起動しないときにシステムレポートを生成できます。メディアから起動後、Acronis True Image Data Protection を実行せずにレポートを生成できます。USB フラッシュ ドライブを接続し、**[Acronis システム レポート]** アイコンをクリックします。生成されたレポートは USB フラッシュ ドライブに保存されます。

コマンド プロンプトからのシステム レポートの作成

1. 管理者として Windows コマンド プロセッサ (cmd.exe) を実行します。
2. 現在のディレクトリを Acronis True Image Data Protection インストール フォルダに変更します。そのためには次のコマンドを入力します。

```
cd C:\Program Files (x86)\Acronis\True Image
```

3. システム レポート ファイルを作成するには、次のコマンドを入力します。

```
SystemReport
```

SystemReport.zip ファイルが現在のフォルダに作成されます。

別の名前でレポート ファイルを作成する場合は、<file name> の代わりに新しい名前を入力します。

```
SystemReport.exe /filename:<file name>
```

7.2 クラッシュ ダンプの収集方法

Acronis True Image Data Protection または Windows の異常終了はさまざまな理由で発生する可能性があるため、各異常終了の状況を個別に調べる必要があります。Acronis カスタマー サービスに次のような情報を提供すると役に立つことがあります。

Acronis True Image Data Protection が異常終了した場合は、次の情報を提供してください。

1. 問題が発生する前に実行した手順の正確な順序の説明。
2. クラッシュ ダンプ。このようなダンプの収集方法については、Acronis サポート ナレッジ ベース (KB) の記事 (<http://kb.acronis.com/content/27931>) を参照してください。

Acronis True Image Data Protection が原因で Windows が異常終了した場合は、次の情報を提供してください。

1. 問題が発生する前に実行した手順の正確な順序の説明。
2. Windows のダンプ ファイル。このようなダンプの収集方法については、Acronis サポート KB の記事 (<http://kb.acronis.com/content/17639>) を参照してください。

Acronis True Image Data Protection が異常停止した場合は、次の情報を提供してください。

1. 問題が発生する前に実行した手順の正確な順序の説明。
2. プロセスのユーザーダンプ。Acronis サポート KB の記事 (<http://kb.acronis.com/content/6265>) を参照してください。
3. Process Monitor のログ。Acronis サポート KB の記事 (<http://kb.acronis.com/content/2295>) を参照してください。

この情報にアクセスできない場合は、ファイルをアップロードするための FTP リンクについて Acronis サポート センターに問い合わせてください。

これらの情報は解決策を見つけるための時間の短縮に役立ちます。

7.3 Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラム

Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラム (CEP) は、Acronis のお客様が、Acronis 製品の機能、設計、および開発に貢献できる新しい手段です。このプログラムにより、お客様は、ホスト コンピュータや仮想マシンのハードウェア構成、使用頻度が最も多い（および少ない）機能、発生する問題の性質に関する情報など、さまざまな情報を提供できます。この情報を基にして、お客様が頻繁に使用する Acronis 製品と機能を向上させることができます。

いずれかを選択してください。

1. サイドバーの **[ヘルプ]** をクリックして、**[Acronis True Image のバージョン情報]** をクリックします。
2. プログラムへの参加をやめるには、**[Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラムに参加する]** をオフにします。

このプログラムへの参加を選択された場合、技術的な情報が 90 日ごとに自動的に収集されます。氏名、住所、電話番号、キーボード入力などの個人データは収集されません。CEP への参加は任意です。ソフトウェアの改善と機能拡張を提供し、お客様のニーズをさらに満たしていくことを最終的な目的としています。

著作権情報

Copyright © Acronis International GmbH, 2002-2016. All rights reserved.

Acronis、Acronis Compute with Confidence、Acronis 復元] マネージャ、Acronis セキュアゾーン、Acronis True Image、Acronis Try&Decide、および Acronis ロゴは、Acronis International GmbH の商標です。

Linux は Linus Torvalds 氏の登録商標です。

VMware および VMware Ready は、米国およびその他地域での VMware, Inc. の商標または登録商標です。

Windows および MS-DOS は、Microsoft Corporation の登録商標です。

本ドキュメントで参照されるその他すべての商標および著作権は、各所有者に帰属します。

著作権者の明示的な許可なしに、本ドキュメントの実質的な改変版の配布を禁じます。

著作権者からの事前の許可がない限り、本著作物および派生著作物を一般的な（紙の）書籍として商業目的で配布することを禁じます。

ドキュメントは「現状のまま」で提供され、商品性の保証、特定目的の適合性、または権利の非侵害についての保証を含むすべての表明および保証は、明示的か黙示的かを問わず法律で認められる最大限の範囲で免責されます。

ソフトウェアやサービスにサードパーティコードが含まれていることがあります。このようなサードパーティのライセンス条件については、インストールのルートディレクトリにある license.txt ファイルに詳細が記載されています。ソフトウェアやサービスで使用されているサードパーティコードおよび関連するライセンス条件の最新リストは、<http://kb.acronis.com/content/7696> でいつでも確認できます。

Acronis の特許取得済みの技術

この製品で使用されているテクノロジーは、1 つ以上の米国特許番号 (7,047,380、7,275,139、7,281,104、7,318,135、7,353,355、7,366,859、7,475,282、7,603,533、7,636,824、7,650,473、7,721,138、7,779,221、7,831,789、7,886,120、7,895,403、7,934,064、7,937,612、7,949,635、7,953,948、7,979,690、8,005,797、8,051,044、8,069,320、8,073,815、8,074,035、8,145,607、8,180,984、8,225,133、8,261,035、8,296,264、

8,312,259、8,347,137、8,484,427、8,645,748、8,732,121 および特許出願中) の対象として保護されています。

8 用語集

A

Acronis スタートアップリカバリ マネージャ

注意:この機能は、ご使用の *True Image* エディションでは使用できない場合があります。

起動時に F11 キーを押すことでスタンドアロン版の Acronis True Image Data Protection を開始できるようにする保護ツールです。Acronis スタートアップリカバリマネージャを使用すると、レスキューメディアは不要となります。

Acronis スタートアップリカバリマネージャは、特にモバイル ユーザーにとって便利です。障害が発生したら、ユーザーはコンピュータを再起動し、「F11 キーを押して Acronis スタートアップリカバリマネージャを実行します...」というプロンプトが表示されたら F11 キーを押し、通常のブータブル メディアと同じ方法でデータ復元を実行します。

制限事項: ダイナミック ディスク上に作成することはできません。LILO や GRUB などのブート ロードを手動で設定する必要があります。サードパーティ製のロードを再有効化する必要があります。

イメージ

ディスク バックアップ 『135ページ』と同じです。

オンライン バックアップ

オンライン バックアップ: Acronis オンラインバックアップを使用して作成されるバックアップです。オンライン バックアップはオンライン ストレージと呼ばれる特別なストレージに保存され、インターネット経由でアクセスできます。オンライン バックアップの主な利点は、すべてのバックアップがリモートの場所に保存されることです。これにより、ユーザーのローカルなストレージとは関係なく、すべてのバックアップ データの安全が保証されます。オンライン ストレージの使用を開始するには、サービスを申し込む必要があります。オンライン バックアップは日本では提供されておられませんのでご了承ください。

ディスク バックアップ (イメージ)

ディスクまたはパーティションのセクタベースのコピーをパッケージした形式のバックアップ 『136ページ』です。通常は、データを含むセクタのみコピーされます。Acronis True Image Data Protection では、すべてのディスク セクタをそのままコピーするオプションが用

意されています。これにより、サポートされていないファイル システムのイメージ作成が可能になります。

ノンストップ プロテクション

注意:この機能は、ご使用の True Image エディションでは使用できない場合があります。

ノンストップ プロテクション: 有効にするとノンストップ バックアップが実行される処理です。

バックアップ

1. バックアップ処理 『136ページ』と同じです。
2. バックアップ設定を使用して作成、管理するバックアップ バージョンのセットです。バックアップには、完全 『137ページ』バックアップと増分 『138ページ』バックアップの両方の方法で作成された複数のバックアップ バージョンが含まれる場合があります。同じバックアップに属するバックアップ バージョンは、通常同じ場所に保存されます。

バックアップ バージョン

単一のバックアップ処理 『136ページ』の結果。物理的には、特定の日時にバックアップされたデータのコピーを含む単独または一連のファイルです。Acronis True Image Data Protection によって作成さ

れたバックアップ バージョン ファイルの拡張子は TIB です。バックアップ バージョンの統合による TIB ファイルもバックアップ バージョンと呼ばれます。

バックアップ バージョン チェーン

最初の完全バックアップ バージョンと、後続の 1 つまたは複数の増分バックアップ バージョンから構成される、最低 2 つのバックアップ バージョン 『136ページ』からなる一連のバックアップ バージョンです。バックアップ バージョン チェーンは、次の完全バックアップ バージョン (存在する場合) まで続きます。

バックアップ処理

データを特定の日時の状態に戻すため、コンピュータのハード ディスクに存在しているデータのコピーを作成する処理。

バックアップ設定

新しいバックアップの作成時にユーザーが設定するルールのセットです。このルールによって、バックアップ処理を制御します。後でバックアップ設定を編集し、バックアップ処理を変更または最適化することができます。

ブータブル メディア

Acronis True Image Data Protection のスタンドアロン バージョンを含む物理的なメディア (CD、DVD、USB フラッシュドライブ、またはコンピュータの BIOS によってブート デバイスとしてサポートされるその他のメディア)。

ブータブル メディアは次の操作に最もよく使用されます。

- 起動できないオペレーティング システムのリカバリ
- 破損したシステムで壊れずに残ったデータへのアクセスとバックアップ
- ベア メタル上のオペレーティング システムの配置
- サポートされていないファイル システムを持つディスクのセクタ単位のバックアップ

ベリファイ

特定のバックアップ バージョン 『136ページ』からデータをリカバリできるかどうかを確認する処理です。

何をベリファイするかにより、次のようになります。

- 完全バックアップ バージョン 『137ページ』: 完全バックアップ バージョンのみがベリファイされます。

- 増分バックアップ バージョン 『138ページ』: 最初の完全バックアップ バージョン、選択された増分バックアップ バージョン、および選択された増分バックアップ バージョンまでのバックアップ バージョンのチェーン全体 (ある場合) がベリファイされます。

漢字

完全バックアップ

1. バックアップ対象として選択されたすべてのデータを保存するために使用されるバックアップ方法。
2. 完全バックアップ バージョン 『137ページ』を作成するバックアップ処理。

完全バックアップ バージョン

バックアップ対象として選択されたすべてのデータを含む、それ自体で完結するバックアップ バージョン 『136ページ』。完全バックアップ バージョンからデータを復元する場合は、他のバックアップ バージョンにアクセスする必要はありません。

差分バックアップ

注意:この機能は、ご使用の True Image エディションでは使用できない場合があります。

1. バックアップ内で直近の完全バックアップ バージョン 『137ページ』が作

成されてから変更されたデータの保存に使用されるバックアップ方法。

2. 差分バックアップ バージョン 『138ページ』を作成するバックアップ処理。

差分バックアップ バージョン

注意:この機能は、ご使用の *True Image* エディションでは使用できない場合があります。

差分バックアップ バージョンには、前回の完全バックアップ バージョンに対するデータの変更点が保存されます。差分バックアップ バージョンからデータをリカバリするには、対応する完全バックアップ バージョンにアクセスする必要があります。

増分バックアップ

注意:この機能は、ご使用の *True Image* エディションでは使用できない場合があります。

1. バックアップ内で直近のバックアップ バージョン 『136ページ』（すべての種類）が作成されてから変更されたデータを保存するために使用されるバックアップ方法。
2. 増分バックアップ バージョン 『138ページ』を作成するバックアップ処理。

増分バックアップ バージョン

注意:この機能は、ご使用の *True Image* エディションでは使用できない場合があります。

前回のバックアップ バージョンに対するデータの変更点が保存されるバックアップ バージョン 『136ページ』。増分バックアップ バージョンからデータを復元するには、同じバックアップ 『136ページ』から他のバックアップ バージョンにアクセスする必要があります。

復元

復元とは、壊れたデータをバックアップ 『136ページ』に保存されている以前の正常な状態に戻す処理のことです。